

# 牛頸窯跡群と九州の須恵器生産体制

八世紀以降を中心として

石木秀啓

The Remains of Ushikubi Kilns and the Kyushu Sue Ware Production System from the End of the 8th Century

ISHIKI Hideaka

はじめに

- ①牛頸窯跡群の生産動向
  - ②九州各国の須恵器生産動向
  - ③九州の須恵器生産動向から見た変化と画期
  - ④まとめ
- おわりに

## 【論文要旨】

西海道、すなわち現在の九州における八世紀以降の須恵器窯跡群の生産動向と窯構造・生産器種の変遷を、筑前牛頸窯跡群の事例を中心に見ていった。その結果、筑前国では七世紀後半頃になると牛頸窯跡群に窯跡が集中し、二国一窯体制へと移行する。これは、この時期に成立する大宰府政庁へ向けての生産が考えられ、製品の広範な流通状況からこの時期九州では大宰府中心の生産体制がとられたと考えられる。しかし、八世紀中頃から後半になると、九州各国では新たな生産地の出現や既存の生産地の再編が認められる。この時期、牛頸窯跡群では甕・大甕の生産が認められなくなり、窯も小型のもののみとなる。それに代わるように、大宰府周辺では肥後で生産された大甕の出土が認められるようになる。これを牛頸窯跡群で生産しない甕を肥後から搬入する「地域間分業」と考え、大宰府による須恵器生産政策の存在を考えた。また、この時期以降から九世紀代には肥後国で須恵器生産が盛んとなり、製品は各国へもたらされ、各国の窯跡群の製品にも肥後国の影響が認められる。このことから、八世紀中

頃から後半以降は大宰府中心の生産体制が徐々に肥後国を中心とした生産体制へと変化するものと考えられ、九州では時期によって生産の中心地が移っている状況が伺えた。

九州各国の須恵器生産体制は、筑前国以外にも一時的に二国一窯体制を目指したと考えられる国もあるが、基本的には平野などの地形的なまとまりを単位とする地域レベルの生産体制が整えられたようである。特に肥後国は八世紀中頃から後半にかけて生産が盛んとなる窯跡群が多く、地域レベルの生産体制が整備された良好なモデルである。

肥後国では、九世紀代には須恵器生産だけでなく、鉄生産も集中するようになり、大宰府政庁および周辺官衙群は停滞する状況が明らかにされている。このことは、生産を取り巻く地域社会の在り方が八世紀代とは変容していると考えられるが、その背景は明らかでなく今後の検討課題である。

## はじめに

古代の土器生産において、五世紀初頭ごろに伝来した須恵器は窯という焼成専用の構築物が必要であり、製作にあたってはロク口を使用するなど、それまでとは全く異なる技術の下に生産がおこなわれる。このため、須恵器研究は単に遺物の編年だけではなく、焼成に使用された窯跡についても分布と変遷から当時の生産体制について研究がおこなわれ、また窯構造を中心とした論議は遺物には表れない各窯跡群の特質を明らかにしている<sup>(2)</sup>。さらに、理化学的・考古学的方法による生産地推定は、単に各窯跡群の製品供給範囲を示すだけではなく、その窯跡群の性格についても明らかにできることが知られている。こうした研究は、古代社会の在り方を考える上で重要と考える。

西海道すなわち現在の九州においても多数の窯跡群が営まれ(図1)、五世紀以降盛んに操業がおこなわれているが、最も注目される窯跡群は、福岡県大野城市南部を中心とし、一部は隣接する太宰府市・春日市にも広がる牛頸窯跡群である(図2)。操業開始は六世紀中頃とされ、以後九世紀中頃にいたるまで操業が続けられている。これまで発掘調査がおこなわれた窯跡の数は既に二〇〇基を越えており、総基数は五〇〇基を越えると想定される九州最大の窯跡群として著名な遺跡群である。

牛頸窯跡群について概略を述べると、六世紀中頃に操業を開始した頃、群の北側に広がる福岡平野周辺では小古墳が次々と造られるようになり、いわゆる群集墳の時代に入る。牛頸窯跡群内では、こうした古墳の祭祀に使用する須恵器を大量に生産するために操業規模が拡大しており、群は範囲を広げ、複数の支群が形成される<sup>(6)</sup>。群内では、須恵器の他に瓦を併焼する瓦陶兼業窯も一部で確認されており、中でも太宰府市神ノ前二号窯跡出土の瓦は「泥状盤築技法」<sup>(7)</sup>を用いて作られ、年代として

は日本最古の仏寺である飛鳥寺出土瓦の製作時期とほぼ同じと考えられる。その後、牛頸窯跡群内の一部では瓦陶兼業窯の操業が認められ、七世紀後半とされる春日市ウトグチ遺跡B地点一号窯跡<sup>(9)</sup>では本格的な瓦窯として成立をみる<sup>(8)</sup>が、以後群内で瓦の生産は認められず、須恵器のみの生産がおこなわれている。

七世紀後半になると、牛頸窯跡群の東方約三キロメートルほどの所に大宰府政庁が置かれ、「遠の朝廷」と呼ばれ、西海道の中央政府として機能している。牛頸窯跡群では、以後大宰府へ向けた生産が本格化しており、九世紀中頃に操業を終了するまで続いている。

本稿では、八世紀以降の九州の須恵器生産について取り上げるが、中でも牛頸窯跡群を中心に各国の様相を見ていきたい。それは、群は六世紀中頃から九世紀中頃にいたるまでの長い期間に渡り操業がおこなわれ、それぞれの時代に当時の社会背景を鋭敏に反映し生産をおこなっていることと、大宰府政庁に近接し、政庁を含め周辺官衙域に向けての生産がおこなわれることから、律令期の社会状況や生産体制を考える上で重要と考えるためである。

以下では、まず牛頸窯跡群について窯構造の変遷や生産器種の推移を明らかにした後、各国の窯跡群の内容を確認した上で、生産パターン・窯構造・生産器種・生産体制をまとめ、九州全体の須恵器生産体制の在り方と特質を明らかにしていく。

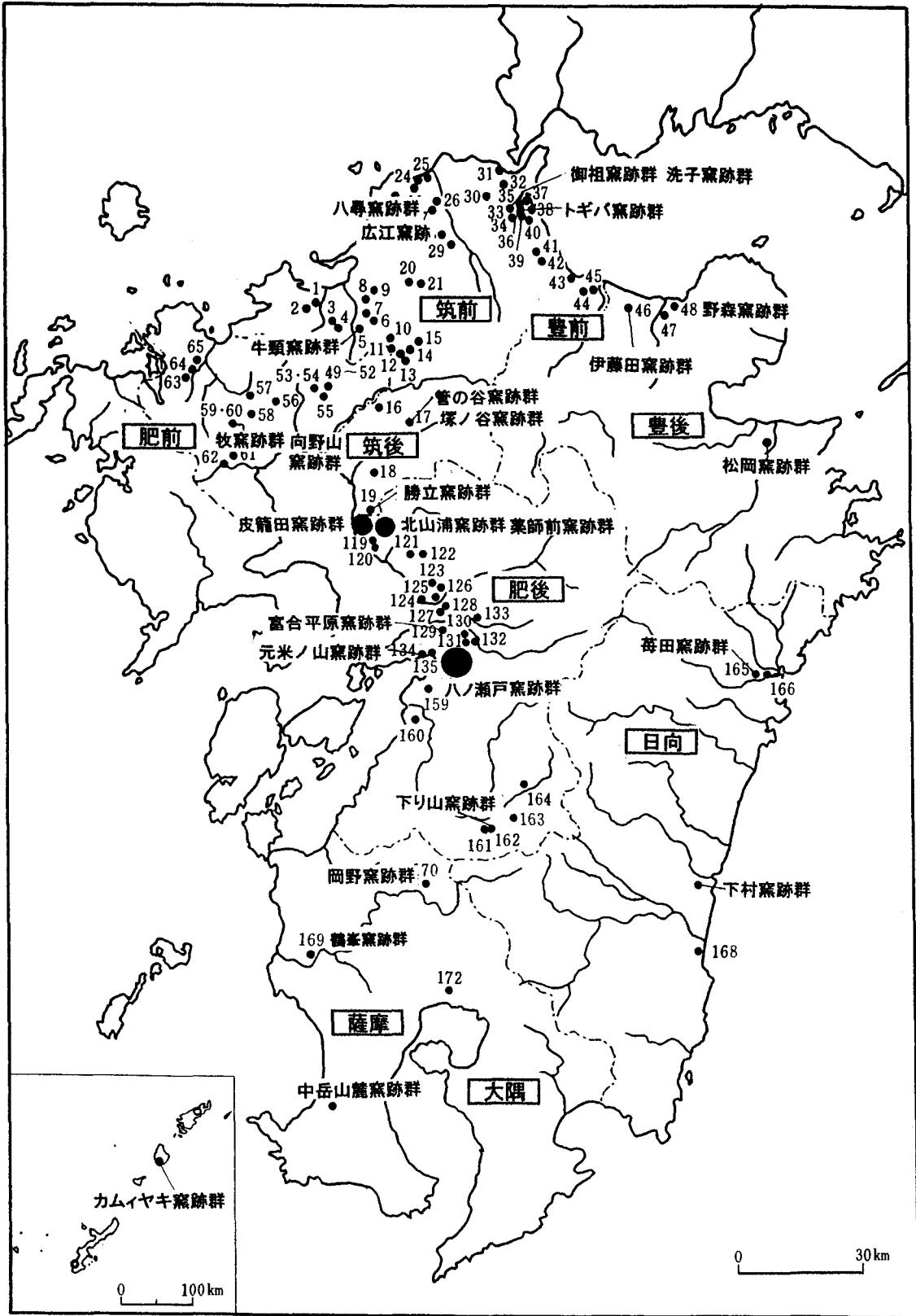
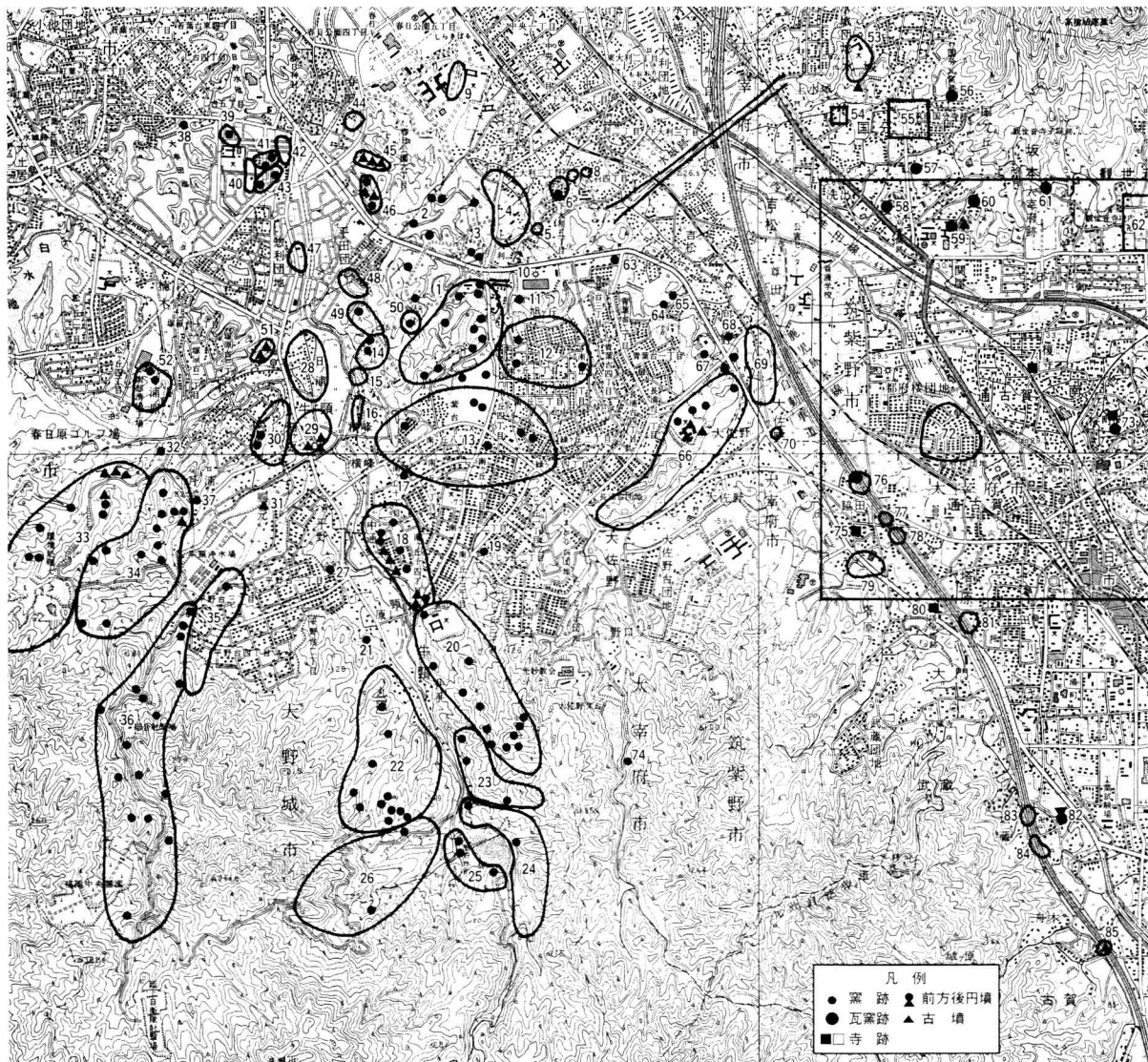


図1 九州の須恵器窯跡群分布図(須恵器集成図録第6巻より転載、一部改変)



- |   |   |  |  |   |
|---|---|--|--|---|
| <p>〔大野城市〕</p> <p>1. 野添遺跡群<br/>2. 梅頭遺跡群<br/>3. 本堂遺跡群<br/>4. 上園遺跡<br/>5. 出口遺跡<br/>6. 出口窟跡<br/>7. 唐土遺跡<br/>8. 谷川遺跡<br/>9. 池田・池の上遺跡<br/>10. 上大利小水城<br/>11. 谷蟹窟跡<br/>12. 大浦窟跡群<br/>13. 平田窟跡群<br/>14. 華無尾窟跡<br/>15. 華無尾遺跡<br/>16. 屏風田遺跡<br/>17. 東浦窟跡群<br/>18. 中浦遺跡群<br/>19. 上平田遺跡<br/>20. ハセムシ窟跡群</p> | <p>21. 原窟跡<br/>22. 井手窟跡群<br/>23. 道ノ下窟跡群<br/>24. 長者原窟跡群<br/>25. 笹原窟跡群<br/>26. 足洗川窟跡群<br/>27. 城ノ山窟跡群<br/>28. 日ノ浦遺跡群<br/>29. 塚原遺跡群<br/>30. 畑ヶ坂遺跡群<br/>31. 胴ノ元古墳<br/>32. 小田浦28地点<br/>33. 後田遺跡群<br/>34. 小田浦遺跡群<br/>35. 大谷窟跡群<br/>36. 石坂窟跡群<br/>37. 月ノ浦1号窟跡<br/>〔春日市〕<br/>38. 大牟田窟跡<br/>39. 惣利窟跡群<br/>40. 惣利西遺跡</p> | <p>41. 惣利遺跡<br/>42. 惣利北遺跡<br/>43. 惣利東遺跡<br/>44. 向谷北遺跡<br/>45. 向谷古墳群<br/>46. 平田北遺跡<br/>47. 円入遺跡<br/>48. 春日平田遺跡<br/>49. 春日平田西遺跡<br/>50. 春日平田東窟跡<br/>51. 塚原古墳群<br/>52. 浦ノ原窟跡群<br/>〔太宰府市〕<br/>53. 陣ノ尾古墳・遺跡<br/>54. 筑前国分尼寺<br/>55. 筑前国分寺<br/>56. 国分瓦窟跡<br/>57. 坂本瓦窟跡<br/>58. 松倉瓦窟跡<br/>59. 来木古墳群・瓦窟跡<br/>60. 来木北瓦窟跡</p> | <p>61. 都府楼北窟跡<br/>62. 観世音寺<br/>63. 神ノ前窟跡<br/>64. 篠振遺跡・窟跡<br/>65. 尊田窟跡<br/>66. 宮ノ本遺跡<br/>67. 長浦窟跡<br/>68. 向佐野窟跡<br/>69. 前田遺跡<br/>70. 尼崎遺跡<br/>71. 榎寺<br/>72. 市ノ上遺跡<br/>73. 般若寺・瓦窟跡<br/>74. 野口窟跡<br/>〔筑紫野市〕<br/>75. 杉塚廃寺<br/>76. 剣塚遺跡・瓦窟跡<br/>77. 前田遺跡<br/>78. 唐人塚遺跡<br/>79. 脇田遺跡<br/>80. 塔原廃寺</p> | <p>81. 桶田山遺跡<br/>82. 原口古墳<br/>83. 八隈遺跡<br/>84. 畑添遺跡<br/>85. 扇祇古墳群</p> |
|---|---|--|--|---|

図2 牛頭窟跡群周辺遺跡分布図

## ①牛頸窯跡群の生産動向

本節では、牛頸窯跡群の窯構造の変遷ならびに生産器種の変化について、時期ごとに様相をとらえることで八世紀以降の牛頸窯跡群の生産動向を把握したい。ただ、八世紀以降の生産動向について特質を明らかにするのであれば、操業開始期からの変遷過程を把握していくべきであるが、紙数の都合上、様相の把握のため七世紀後半以降について取り上げることとし、それ以前の時期については割愛する。

### 七世紀後半（図3・5）

杯B<sup>(1)</sup>の生産がおこなわれ、古墳時代的な杯Hの生産は認められなくなる時期である。窯構造は地下式直立煙道窯が主体となり、古墳時代の牛頸窯跡群において特有の窯構造であった多孔式煙道窯は少なくなっている<sup>(12)</sup>。窯の全長は五メートルを下回るような小型の窯跡が登場し、その数は大型の窯跡（全長五メートル以上）に比べて非常に多くなっている<sup>(13)</sup>。

小型の窯跡では蓋杯を中心とする小型器種の生産を主におこなっており、大型の窯跡では小型器種を含んで甕類の生産もおこなわれている。しかし、甕の出土量は前代に比べて少なくなりつつある。生産器種としては、杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・平瓶・長頸壺・甕・大甕などがあり、蓋杯の法量分化もはじまっている。また宮ノ本四号窯跡では片面硯、野添二次二号窯跡では権状製品の出土がある。

これらのことから、七世紀後半の牛頸窯跡群は小型の窯における小型器種の生産がはじまる時期であり、前代までの大型の窯跡における多器種焼成とは異なることから大きな画期としてとらえることができる。また、片面硯や権状製品の出土は律令制の施行を裏付けるものであり、牛頸窯跡群は成立期の大宰府へ向けた生産を開始していると考えられることができる。

### 八世紀前半（図3・5）

調としての貢納を示すヘラ書きを施した須恵器大甕がハセムシ一二地区灰原から出土しており、牛頸窯跡群の須恵器（大甕）が『延喜式主計式』の規定どおり納められようとした事が分かる。

窯構造は地下式直立煙道窯のみとなっており、窯の大きさは前代と同じく小型の窯跡と大型の窯跡に分けられる。大型の窯跡では甕の生産がおこなわれたと考えられるが、長者原窯跡群のように小型の窯跡のみで構成される群もある。また窯跡の数は前代に比べて著しく増加している。生産器種としては、杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・鉢・長頸壺・短頸壺・壺・甕・大甕があり、器種も非常に多くなる。

これらのことから、八世紀前半の牛頸窯跡群は前代において認められた小型の窯における小型器種の生産がさらに顕在化する時期である。大型の窯跡は少なくなり、さらに大型の窯跡を含まない群があることは、小型器種の生産が主として進められ、甕類はすでに普遍的な生産物ではなかったことを示している。

### 八世紀中頃から後半（図3・6）

前代に比べて大型の窯跡が減少しており、ほとんどが小型の窯跡となる。窯跡の数は前代と同様に非常に多い。窯構造は地下式直立煙道窯がほとんどであるが、道ノ下一七号窯跡は牛頸窯跡群ではあまり例のない半地下式として報告されている。窯は全長四・三メートル、最大幅一・八メートルの楕円形プランを呈しており、出土遺物が高杯などに限られることから、小型器種の中でもやや大きめのものを焼く器種による分業があったとされている<sup>(14)</sup>。器種は前代と同じく豊富である。また、石坂C—二号窯跡は灰原のみの調査であったが、長頸壺の体部に突帯を巡らせたものが出土している<sup>(15)</sup>。同様の遺物は、窯跡ではないが須恵器工人の集落と考えられる塚原遺跡SK一二から出土している<sup>(16)</sup>。

八世紀代にあたる窯跡の中で、全長五メートルを越える大型の窯跡を

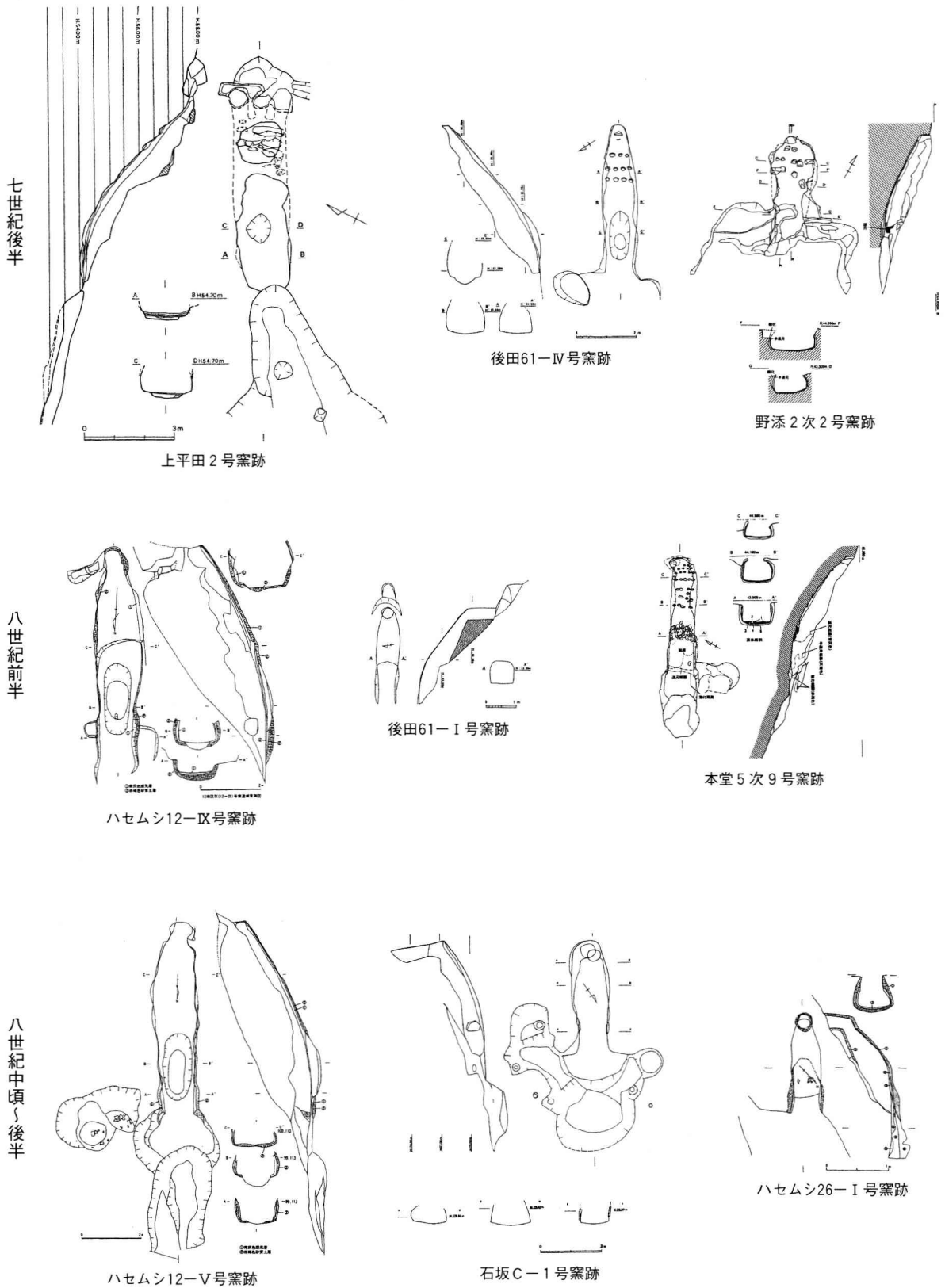


図3 牛頭窯跡群の須恵器窯構造変遷図①(S=1/200)

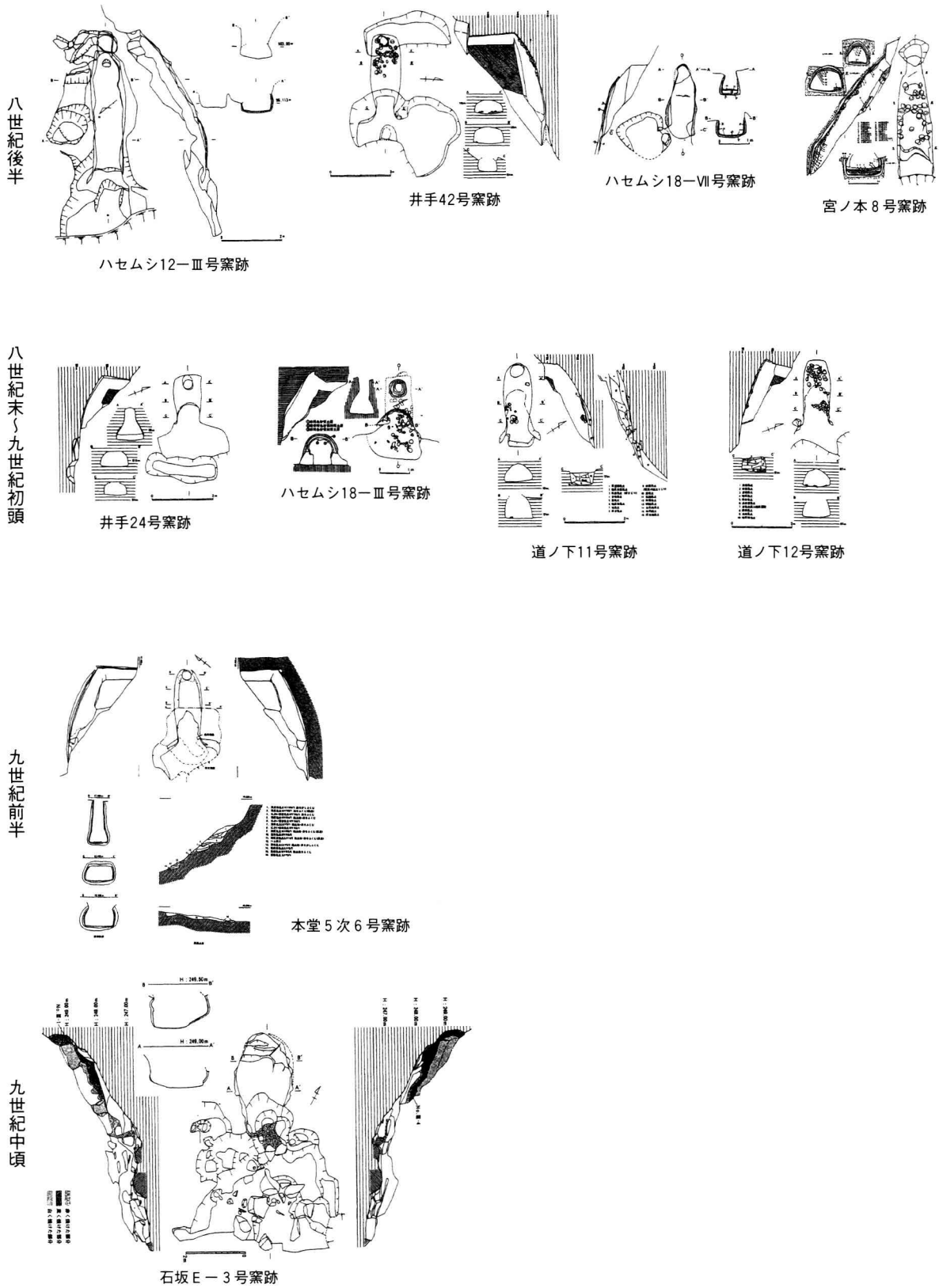
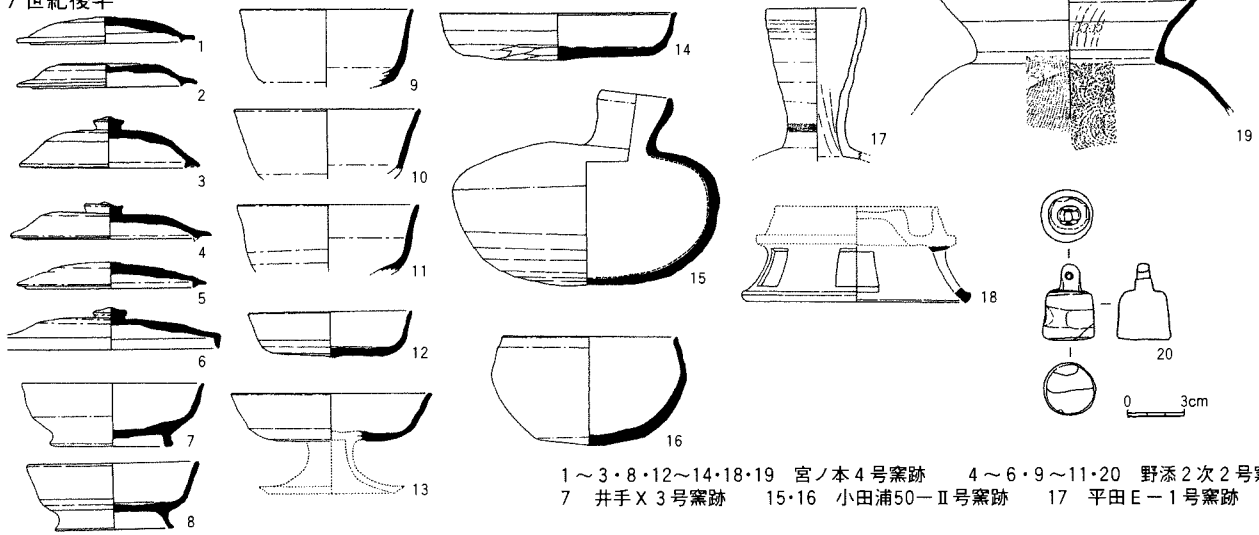


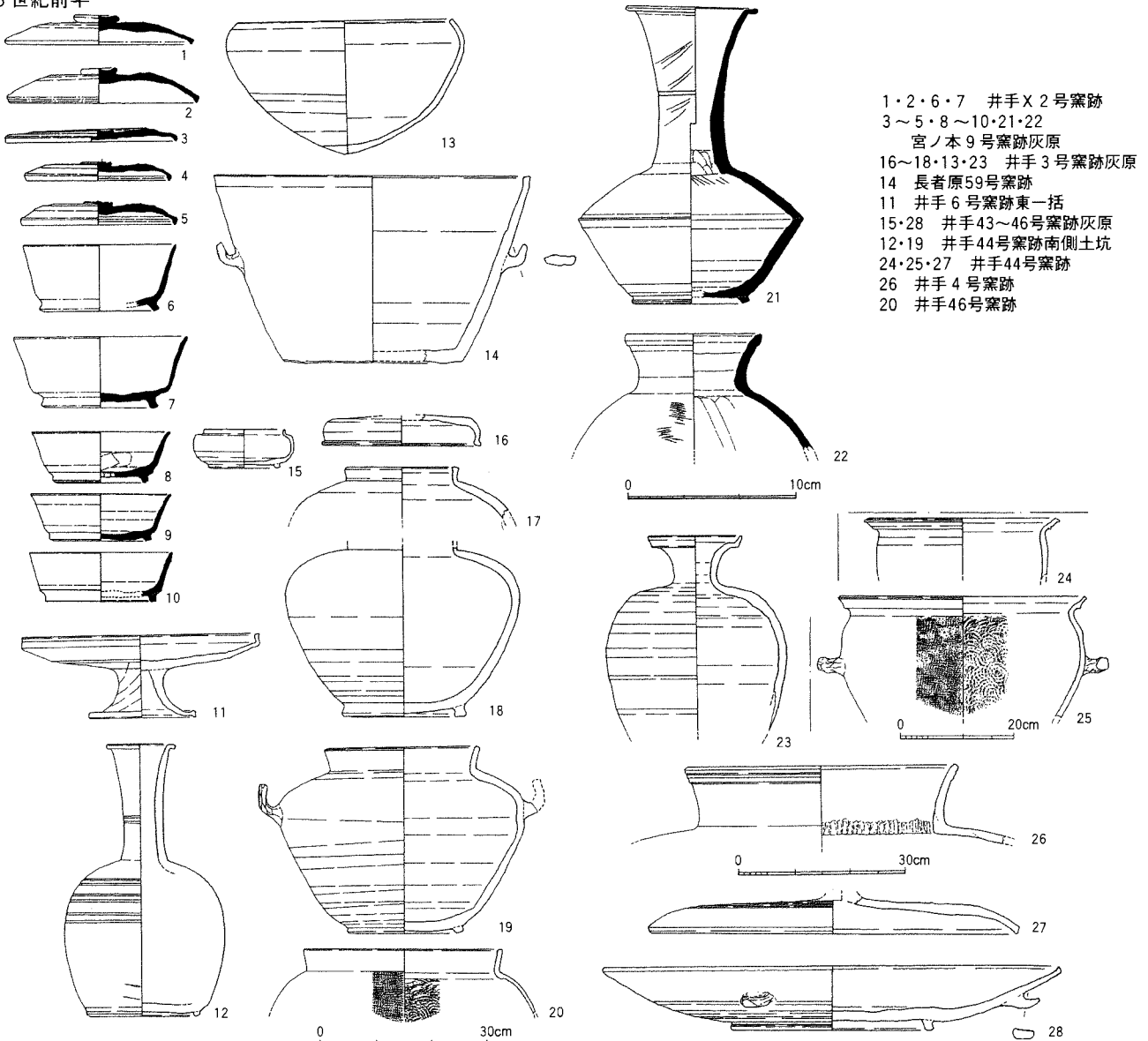
図4 牛頸窯跡群の須恵器窯構造変遷図②(S=1/200)

7世紀後半



1~3・8・12~14・18・19 宮ノ本4号窯跡 4~6・9~11・20 野添2次2号窯跡  
7 井手X3号窯跡 15・16 小田浦50-II号窯跡 17 平田E-1号窯跡

8世紀前半

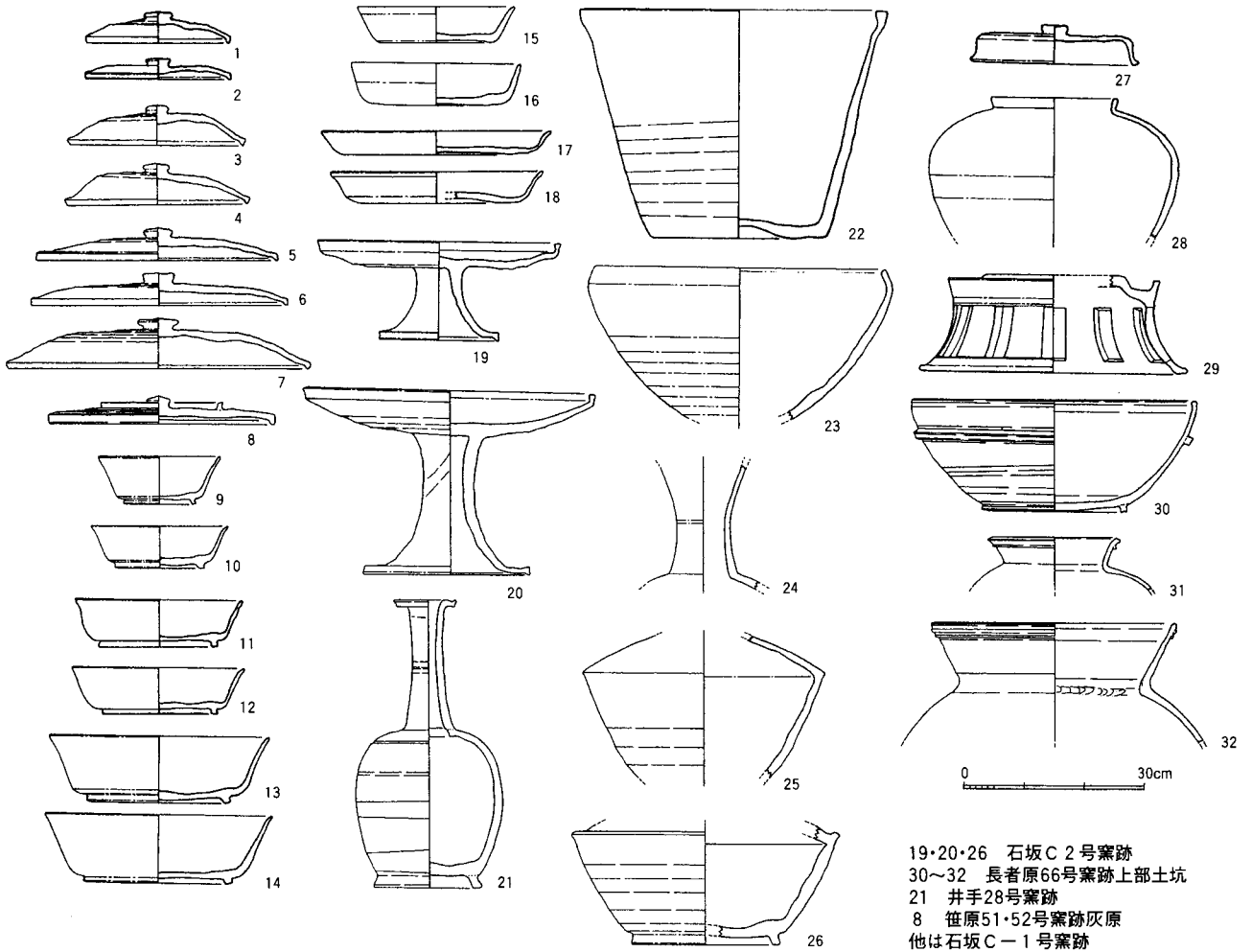


1・2・6・7 井手X2号窯跡  
3~5・8~10・21・22  
宮ノ本9号窯跡灰原  
16~18・13・23 井手3号窯跡灰原  
14 長者原59号窯跡  
11 井手6号窯跡東一括  
15・28 井手43~46号窯跡灰原  
12・19 井手44号窯跡南側土坑  
24・25・27 井手44号窯跡  
26 井手4号窯跡  
20 井手46号窯跡

図5 牛頭窯跡群出土遺物①(遺物は甕類を1/12、その他を1/6に統一した)

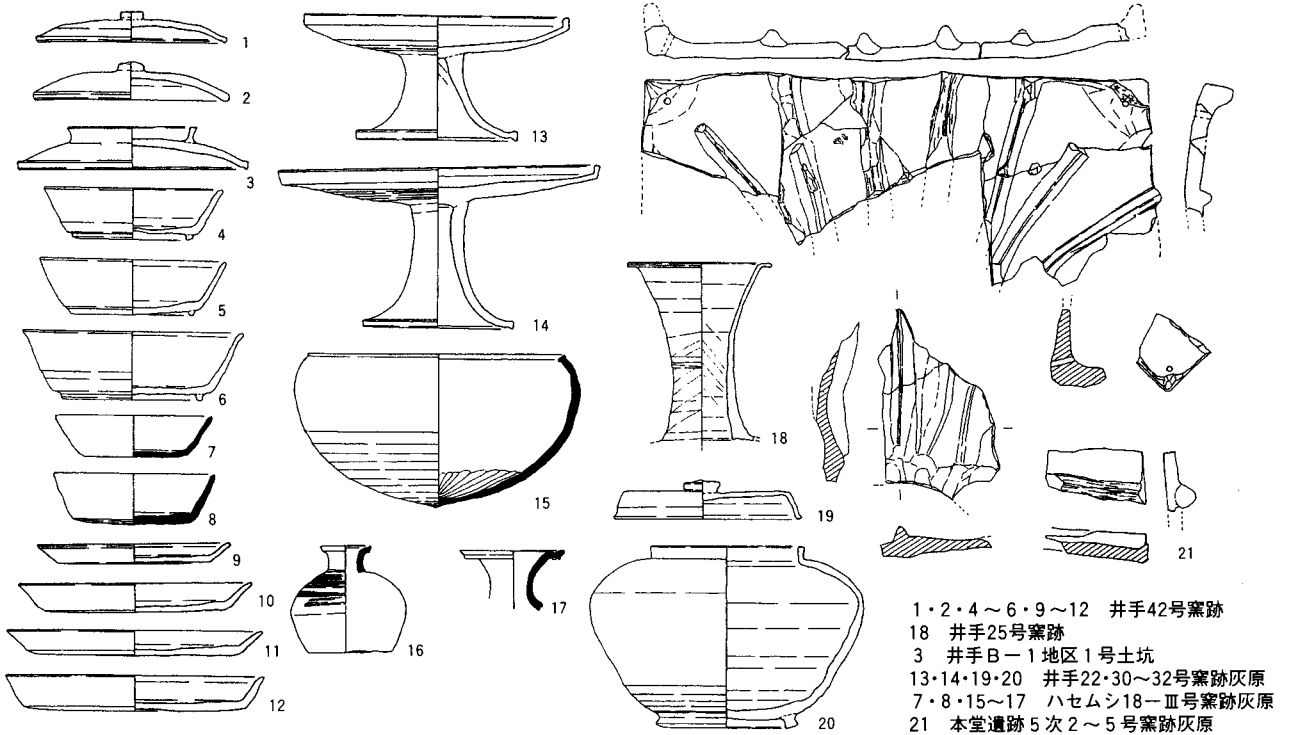


8世紀中頃～後半



19・20・26 石坂C 2号窯跡  
30～32 長者原66号窯跡上部土坑  
21 井手28号窯跡  
8 笹原51・52号窯跡灰原  
他は石坂C-1号窯跡

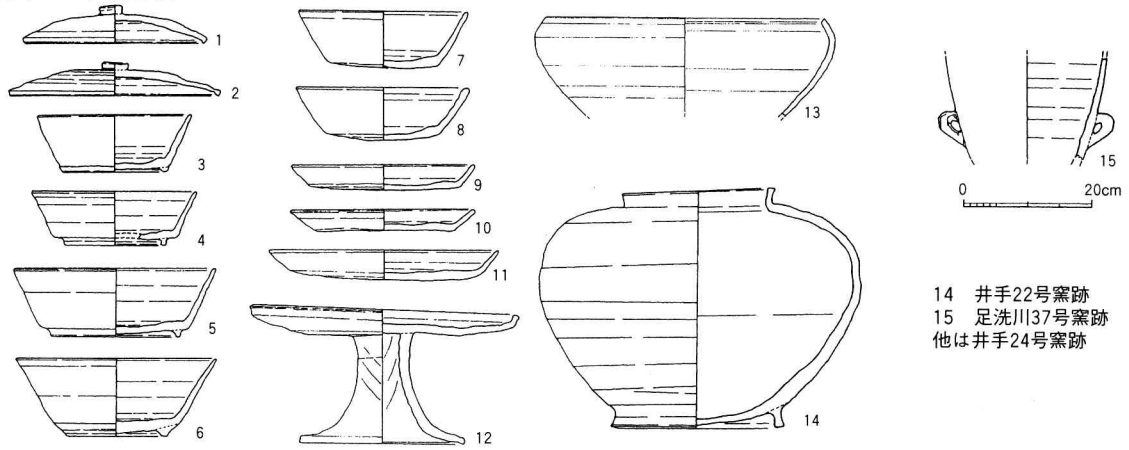
8世紀後半



1・2・4～6・9～12 井手42号窯跡  
18 井手25号窯跡  
3 井手B-1地区1号土坑  
13・14・19・20 井手22・30～32号窯跡灰原  
7・8・15～17 ハセムシ18-Ⅲ号窯跡灰原  
21 本堂遺跡5次2～5号窯跡灰原

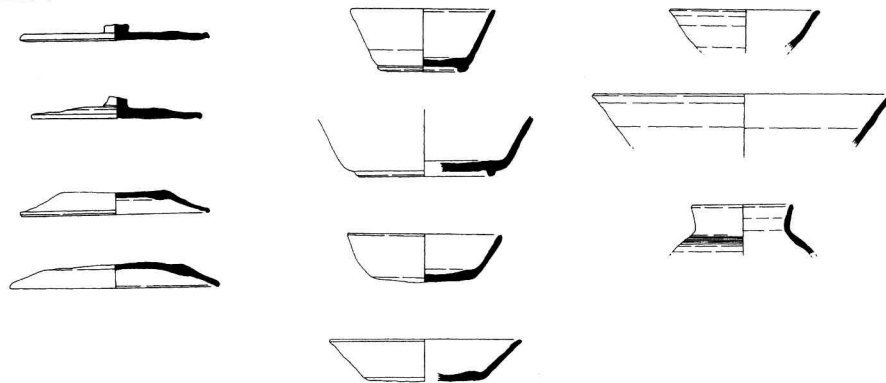
図6 牛頭窯跡群出土遺物②

8世紀末～9世紀初頭



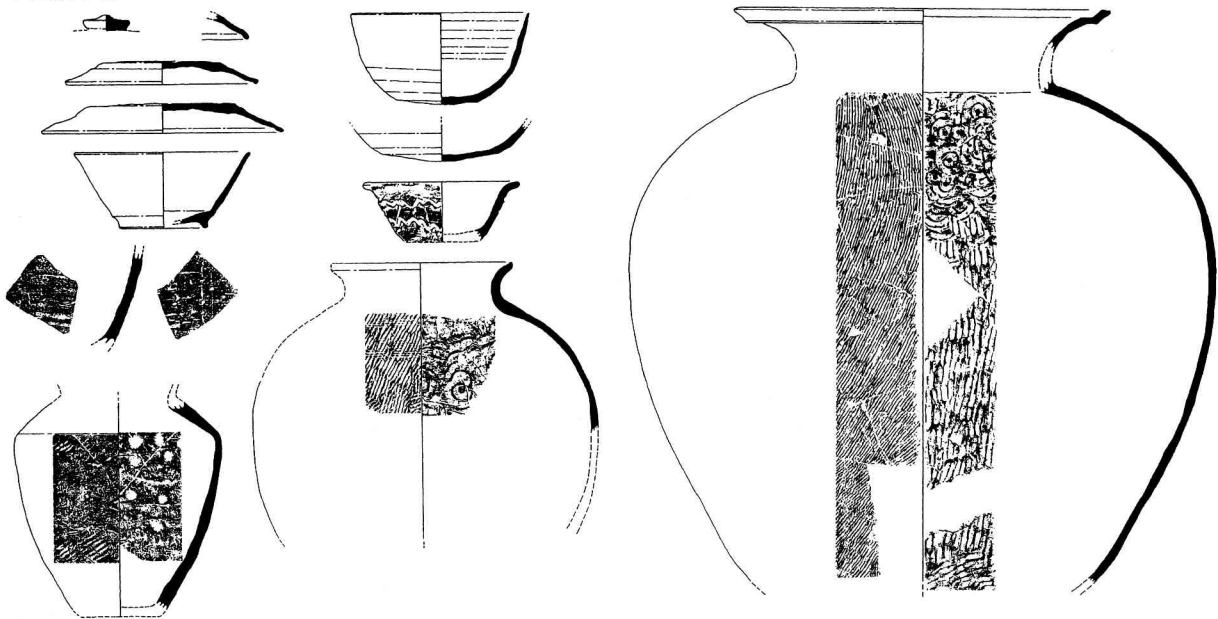
14 井手22号窯跡  
15 足洗川37号窯跡  
他は井手24号窯跡

9世紀前半



本堂5次6号窯跡

9世紀中頃



石坂E-3号窯跡灰原

図7 牛頭窯跡群出土遺物③

挙げると井手四号窯跡・ハセムシ一―V号窯跡・一二―IX号窯跡・一八―I号窯跡・二〇―III号窯跡などがあるが、確実に八世紀中頃以降にあたるのはハセムシ一―V号窯跡のみである。また、井手四号窯跡・ハセムシ一八―I号窯跡の窯体床面からは、甕片の出土が認められ甕類の生産がおこなわれたと思われる。しかしこれ以降、九世紀中頃と考えられる石坂E―三号窯跡まで牛頸窯跡群において甕類の生産を確認できる窯跡はほとんどない。八世紀中頃以降、窯の小型化は一層進み、全長五メートルを越えるような大型の窯跡は認められず、窯体内最大高も六〇センチを越えるものは少なくなる。したがって、甕類の中でも大甕のいるような構造ではなくなっている。

これらのことから、牛頸窯跡群では八世紀中頃から後半にかけて、大型の窯跡と甕類の出土が認められなくなり、一つの大きな画期としてとらえられる。

#### 八世紀後半(図4・6)

全長三―四メートルの小型の窯跡が多く造られ、甕類の出土が認められなくなる。窯跡は数基が近接することがあり、その場合灰原からは極めて多量の遺物が出土する。遺物の内容は蓋杯を中心とする小型器種であり、この時期も生産量が落ちている訳ではない。本堂遺跡五次調査地では、この時期を中心とする灰原から瓦塔の出土が見られた<sup>17)</sup>。屋蓋部のみであったが、牛頸窯跡群では初めての事例である。

これらのことから、牛頸窯跡群では八世紀後半はなお蓋杯を中心とする小型器種を多量に生産している。また前代において認められた突帯をもつ長頸壺は、肥後地域の窯跡出土資料に類例が見られ、瓦塔も九州では豊前地域の窯跡から多く出土が見られるものであり、製品の一部に他地域からの影響が認められる。

#### 八世紀末から九世紀初頭(図4・7)

窯跡の数は前代に比べて減少しており、生産量も減少しているように

ある。窯の小型化は最も進む時期であり、井手二四号窯跡は全長一・五メートルと極めて小さい。生産されるのは、杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・鉢・壺など器種も減少している。

これらのことから、牛頸窯跡群では八世紀末から九世紀初頭にかけて生産器種・生産量の減少が認められる。

#### 九世紀前半(図4・7)

窯跡の数は前代に比べてさらに少なくなっており、集落遺跡であるが、日ノ浦遺跡の土坑からの出土遺物より該期の窯跡の存在が推定されていた<sup>20)</sup>。窯跡としては、本堂遺跡五次調査六号窯跡が確認され、生産の一端が明らかになったが、現時点でこの時期の窯跡は他に確認されていない。日ノ浦遺跡・本堂遺跡出土遺物を見ると、杯蓋・杯身・杯・蓋・壺などがあり、器種は前代に比べてさらに減少している。

これらのことから、牛頸窯跡群では九世紀前半は前代に比べてさらに生産器種・生産量が減少しており、須恵器生産がほぼ終息しつつある段階と考えられる。

#### 九世紀中頃(図4・7)

窯跡の数は極めて少ない。石坂E―三号窯跡は全長三・九三メートル、焼成部最大幅一・八二メートルの胴張りプランを呈する。規模的には道ノ下一七号窯跡と変わらないが、焚口部に深い舟底状ピットをもつ点や、焚口部が極端に絞り込まれるなど前代までの窯の特徴とは異なっている。灰原からは須恵器杯蓋・杯身・鉢・壺・甕・大甕が出土したほか、土師器杯・皿・碗・鉢・甕、黒色土器碗・甕、丸瓦など須恵器以外の遺物も灰原から多量に出土した。このうち大甕については、二重口縁を呈し、熊本県荒尾窯跡群などで生産されるものと形態・調整技法が極めて近似している<sup>22)</sup>。

これらのことから、牛頸窯跡群では九世紀中頃は窯跡の数は極めて少なく、窯構造も前代のものとは異なることから一つの画期としてとらえ

ることができ、また出土した大甕の特徴から、操業にあたっては肥後から工人の参加があったと考えられる。この時期以降の窯跡は現時点では確認されておらず、牛頸窯跡群における須恵器生産は終了していると考えられる。

以上、七世紀後半以降の牛頸窯跡群の生産動向を見てきた。この間にはいくつかの画期が認められたが、最も大きな画期は、七世紀後半の小型の窯跡の登場・増加と、それにもなう甕類の生産量の低下である。

これは、蓋杯を中心とする小型器種の生産を主としておこなうことを示している。この時期の窯跡を調査すると、窯内・灰原から出土する遺物の大半が蓋杯を中心とする小型器種で占められており、甕類の出土は非常に少なくなっている。こうした窯跡ごとの出土器種と数量についてデータ化された例は少ないが、ハセムシ六・一二地区と石坂窯跡E地点について窯内・灰原出土須恵器破片をカウントした成果が明らかにされている。<sup>(23)</sup>

ハセムシ六地区は、窯跡三基と土坑三基が確認されている。窯跡はいずれも二・五～三・八メートルの小型の窯跡であり、七世紀後半から八世紀中頃にかけての時期が考えられる。窯内・灰原からは、杯蓋・杯身・杯・皿・高杯・短頸壺・長頸壺・壺・鉢・甕・托・硯・鈴といった豊富な器種が出土している。出土総数は破片数で五九四四六、器種の判明するものは三四〇〇七点である。このうち、杯蓋・杯身は合わせて二七八一点と器種の判明するものの中では八一・八%、出土総量においても四六・七%を占め、この時期の主要な生産品であったことを示している。また甕は口径二二～三〇センチ程度の小型の甕で、出土量は一二六一点、器種の判明するものの中では三・七パーセントと蓋杯に比べて圧倒的に少ない。

ハセムシ一二地区は和銅六年銘のヘラ書き須恵器を出土した地区で、窯跡一〇基・土坑二基が確認されている。窯跡は二一Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ号窯

跡は全長五・一五～七・〇メートルの大型の部類に、二一Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ号窯跡は全長二・一～四・五メートルの小型の窯跡である。窯内・灰原からは七世紀後半から八世紀後半にかけての遺物が出土しており、破片総数四七七六一点のうち杯蓋・杯身合わせて二三一〇一点に對し、甕は三七九五点である。

石坂窯跡E地点は九世紀中頃と考えられるE一三号窯跡があり、牛頸窯跡群で最も新しい時期のものである。灰原からは須恵器のほか土師器・黒色土器・瓦が出土しているが、このうち須恵器の破片総数一四六二点のうち甕が一四二五点を占めている。

これらの例は、総基数五〇〇基を越えると言われる牛頸窯跡群のほんの一部の例であり、これをもつてそのまま生産器種の比率にあてることが危険であるが、報告書において図化された遺物の数量を表にまとめる<sup>(24)</sup>と甕類の数は八世紀後半にいたるとほとんどなくなること明らかにした。

また中村浩氏によれば、五・六世紀代の窯跡での生産器種をまとめた際、出土破片総数の中で甕が占める割合はTG二二号窯跡（I型式一～二段階）で約八五%、TG六八号窯跡（II型式六段階～III型式一段階）で約六〇%であり、特に初期須恵器段階において須恵器は貯蔵具としての機能が重視されていたことを指摘している。<sup>(25)</sup>牛頸窯跡群において六・七世紀代のデータは整理されていないが、現場・整理段階での所見から言えば、七世紀前半代までは窯跡出土須恵器のうち約半数を甕が占める。

これらのことから、七世紀後半以降の牛頸窯跡群では小型の窯において主として小型器種を生産しており、一部甕の生産も認められるものの、その数は蓋杯に比べて極めて少なく甕は主要な生産品ではなくなっていることが明らかである。蓋杯を中心とする小型器種の生産が特化する背景としては、大宰府における儀礼・祭祀・蕃客の接待・饗宴・生活の場面において使用される食器類を大量かつ安定的に供給するシステムが存

在したと考えており、これを大宰府政庁による須恵器生産政策と位置づけた<sup>24</sup>。また、八世紀中頃から後半の間に甕を生産しなくなり、小型器種のみを生産にうつる現象も同様と考えられ、牛頸窯跡群は大宰府の指導の下に生産がおこなわれていたと考えられる。

また、生産量・生産器種は八世紀末から九世紀初頭ごろから急減しており、九世紀代の窯跡は極めて少ない。こうした状況の中、石坂E-三号窯跡のような事例は他地域からの技術を取り入れ、生産を維持しようとした結果と考えられるが、その試みはあまり成功していないようであり、牛頸窯跡群における須恵器生産は終了している。

## ②九州各国の須恵器生産動向

九州の代表的な窯場である牛頸窯跡群の動向について見てきたが、以下では九州各国における須恵器生産動向について明らかにしていく。ただし、須恵器窯跡は周知のように大部分が丘陵・山間部に位置しており、地域によってはそうした地区への開発行為が少ないことも多く、未発見の窯跡は相当数存在するものと思われる。こうした埋蔵文化財調査の多寡は、そのまま遺跡の分布の精粗として反映されている可能性もあり、現在認識しうる遺跡の分布や内容が古代の在り方をどの程度反映しているかはよく分からない。したがって、以下に考えようとする九州各国における須恵器生産動向は上記のような資料的限界を踏まえたものであり、今後の調査の進展により変更される部分もあることをお断りしておく。

さて、古代の須恵器生産体制を考える上で重要なモデルケースとなるのは、北陸地方の状況である。北陸地方は全国的に見ても須恵器窯跡群の多い地域であり、生産動向を見た場合、郡ごとの生産が明確であることが指摘されている。郡単位に須恵器窯跡群が存在する理由としては、

郡ごとに窯業をおこなう政策がとられ、「郡程度の領域を単位として窯業生産体制を整備する在り方」として「一郡一窯(的)体制」が存在したものとされている<sup>26</sup>。また北陸地方の中でも「一郡一窯(的)体制」が明確なのは越中地域であり、こうした体制が機能したのは「七・八世紀であり、九世紀には変質が顕在化し、一〇世紀には消滅した」とされている。

一方、菱田哲郎氏は上記の「一郡一窯体制」の具体的な事例として丹波国の須恵器生産を取り上げている<sup>27</sup>。この中で氏は丹波国内の窯業遺跡について、ほぼ一郡に一カ所の生産地が存在することを指摘し、これを「一郡一窯型」と類型化し、郡ごとの消長パターンを検討した。その結果、七世紀に生産がはじまり九世紀に終了するパターンと八世紀中葉に生産がはじまり一一世紀まで操業が続くパターンの二つが存在することを明らかにした。こうしたパターンは北陸地方の須恵器生産や讃岐国においても認めることができ、操業が長く続く窯跡群は国府との関係が推測できるものとして、各郡の窯跡群においては郡レベルの生産地と国レベルの生産地が存在することを明らかにされた。

また、氏は「一郡一窯型」とは異なる生産体制をとる地域として関東地方を取り上げ、拠点的な生産地が成立する地域と須恵器生産をおこなわない地域が存在することを指摘した上で、「拠点的な生産地から広域に供給されるパターン」を広域型の窯業生産とされ、こうした広域型の窯からは郡・国を超えて流通するという特徴があるとされている。

さらに総基数が三〇〇基を超える大規模な窯跡群として、陶邑窯跡群・牛頸窯跡群・猿投窯跡群・尾北窯跡群・美濃須衛窯跡群・湖西窯跡群を挙げ、国家レベル・国レベルの生産をおこなう集約型の生産地とされている。こうした「一郡一窯型」の生産地や集約型の生産地においては、八世紀中頃に画期が認められ、窯の分布や消長に変化が認められるものとされている。

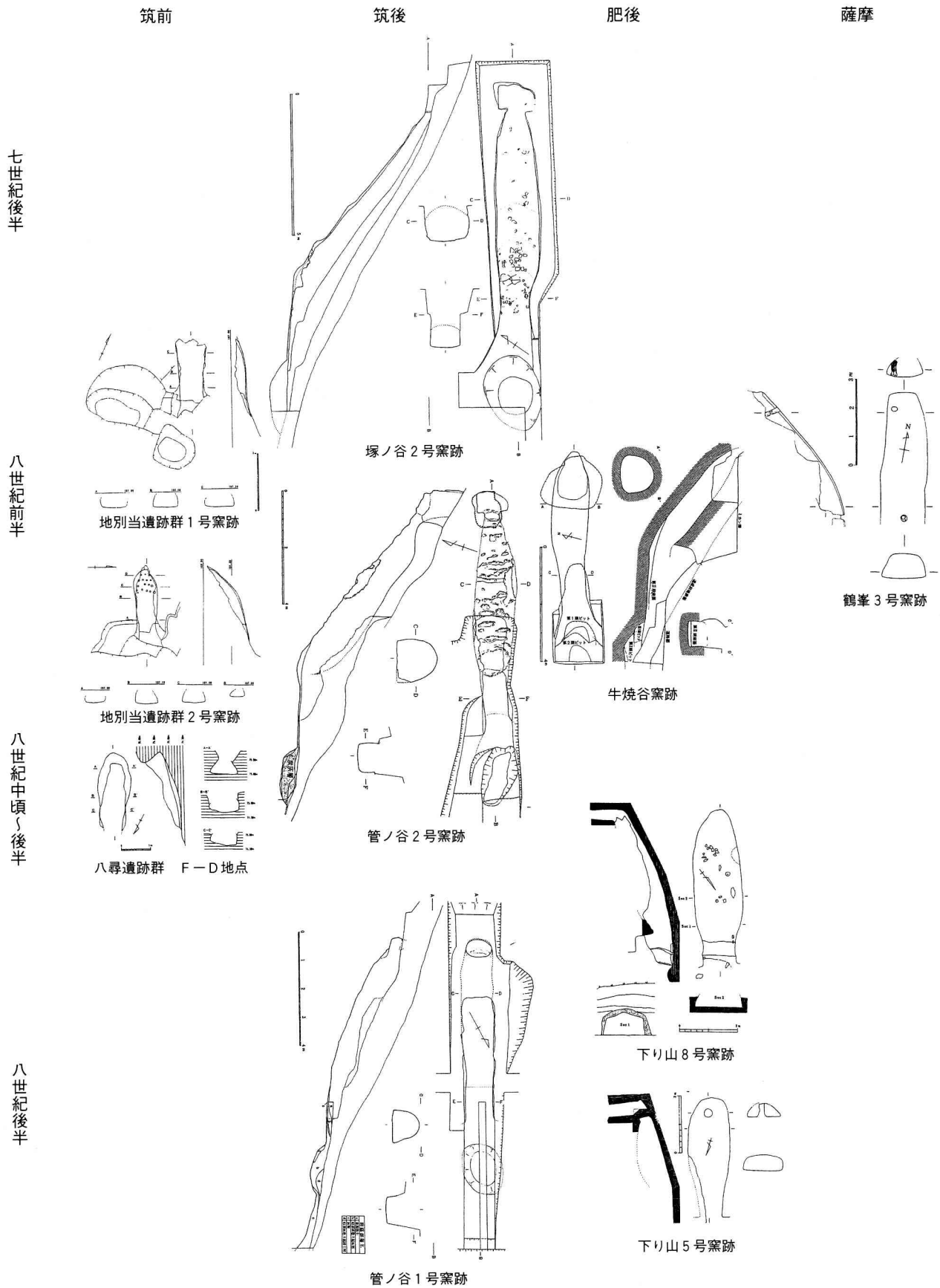


図8 九州西部の須恵器窯構造変遷図①(S = 1/200)

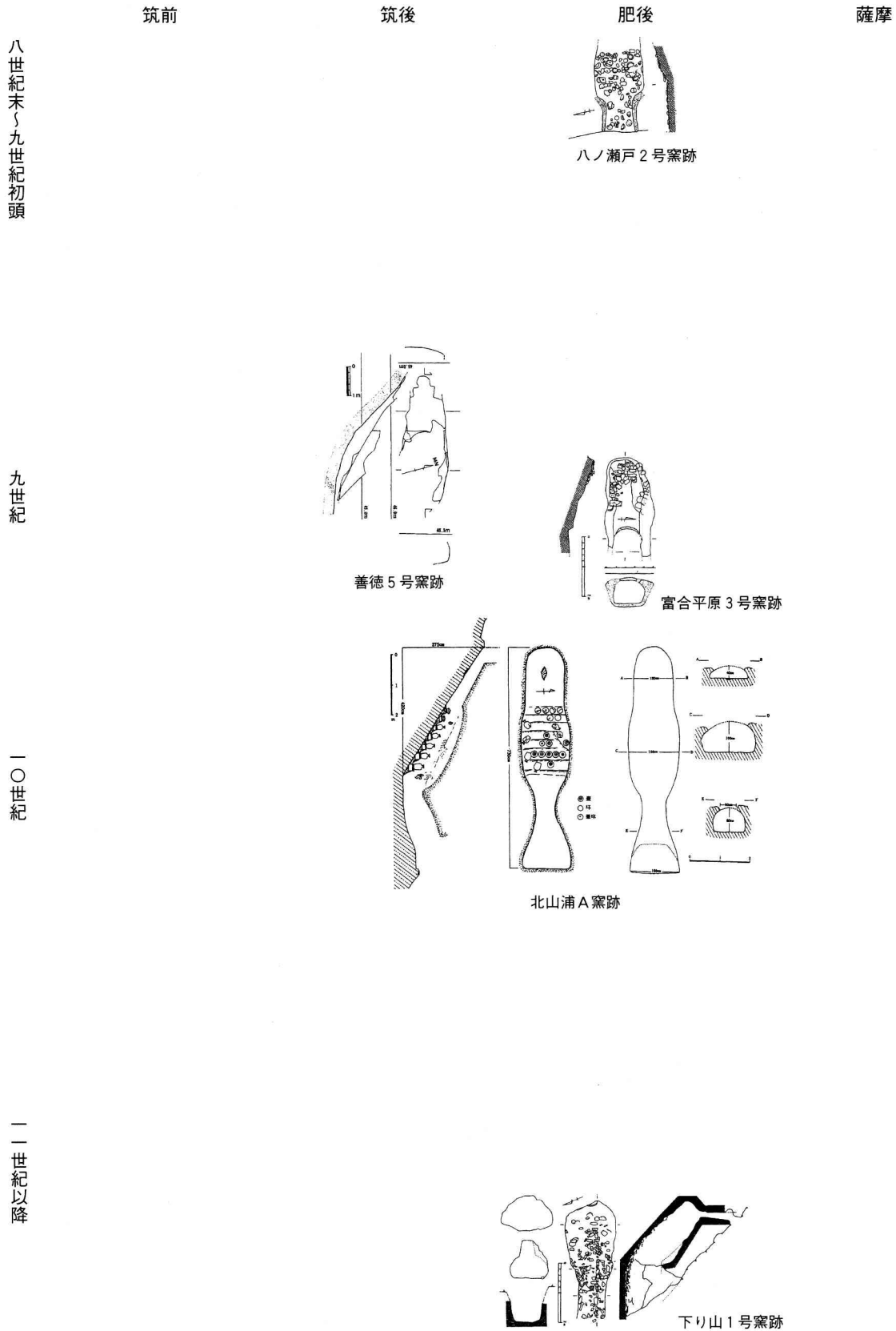


図9 九州西部の須恵器窯構造変遷図②(S=1/200)

一方、九州における須恵器生産体制については、岡田裕之氏により牛頸窯跡群を含めた北部九州地域の生産動向について検討がおこなわれている。その中で氏は、第一の画期（六世紀後半～七世紀前半）と第二の画期（七世紀末～八世紀前半）の二つの画期を設定されている。第一の画期は群集墳などの増加に連動した生産地の拡大であり、これにより成立した窯跡群が第二の画期を境に生産を継続する群と停止する群に分けられることを指摘されている<sup>(28)</sup>。

また筆者は八世紀以降を中心とした九州各国における窯跡群の動向について整理を試みたが、窯跡出土資料の提示と若干の考察に止まったのみであった<sup>(29)</sup>。したがって、以下では八世紀以降の九州各国の窯跡について、旧稿後管見におよんだ資料を加えて概観していく。

#### 筑前国

律令期の筑前国には、怡土郡・志麻郡・早良郡・那珂郡・席田郡・糟屋郡・宗像郡・遠賀郡・鞍手郡・嘉麻郡・穂波郡・夜須郡・下座郡・上座郡・御笠郡の計一五郡がある<sup>(29)</sup>。このうち、八世紀以降に須恵器生産が認められるのは、那珂郡<sup>(30)</sup>・鞍手郡である。

まず那珂郡については、先述した牛頸窯跡群があるほかは地別当遺跡群において二基の窯跡が確認されているのみである（図8・10）。窯跡は、福岡県那珂川町に所在し、八世紀前半から中頃に位置付けられている。窯跡の残存状態はよくなかったが、一号窯跡は残存長二・五メートルのやや大型の窯跡、二号窯跡は全長二・六メートルの小型の窯跡で、一号窯跡からは杯蓋・杯身・壺類・鉢・甕、二号窯跡からは杯蓋・杯身・皿が出土した。このことから、報告者は「一号窯跡は大半を失うものの二号窯跡より規模が大きく、遺物も二号窯跡では見られない鉢・甕などの大型品も出土しており、器種により分業して生産されていたことを伺わせる。」との指摘をおこなっている<sup>(31)</sup>。当遺跡は牛頸窯跡群とはやや離れた位置にあるが、器種による分業は牛頸窯跡群と同じ生産思想の下に操業

されたと考えられよう。

このことから、那珂郡では総基数五〇〇基を超える牛頸窯跡群が古墳時代以来大規模な操業をおこなっており、他に数基程度の小規模な窯跡群が存在している事が分かる。この小規模な窯跡群は現在のところ地別当遺跡群しか確認されていないが、今後調査の進行によってもさほど増加することはないと思われる。牛頸窯跡群では七世紀後半に全長五メートル以下の小型の窯跡が登場し、窯跡の数は増加しており、古墳時代よりも奈良時代の方が窯跡の数は多い。奈良時代には新たな支群の登場も認められ<sup>(32)</sup>、大宰府へむけての集中的な生産がおこなわれていたことは確実である。一方、地別当窯跡群における器種による分業は牛頸窯跡群の影響として理解できるもので、律令期の那珂郡では牛頸窯跡群において集中した生産体制がとられていたものと理解できる。

次に、鞍手郡の状況を見ていきたい。鞍手郡には広江窯跡・八尋遺跡群・宮崎窯跡群がある<sup>(33)</sup>。広江窯跡は福岡県直方市に所在し、窯体は確認されていないが、窯跡の前庭部とされる溝状遺構から多量の須恵器が出土した（図10）。遺物については田村氏により詳細にまとめられている<sup>(34)</sup>。出土遺物には杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・壺・甕があり、杯身・杯に關してはI～V類に分類している。杯蓋は量が少なく、つまみをもつものが生産されていない可能性が指摘されている。甕は全形を伺えるようなものはないが、蓋杯に対して量は非常に少ない。時期は八世紀第三四半期から九世紀第一四半期に位置付けられている。

八尋遺跡群は福岡県鞍手郡鞍手町に所在し、窯跡一基の調査がおこなわれ、八世紀中頃に位置付けられる<sup>(35)</sup>。出土遺物には杯蓋・杯身・杯・皿・鉢がある（図10）。窯跡は直立煙道窯と思われる、全長二・六四メートルと小型の窯跡である。

宮崎窯跡群は福岡県宮若市（旧宮田町）に所在し、正式報告はされていないが、四基の窯跡が調査されたことが知られる<sup>(34)</sup>。いずれも全長二・七



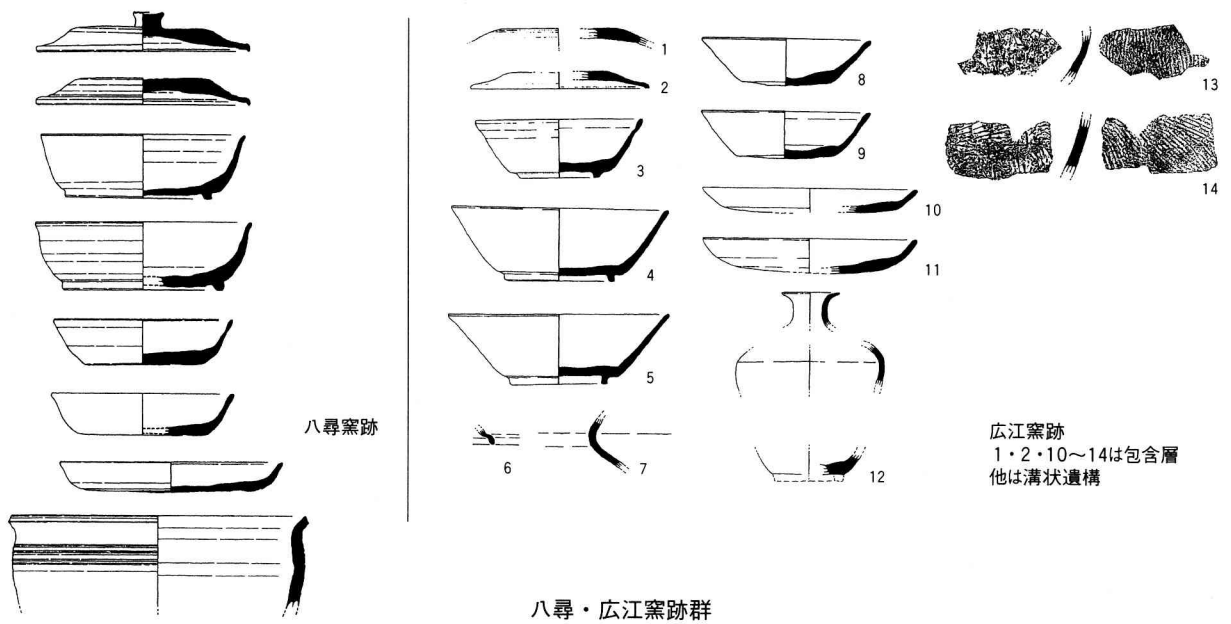
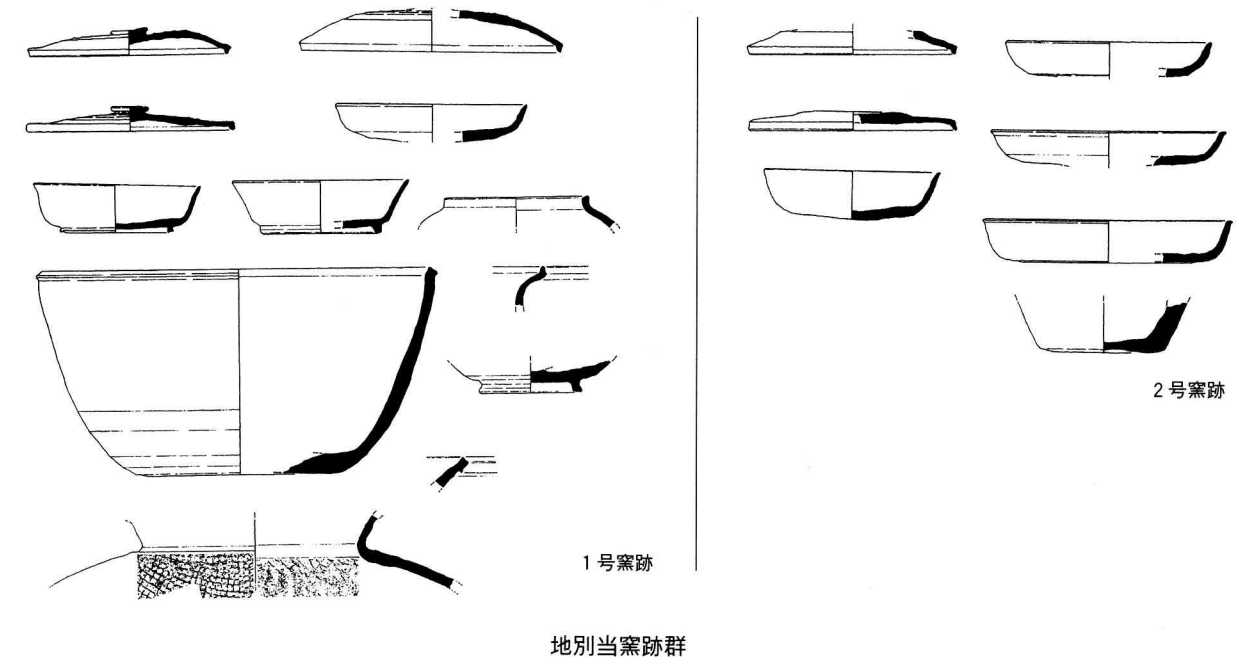


図10 筑前国内の窯跡出土遺物

〔三〕一メートルと小型の窯跡で、出土遺物は杯蓋・杯身・皿・高台杯・無高台杯・短頸壺・甕などが出土し、八世紀後半に位置付けられている。以上のように、鞍手郡においては数基単位の小規模な生産の在り方が認められた。時期的にはいずれも八世紀中頃以降の操業で、短期間で終了している。窯構造については、八尋遺跡群では地下式直立煙道窯、宮崎窯跡群も地下式構造を採用しており、いずれも全長三メートル前後の小型の窯跡であることは同時期の牛頸窯跡群の窯構造によく似ている。また生産器種についても、広江窯跡においては遺構の残存状況が悪いが、灰原などから甕の破片が出土することから、甕の生産が確認される。しかし、その量は破片数でわずかに九点と極めて少なく、生産量としても多いものであったとは考えられず、甕類の生産量の減少も牛頸窯跡群と共通している。

これらをまとめると、筑前国内においては牛頸窯跡群における大規模・長期的な操業に対し、周辺では小規模・単発的な操業がおこなわれているようである。むしろ現在確認されている遺跡のみが古代の状況を反映しているとは考えていないが、八世紀以降においては牛頸窯跡群で集中生産がおこなわれていることは確実である。六世紀代の窯跡は怡土郡・早良郡・那珂郡・御笠郡・糟屋郡・宗像郡・鞍手郡・夜須郡・下座郡・上座郡など広い地域で生産活動を認めることができるが、単発的な操業の窯跡が多い。宗像郡は稲元日焼原窯跡群など五世紀後半から操業が開始され、以後古墳時代を通じて操業が認められる地域である。窯の操業は六世紀代を主とするが、七世紀後半以降の窯跡の存在も想定され、八世紀代も操業が続く可能性が考えられているが、現時点では窯跡は未確認である。<sup>(36)</sup>

したがって、筑前国では六世紀代に広い地域で認められた生産活動が、奈良時代に入ると牛頸窯跡群に集約化されることが分かる。また、鞍手郡のように奈良時代に操業を開始する事例も認めることができ、小

型の窯構造を採用する点や、出土遺物が蓋杯などを中心とする小型器種が大半を占め甕類の生産が極めて少ない点などは該期の牛頸窯跡群の生産状況とよく似ており、牛頸窯跡群の影響下に成立したものと考えられる。牛頸窯跡群の在り方は、一国一窯体制と評価することができよう。

#### 筑後国

律令期の筑後国には御原郡・生葉郡・竹野郡・山本郡・御井郡・三瀨郡・上妻郡・下妻郡・山門郡・三毛郡の一〇郡がある。このうち、八世紀以降に須恵器生産が認められるのは上妻郡と三毛郡である。

上妻郡では、八女窯跡群がある。群は福岡県八女市に所在し、筑紫国造磐井の墓として著名な岩戸山古墳や乗場古墳などの八女古墳群の位置する八女丘陵東側の山麓に位置する。六世紀中頃と考えられる中尾谷窯跡群を最古とし、八世紀代まで操業をおこなっている。七世紀後半から八世紀前半には塚ノ谷二号窯跡がある(図8・11)。全長八・六メートル、幅〇・九八×一・四八メートルの細長いプランを呈する窯跡で、半地下式と推定される。出土遺物には、杯蓋・杯身・杯・高杯・壺・短頸壺・甕・大甕・円面硯などがある。<sup>(37)</sup>八世紀前半になると、牛焼谷瓦窯跡がある(図8・11)。全長五・四メートル、最大幅一・三メートルの地下式と考えられる窯跡で、焼成部は傾斜が急になっている。窯跡の時期は二つに分けられ、第Ⅰ期床面からは須恵器が出土し瓦の出土がなかったことから、当初は須恵器を焼成する窯跡とされている。出土遺物は、第Ⅰ期床面からは少なく、蓋杯・甕の破片が少量出土したのみで焼成器種は明らかではないが、第Ⅱ期床面や灰原からは杯蓋・杯身・杯・高杯・平瓶・甕・大甕が出土している。また三助山窯跡群からも古墳時代の須恵器に混じって七世紀後半から八世紀代の遺物が出土しており、周辺に窯跡の存在が想定される。<sup>(37)</sup>

また八世紀前半代には管ノ谷二号窯跡がある(図8・11)。<sup>(38)</sup>窯跡の全長は六・二メートル、幅一・四五メートルの地下式直立煙道窯である。出

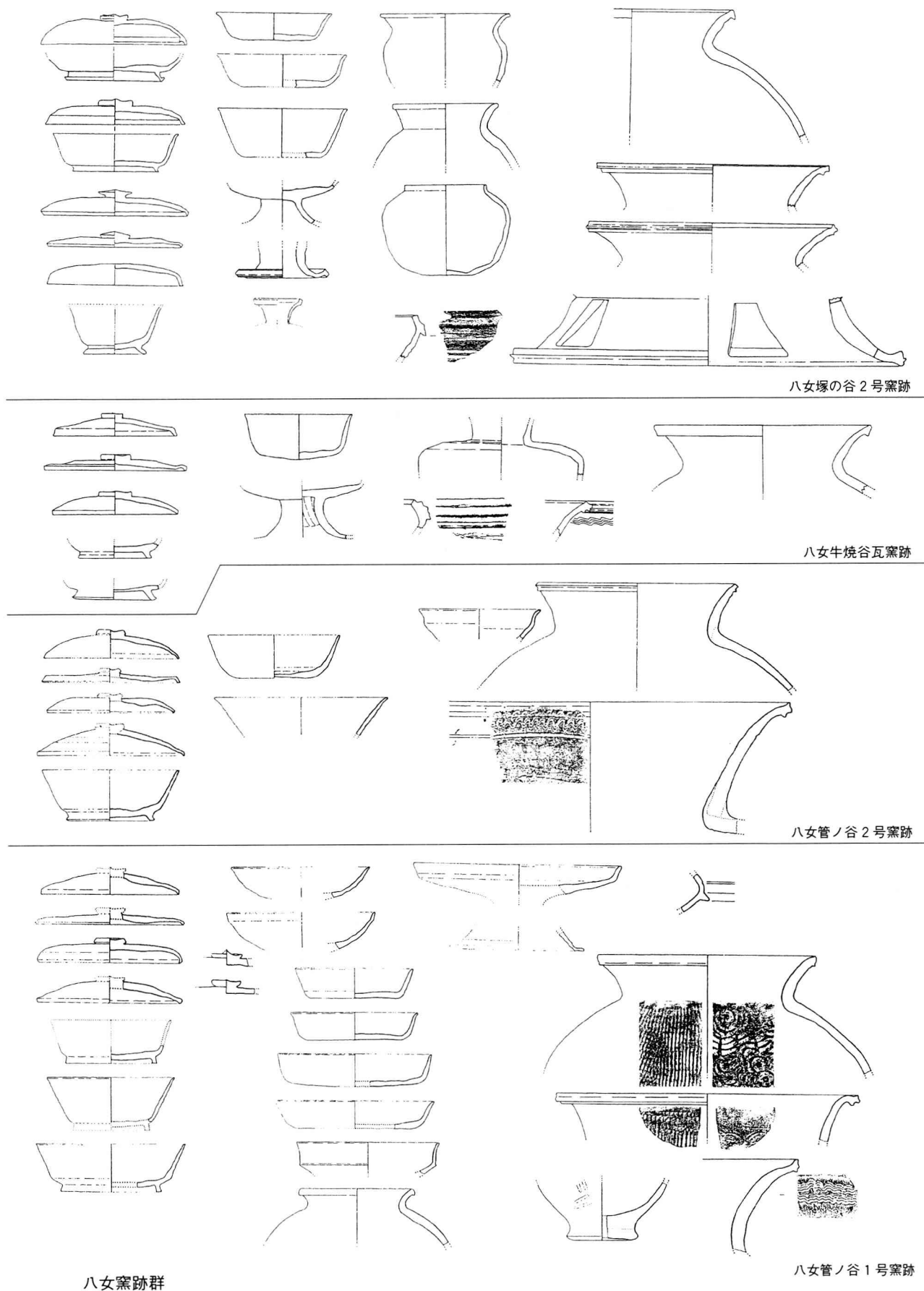


図11 筑後国内の窯跡出土遺物①

土遺物には杯蓋・杯身・杯・壺・甕・大甕があり、大甕の口縁部外面には波状文が巡らされ、牛頸窯跡群のものとは異なる特徴をもつ。また胴部内面の当て具痕には同心円文と平行条線文がある。管ノ谷一号窯跡は、管ノ谷二号窯跡と谷を挟んで位置しており、報告者により八世紀後半代に位置付けられている(図8・11)<sup>(38)</sup>。全長六・三メートルの地下式直立煙道窯で、幅〇・九五×一・一メートルの細長い平面プランを呈する。杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・壺・甕・大甕・瓦が出土しており、瓦陶兼業窯と考えられるが、瓦の量は少ないようである。大甕口縁部外面には波状文が巡らされる。また小片であるが、長頸壺の肩部に突帯を巡らせたものがあり、肥後の窯跡群との関係が指摘されている<sup>(39)</sup>。

以上のように、上妻郡においては八女窯跡群で六世紀中頃以降操業が続けられていることが確認できる。窯構造について分かるものには、塚ノ谷二号窯跡・牛焼谷瓦窯跡・管ノ谷一・二号窯跡がある。地下式・半地下式の両者があるが、いずれも全長五メートルを超える窯跡で幅の狭い細長いプランをとる特徴がある。生産器種は甕・大甕を含めて豊富な器種が認められ、瓦の焼成もおこなわれている。また、管ノ谷一号窯跡からは、長頸壺の肩部に突帯を巡らせたものがあり、肥後の窯跡群との関係が考えられている。以上の点は、小型窯による小型器種の生産を主とする牛頸窯跡群とは異なる操業の在り方を示している。ただし、周辺の調査がそれほど進んでいないため群の規模や操業を終了する時期については未解明である。

一方、三毛郡は筑後国南部に所在しており、肥後国と隣接する。勝立窯跡群は、福岡県大牟田市に所在し、現在県境でもあり、肥後国との境と考えられる諏訪川の北岸に位置する。熊本県荒尾窯跡群とは諏訪川を挟んで位置しており、地理的には荒尾窯跡群の北辺部とされる<sup>(40)</sup>。窯跡は現在一九基が知られるが、操業開始年代は明らかではない。善徳五号窯跡は大きく破壊されていたが、甕の破片しか出土しなかったことから大

甕を専用に焼成していたと考えられている(図9)。遺物は全形を知りえないが、口縁部は二重口縁をもつ特徴があり、形態的には九世紀代と思われる(図12)。片平窯跡は標高三メートルの水田下に焚口を検出し、灰原の調査が合わせておこなわれている<sup>(41)</sup>。杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・鉢・壺類・甕・大甕などが出土し、八世紀後半から末頃の年代が考えられる。特徴については、体部に突帯をもつ長頸壺や二重口縁を呈する大甕など肥後皮籠田A窯跡と同じような様相を呈している(図12)。

したがって、三毛郡では遅くとも八世紀後半代には操業を開始していることが分かる。片平窯跡の出土遺物から考えると、肥後荒尾窯跡群の影響が強く認められ、窯構造は明確でないものの大甕を含んでたくさん器種を焼成していることが明らかになった。一方善徳五号窯跡では、窯跡が大きく破壊され、遺物も少ないため不明な部分があるが、大甕を専用に焼成しており、甕の形態から片平窯跡より後出すると思われる。このことから、多器種生産から甕類の生産のみに移っていることが伺え、その転換は九世紀代のどこかにあるものと考えられるが、規模・内容は明らかでなく今後の調査の進展を待ちたい。

以上のように、筑後国では六世紀中頃から八世紀後半まで継続する八女窯跡群と八世紀後半頃に操業を開始する勝立窯跡群・片平窯跡の二つのパターンが認められた。古墳時代の窯跡は、御原郡において六世紀後半を中心とする時期に操業がおこなわれる小郡市苅又窯跡群があるが、前後に連続する時期の窯跡は少ない。さらに、今のところ古墳時代においても筑後国各郡において須恵器生産をおこなっていた状況は看取できない。したがって、資料的制約があるが、筑後国では八世紀前半代には八女窯跡群に須恵器生産が集約化される状況が伺え、筑前国と同じような生産体制がとられた可能性がある。

また、八女窯跡群では、管ノ谷一号窯跡から出土した肩部に突帯をもつ長頸壺の存在から肥後の影響が考えられる。さらに、勝立窯跡群・片

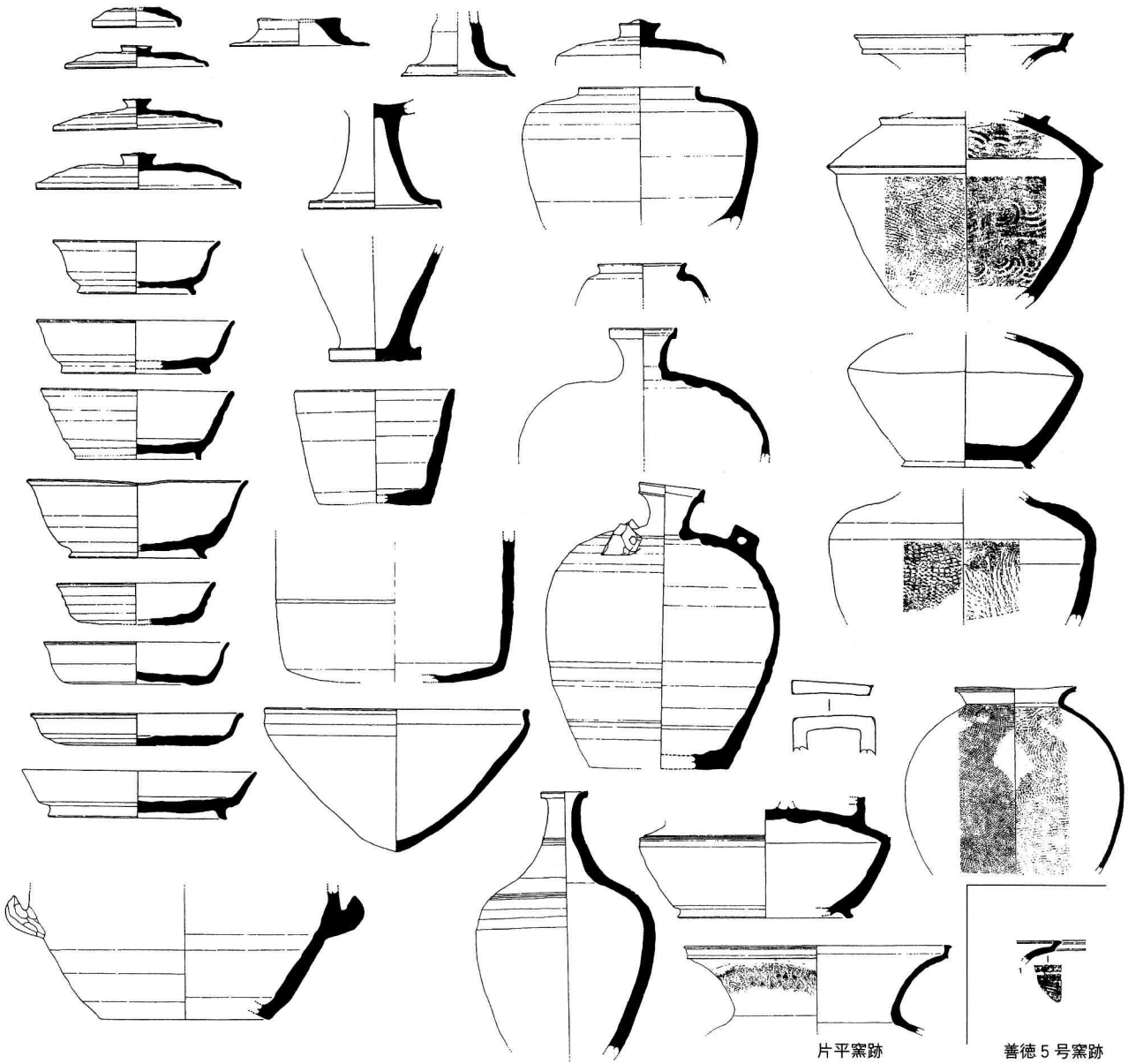


図12 筑後国内の窯跡出土遺物②

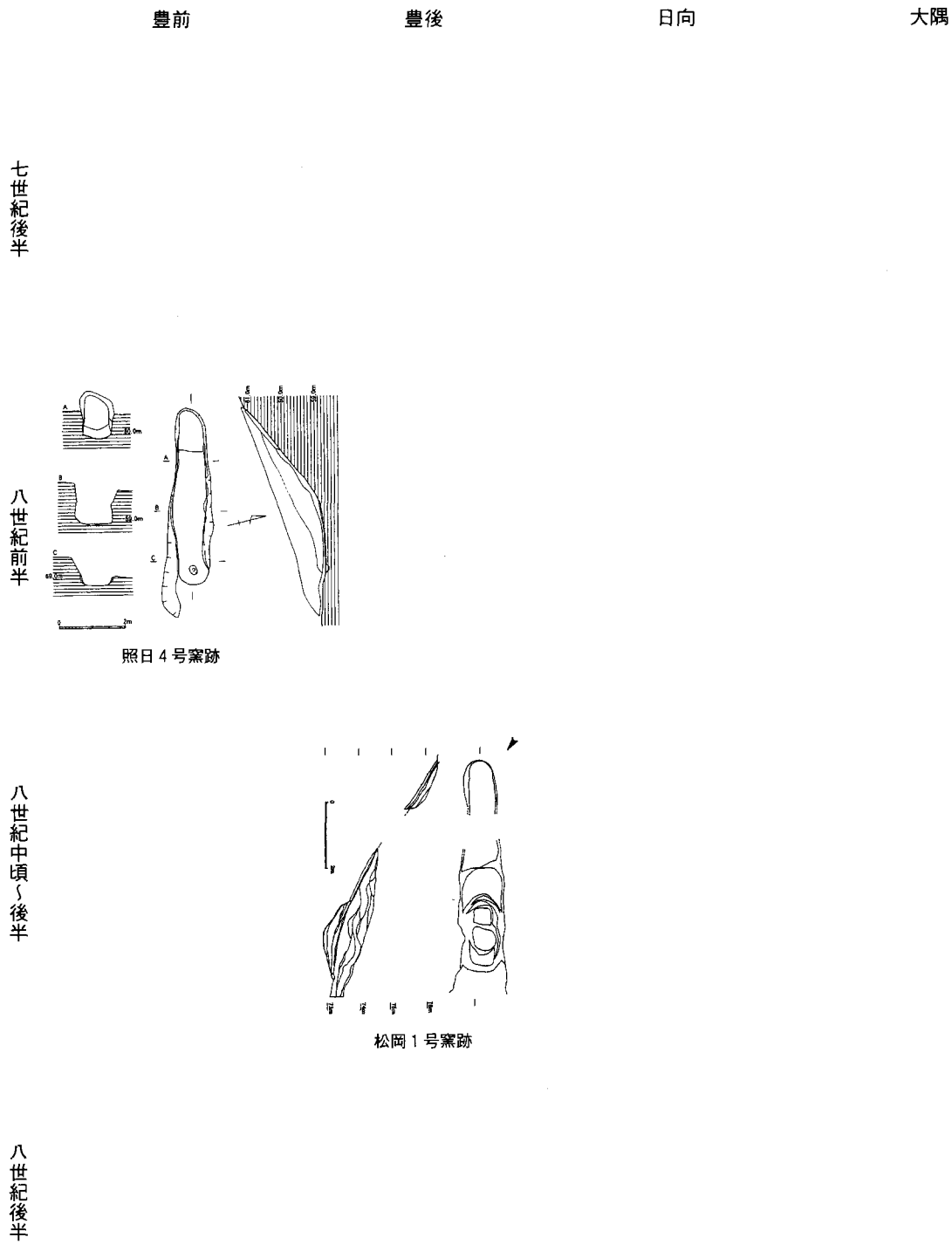


図13 九州東部の須恵器窯構造変遷図①(S=1/200)

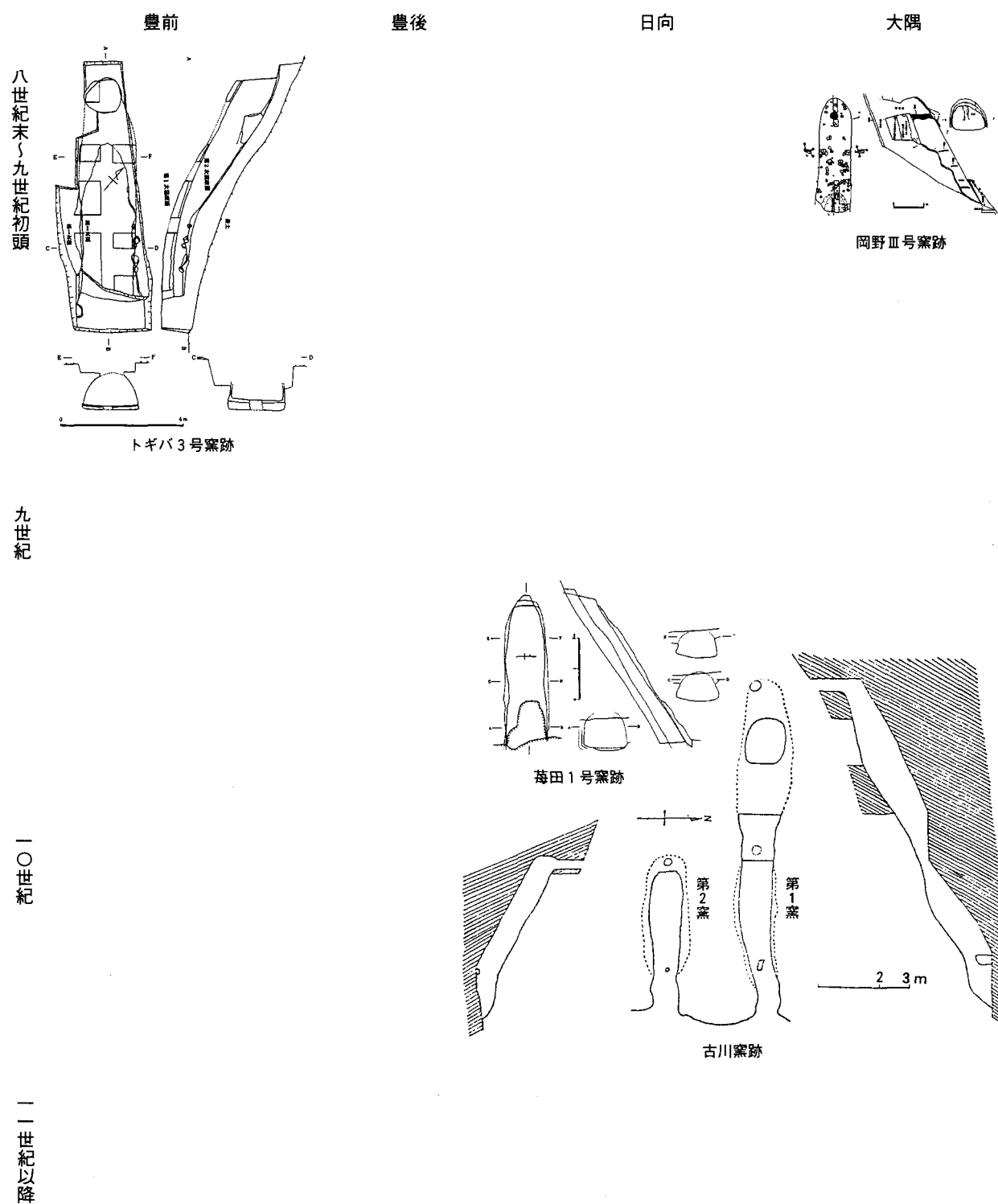


図14 九州東部の須恵器窯構造変遷図② (S = 1/200)

平窯跡の出土遺物から肥後国荒尾窯跡群の活動範囲が筑後国南部にまで及んでいることは明らかであり、八世紀後半頃の筑後国内ではそれぞれ異なる系譜をもつ工人が活動をおこなっている。しかし荒尾窯跡群とは諏訪川を境とし国が異なっており、国を越えた生産活動範囲が設定できることは、三毛郡側に古墳時代から続くような窯跡があり、それぞれ経営主体が異なるのか、肥後・筑後の国境が現在想定される所とは異なるのか、あるいは国・郡の領域を無視した形で窯が展開するのか検討を要する事項である。

#### 豊前国

律令期の豊前国には、田河郡・企救郡・京都郡・仲津郡・築城郡・上毛郡（以上福岡県側）・下毛郡・宇佐郡（以上大分県側）がある。豊前国における須恵器生産の動向については、『天観寺山窯跡群』の報告書中に成果が述べられている<sup>19)</sup>。この時に報告されたものは、各報告者が消滅しつつある窯跡・灰原から採集したものが主であり、現在でもこの地域の須恵器生産を考える基礎資料となっている。これらの資料を踏まえ、小田富士雄氏は豊前地方の須恵器生産についてまとめられている。氏は、七世紀中頃から後半代の窯跡は福岡県築上郡・大分県中津市・宇佐市などの豊前中・南部地域に集中するが、八世紀代になると天観寺山窯跡群の周辺を中心とする豊前北部地域に集中移動することを指摘され、「古墳時代から歴史時代に同一地域で推移してゆく生産体制はみとめられない」と結論付けられている<sup>19)</sup>。したがって、以下では小田氏の研究成果を基に、その後の調査成果を加えた上で、各郡ごとに須恵器窯跡の動向をとらえていく。

まず、田河郡では一九九五年作成の地名表には福岡県福岡市（旧赤池町）天郷窯跡・田川郡川崎町号四郎窯跡が報告されている。このうち、号四郎窯跡は奈良時代とされ、操業が確認できるが詳細は不明である<sup>19)</sup>。

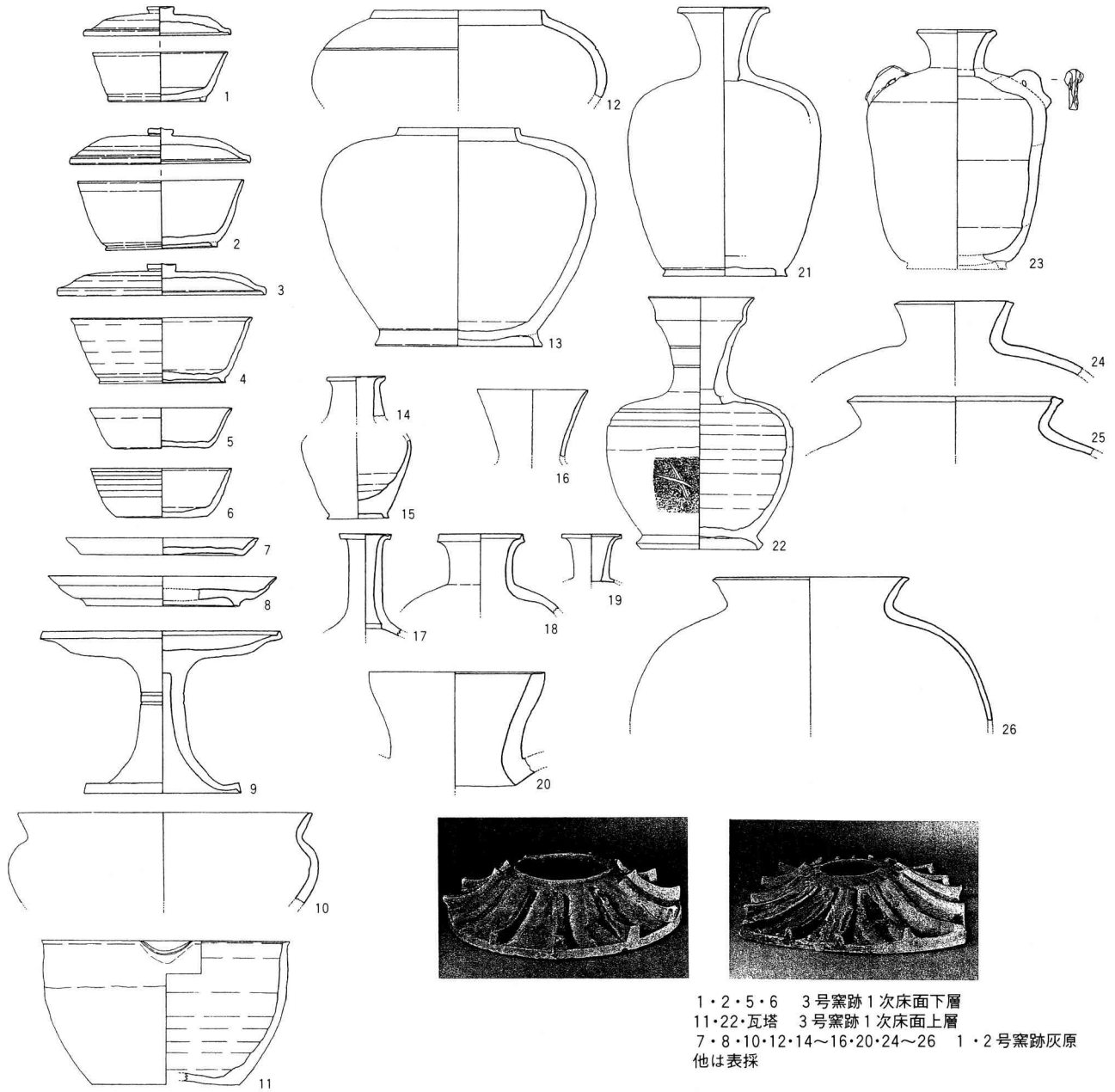
企救郡では、六世紀終わり頃から七世紀前半にかけて操業をおこなう

天観寺山窯跡群に隣接して、八世紀後半から九世紀にかけての窯跡が認められる。福岡県北九州市小倉南区に所在し、トギバ窯跡群・洗子窯跡群・御祖窯跡群・山方里窯跡群がある。これらは水晶山系窯跡群と総称されている。トギバ窯跡群は一九六七・六八年に調査がおこなわれており、三基の窯跡が確認された。トギバ三号窯跡は、全長七・四メートルを測り、当初は地下式であったが貼床にともない一部半地下式に移行したと考えられている。煙道部は直立しており、窯構造としては地下式直立煙道窯とすることができる（図14）。出土遺物には、杯蓋・杯身をはじめ多くの器種が認められ、八世紀後半から末に位置付けられる（図15）。二〇〇一年には洗子窯跡の調査がおこなわれた<sup>19)</sup>。窯体の調査はおこなわれていないが、灰原からはパンケース四〇〇箱を超える遺物が出土しており、八世紀後半から末頃の年代が考えられている。杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・短頸壺・長頸壺・横瓶・壺・甕・大甕・瓦塔などがあり、たくさんの器種が認められる（図16）。御祖窯跡群・山方里窯跡群でも同じような時期の遺物が採集されており（図17）、周辺では八世紀後半から末にかけて盛んな操業がおこなわれていたようである。また水晶山系窯跡群からはやや離れるが、粉ノ粉池窯跡群からも同時期の遺物が採集されており、七〜八基の窯跡が存在するようである（図17）。

以上のように、企救郡では八世紀後半から末にかけての操業が盛んな状況が伺える。また操業が確認されるのは、周防灘に面する水晶山系窯跡群と内陸の粉ノ粉池窯跡群があり、実態が不明な点が多いが複数の生産地が存在した可能性が高い。特殊な遺物としては、御祖窯跡群で円面硯、トギバ窯跡群・洗子窯跡群・御祖窯跡群・粉ノ粉池窯跡群において瓦塔の生産が認められる。



トギバ窯跡群



洗子窯跡群

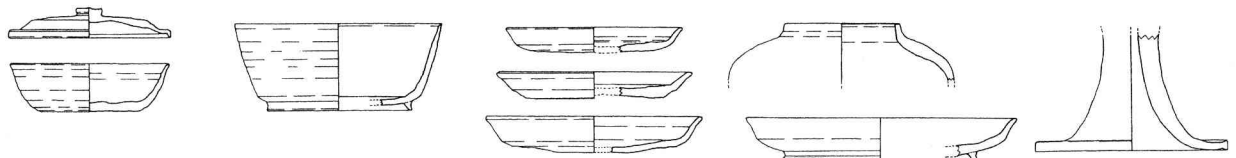


図15 豊前国内の窯跡出土遺物①

京都郡には、殿川窯跡がある<sup>(19)</sup>。窯跡は福岡県京都郡田町に所在し、古代の行政区分としては京都郡に属するが、先述した水晶山系窯跡群に地理的・時期的に近接することから一連のものとしてとらえられる。窯跡一基が確認され、杯・皿・甕などが出土している。八世紀代にあたる(図17)。

上毛郡には、照日窯跡群<sup>(43)</sup>・山田窯跡群<sup>(45)</sup>・四郎丸窯跡群<sup>(19)</sup>がある。照日窯跡群と山田窯跡群は福岡県上毛町(旧新吉富村)に所在し、両者の間は約三〇〇メートル程度と近接していることから一連の窯跡群として取り扱うことができる。確認されている窯跡は六世紀中頃のものを最古とし、六世紀代には照日窯跡群で三基、山田窯跡群で一基操業が認められ、集中した生産の在り方が認められる。七世紀前半の窯跡は確認されていないが、七世紀後半から八世紀前半にかけて瓦窯・瓦陶兼業窯が営まれている。照日四号窯跡は削平を受けており、窯構造は明らかでない部分があるが、残存長三・七メートルを測る地下式の窯跡である(図13)。床面からは須恵器に混じって瓦片が出土していることから、瓦陶兼業窯と考えられている。出土遺物には杯蓋・杯身・甕・平瓦がある。杯身は高台をもたず、丸底のものが主であり、杯蓋はかえりのあるものはなく、口縁端部を下方に折り曲げる特徴をもち、八世紀前半の操業が考えられる(図18)。

四郎丸窯跡は、福岡県豊前市に所在する。発掘調査はおこなわれていないが、須恵器とともに窯壁が採集されており、周辺に窯跡の存在が推定されている。出土遺物には、杯蓋・杯身・高杯・甕などともに円面硯の生産が認められた。七世紀後半から八世紀前半の操業を想定することができる(図18)。

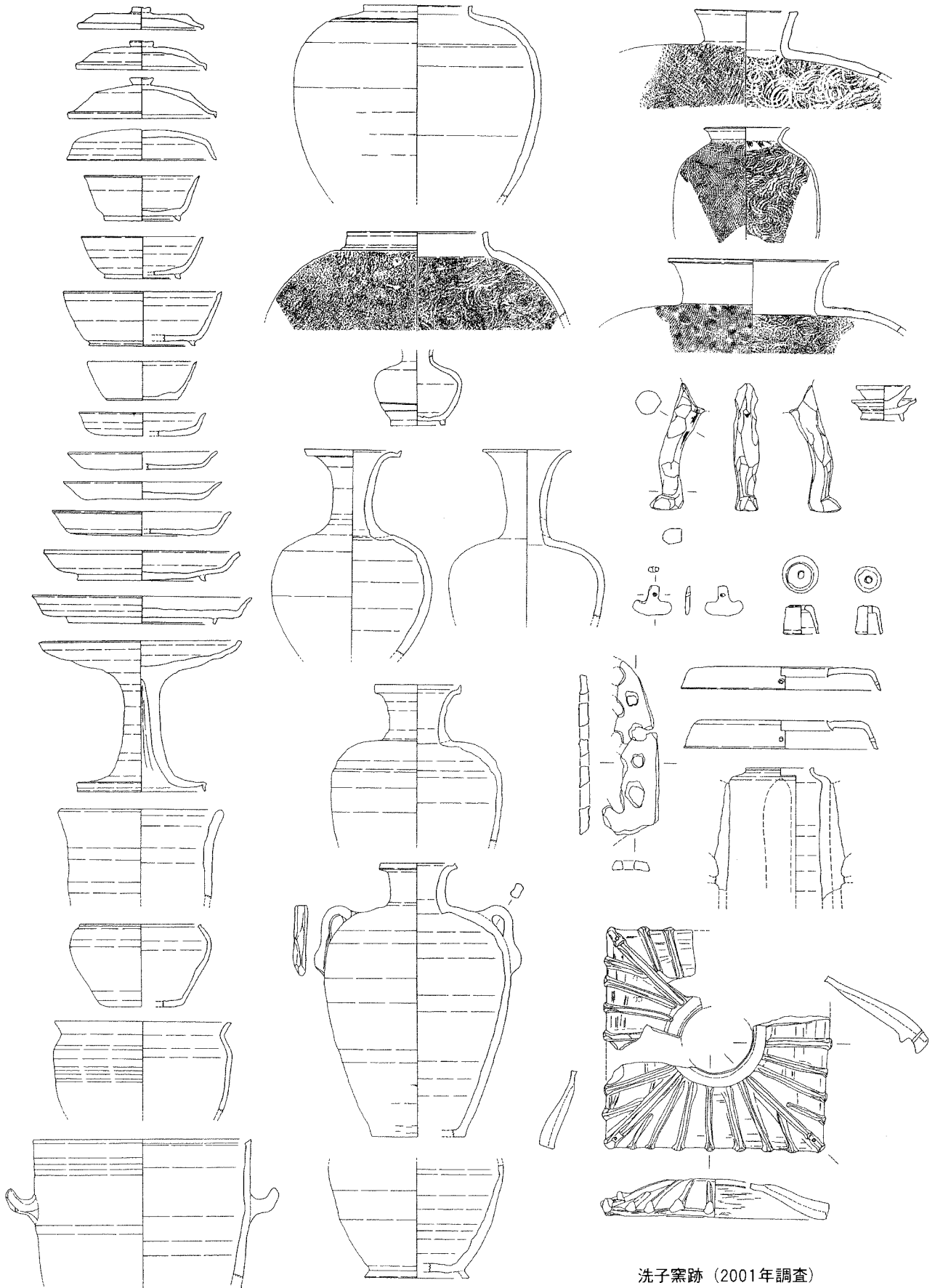
下毛郡には、大分県中津市所在の伊藤田窯跡群があり古墳時代より生産がおこなわれ、総基数は五〇〜七〇基におよぶと推定される規模のやや大きな窯跡群である。八世紀代に下がる窯跡は確認されていないが、

城山〇区においてこの時期の遺物が出土しており、調査の進展によっては今後窯跡が確認される可能性がある<sup>(46)</sup>。

宇佐郡には、野森窯跡がある<sup>(19)</sup>。野森窯跡は大分県宇佐市に所在し、出土遺物から瓦陶兼業窯であったと考えられ、杯蓋・杯身・高杯・甕などが採集されている。小片のため時期は決定しづらいが、七世紀後半から八世紀前半ごろと考えられる(図18)。

以上のことをまとめると、豊前国では七世紀後半から八世紀前半の窯跡が認められるのは上毛・下毛・宇佐郡で、八世紀後半以降の窯跡は企救・京都郡に集中する傾向が認められる。古墳時代の窯跡は、窯跡の実態が明らかでない田河郡を除いてほぼ各郡に認められ、仲津郡には初期須恵器窯として著名な居屋敷窯跡があり、五世紀前半代の操業が想定されている<sup>(47)</sup>。居屋敷窯跡に継続する窯跡は認められないが、六世紀後半になると各郡において一斉に操業を開始している。これらの窯跡は照日窯跡群や山田窯跡群のように短期的に終わるものと、伊藤田窯跡群や天観寺山窯跡群のように七世紀前半から中頃にかけてやや長期的に継続する窯跡群がある。伊藤田窯跡群は八世紀代まで生産が継続する可能性があるが、天観寺山窯跡群は八世紀後半代の窯跡が近接することから、窯跡群の周辺に間の時期を埋めるような未発見の窯跡が存在する可能性もある。したがって、小田氏が指摘する「古墳時代から歴史時代に同一地域で推移してゆく生産体制はみとめられない」ことは現時点では変わりはないが、今後の調査次第では変更する可能性がある。

生産動向から見ると、六世紀代に成立した窯跡群の周辺に数十年後に再び操業が認められるパターンがある。七世紀後半から八世紀前半に操業を再開するパターンとしては、照日・山田窯跡群があり、八世紀後半に操業を開始するパターンとしては水晶山系窯跡群がある。いずれも前代の操業から数十年が経過した後には再開されているが、継続することなく短期間で操業を終了している。



洗子窯跡（2001年調査）

図16 豊前国内の窯跡出土遺物②

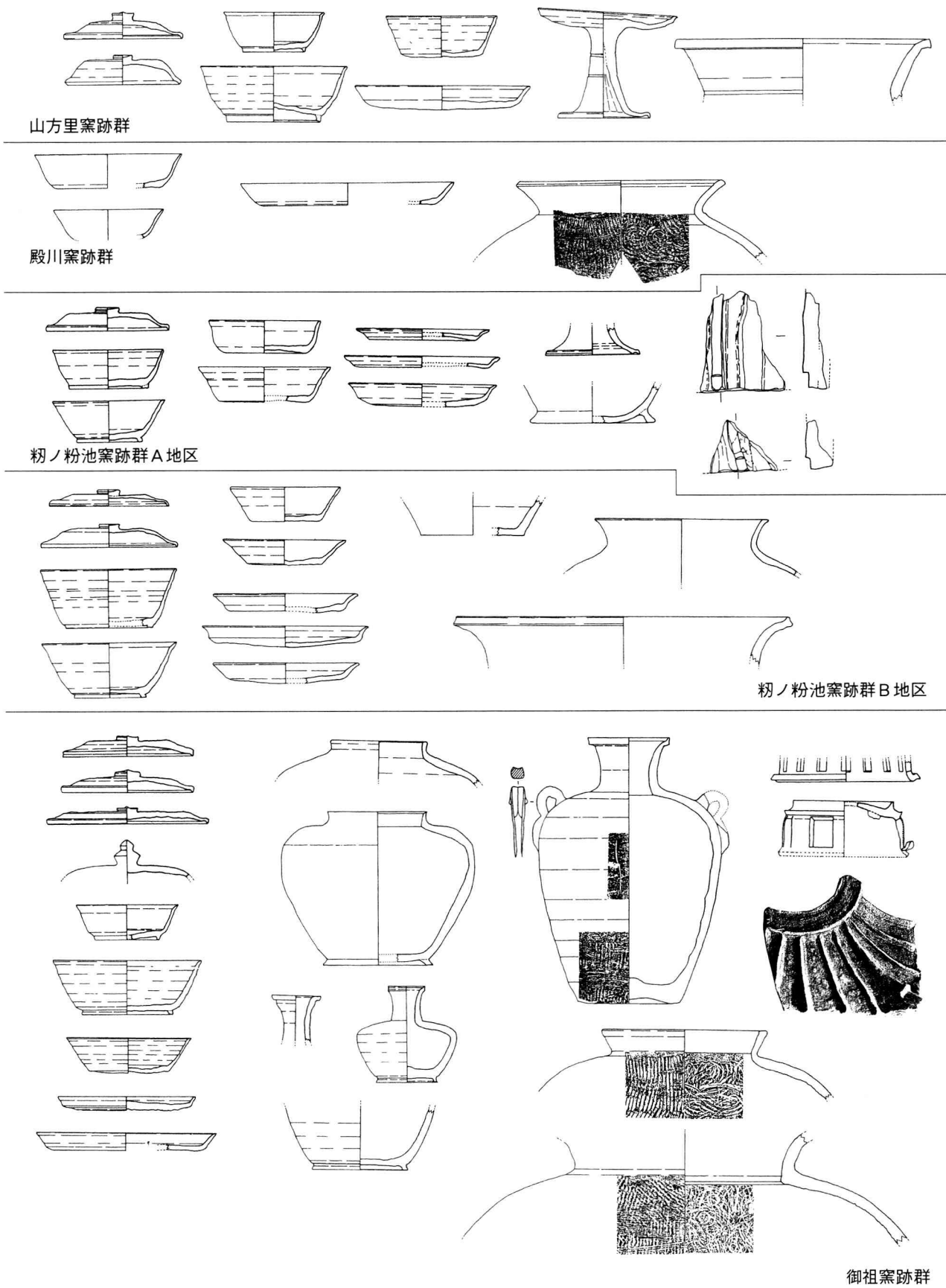


図17 豊前国内の窯跡出土遺物③

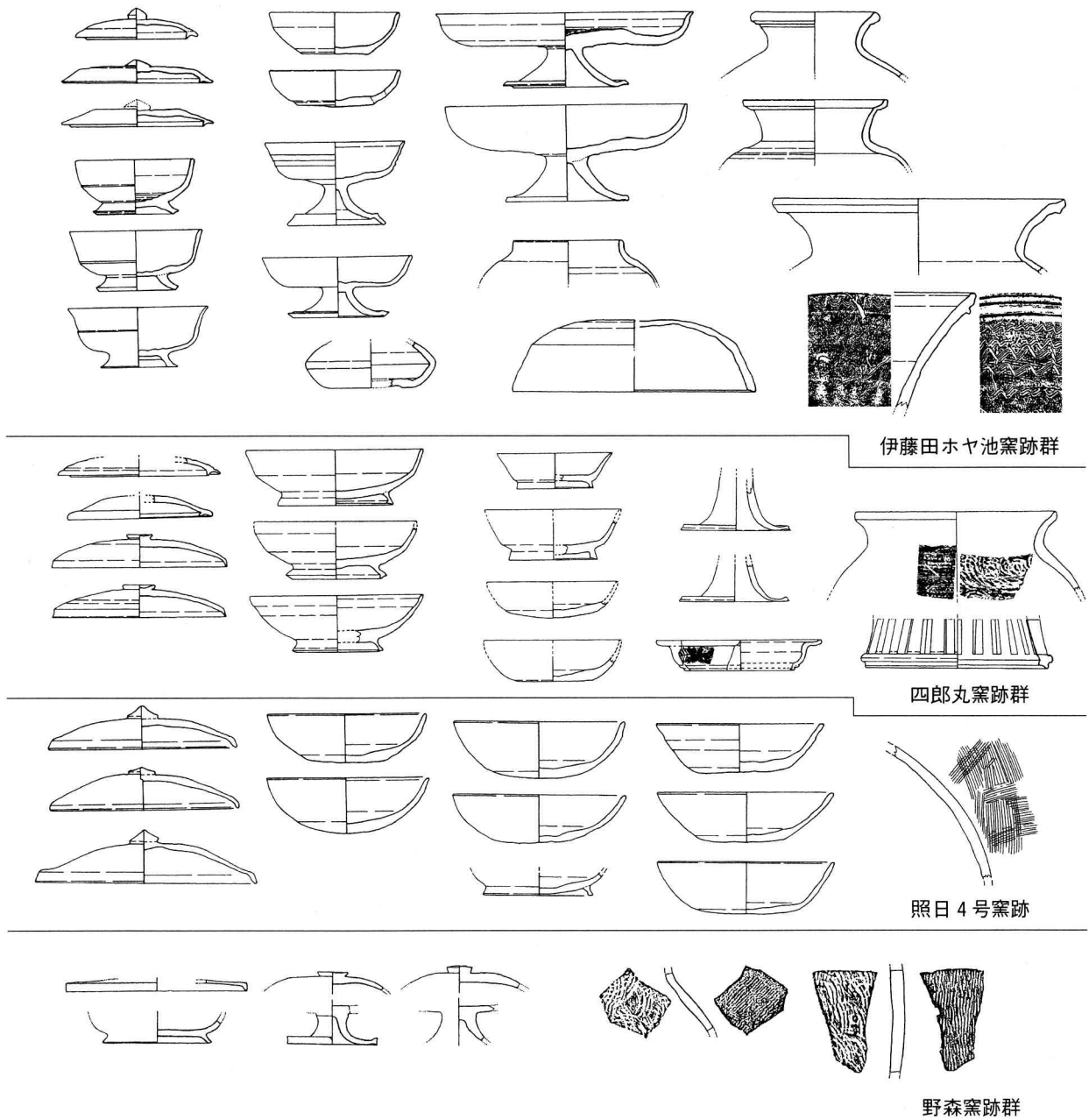


図18 豊前国内の窯跡出土遺物④

窯構造について判明するものは少ないが、トギバ三号窯跡は地下式直立煙道窯であり照日窯跡群も地下式として報告されている。

生産器種に関しては、個別の窯跡ごとの比較は難しいが、甕類の生産は八世紀後半代まで続いており、形態・特徴を見ると肥後の影響は認められないようである。洗子窯跡の調査では、パンケース四一三箱におよぶ出土遺物のうち、七二箱が甕の胴部片と報告されており、破片総量に占める割合は高いものである。また、瓦塔という特殊品も生産されていた。先述のように、瓦塔は牛頸窯跡群での生産も確認されたが、屋蓋の破片のみで他の部位の破片は認められない。一方、豊前地域では複数の窯跡から出土している。洗子窯跡の調査では、屋蓋・水煙・九輪・風鐸などがまとまって出土することから、組合せ式の塔として完成され、供給されたものであり、九州の他の窯跡群ではあまり見ることのできない遺物である。

これらのことから、小田氏の指摘のとおり豊前国では古墳時代から奈良時代にいたるまで継続して操業が続けられる窯跡群はなく、時期ごとに窯跡群が移動する在り方が明らかとなった。八世紀前半代の窯跡は上毛・下毛・宇佐郡に所在するが、さほど継続する状況は認められず、他郡において同時期の窯跡が確認されていないことから、一郡一窯体制を志向して編成されたようには見受けられない。逆に、八世紀後半以降は窯跡が企救郡南部から京都郡にかけて集中する傾向があり、筑前国のような一國一窯的な様相も示している。小田氏はこうした豊前北部における窯跡の集中が律令期の須恵器生産に深くかわるものとして、「官窯的性格」をもつとされている。また、豊前中・南部の窯跡群では瓦陶兼業窯が認められるのに対し、豊前北部の窯跡群では須恵器生産のみがおこなわれることも指摘されている。したがって、豊前国では八世紀後半頃に須恵器生産と瓦生産の再編がおこなわれ、須恵器窯を一ヶ所に集める集中した生産体制へと変化するものと考えられ、大きな画期としてとら

えることができる。

#### 豊後国

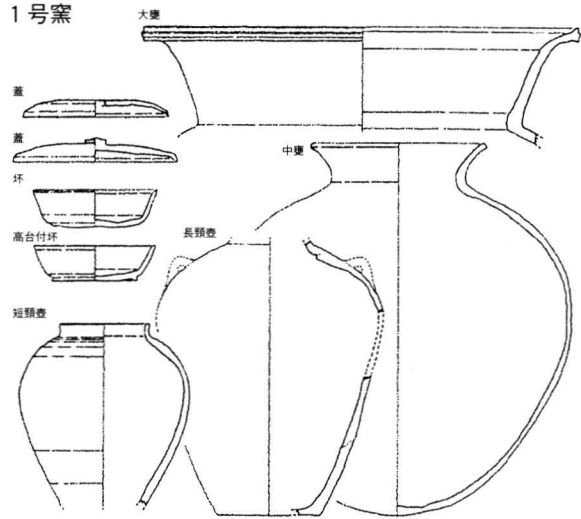
律令期の豊後国には、日高郡・球珠郡・直人郡・大野郡・海部郡・大分郡・速見郡・国東郡の八郡がある。従来須恵器窯跡の存在が知られていない地域であったが、一九九九年大分県大分市（律令期においては大分郡）において松岡窯跡群が発見された。窯跡は四基発見され、いずれも半地下式の窯跡である。

一号窯跡は全長七・二メートル、二号窯跡は全長六・七五メートル以上、三号窯跡は全長六・二メートル、四号窯跡は全長五・五メートル以上と若干の大小はあるものの、著しい規模の違いは認められない（図13）。また、いずれの窯跡も焚口部に大きな舟底状ピットを配する特徴がある。<sup>(48)</sup>出土遺物は杯蓋・杯身・杯・高杯・皿・長頸壺・短頸壺・長胴壺・小型壺・広口壺・中甕・大甕・円面硯などがあり、時期は八世紀中頃から後半に位置付けられている。型式変化から見ると、一号窯跡→四・三号窯跡→二号窯跡への変化が考えられている。<sup>(49)</sup>

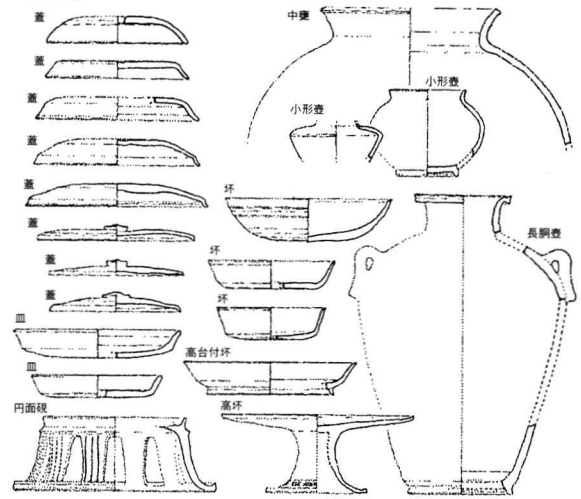
また、各窯跡において生産される器種に違いがあることが明らかにされている（図19）。それによると、一号窯跡は中・大甕の占める割合が大きく、皿類の出土がない。二号窯跡は甕類が全体の半分を占め、残る半分は杯蓋・杯身・皿類が均等に占めており、長頸壺・瓶類の出土がある。三号窯跡は各器種とも万遍なく出土しており、四基の中では最も多くの器種を生産し、特に壺類の種類が多いが、大甕は出土していない。四号窯跡は皿の出土がなく、杯より杯身の割合が多く、大甕より中甕の割合が多い。これらは時期的な並行関係に問題を残しているが、各窯跡間で分業がおこなわれた結果を示すものと考えられ、近接した窯跡における操業の実態を知る上で非常に興味深いものである。また、牛頸窯跡群で見られたような窯の小型化は認められず、同じような大きさの窯において器種の方業をおこなっていることが分かる。

松岡窯跡群

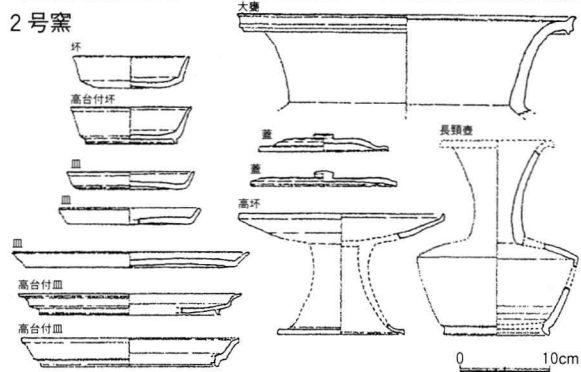
1号窯



3号窯



2号窯



4号窯

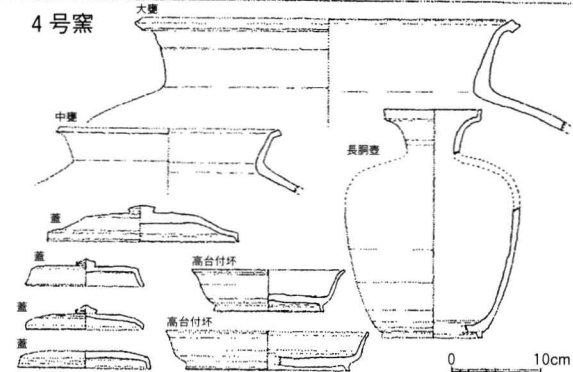
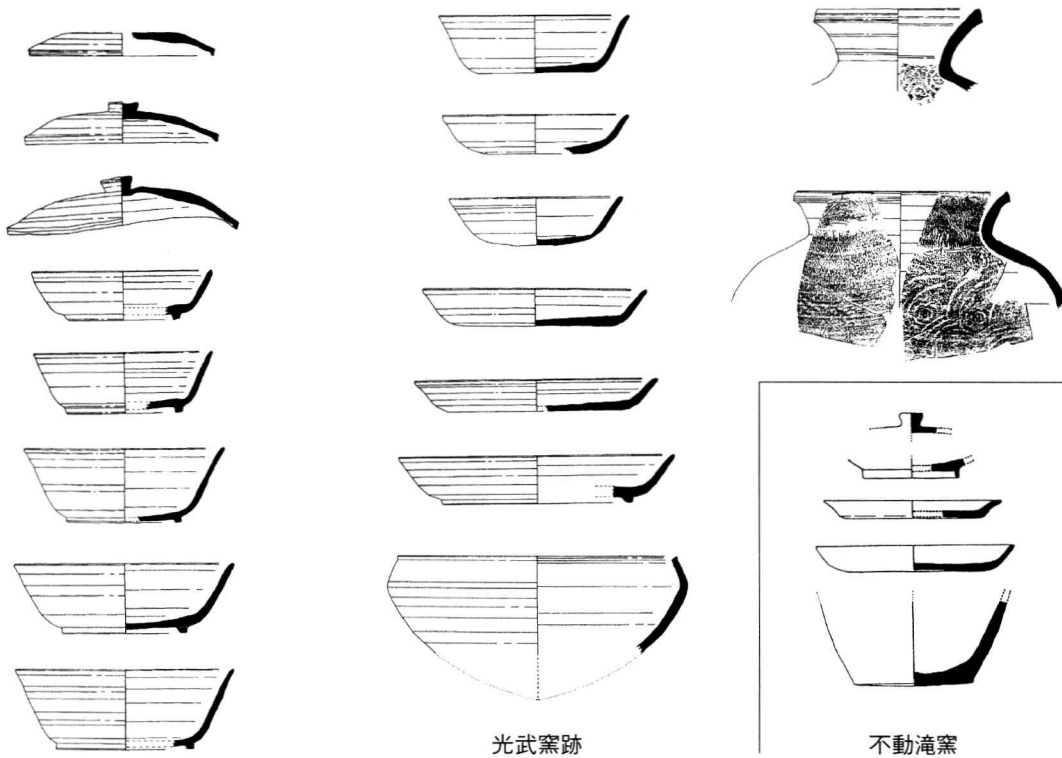


図19 豊後国内の窯跡出土遺物



光武窯跡

不動滝窯

図20 肥前国内の窯跡出土遺物①

以上のように、豊後国では八世紀中頃から後半の須恵器窯の存在が明らかとなった。事例が極めて少なく、確実なことは言えないが、現時点では八世紀中頃に須恵器生産の開始を認めることができる。また、松岡窯跡群に先行する窯跡は確認できず、その技術は他地域からもたらされたことは確実である。

松岡窯跡群では、窯構造から見ると半地下式構造をとることから、九州西部で顕著に見られる地下式の窯構造とは異なる。これが瀬戸内・四国など他地域からの技術移入か、土質の問題か理由は分からないが、網田氏により肥後地域に見られる「波状沈線」をもつ大甕の存在が指摘されており、一部の器種に肥後の影響が認められる。このことは技術導入にあたって、窯の構築と須恵器の製作にあたる集団が複数ある可能性を示すと考えられる。

#### 肥前国

律令期の肥前国は、基肄郡・養父郡・三根郡・神崎郡・佐嘉郡・小城郡・藤津郡・杵嶋郡（以上佐賀県側）・松浦郡・彼杵郡・高来郡（以上長崎県側）がある。このうち、須恵器窯跡が確認されるのは佐賀県側の佐嘉郡・藤津郡・杵嶋郡であり、現在の長崎県側では未発見である。

佐嘉郡では、不動滝窯跡群が挙げられる（図20）。佐賀県佐賀市に所在するが、発掘調査はおこなわれていないため詳細は不明である。杯蓋・杯身・皿などが採集されており、八世紀代にあたると思われる。

藤津郡には光武窯跡がある（図20）。佐賀県嬉野市（旧塩田町）に所在し、窯跡はすでに破壊されているようであるが、出土遺物には杯蓋・杯身・杯・皿・鉢・甕などがある。八世紀後半代と考えられる。また、光武窯跡の近隣には高月窯跡が知られており、八世紀代と推定されている。

杵嶋郡には向野山窯跡群・牧窯跡群がある。向野山窯跡は佐賀県武雄市（旧北方町）に所在し、朝日ダム内の岸面に三基の窯跡が確認されている。<sup>(53)</sup> 窯跡はダムの築堤工事により削平され、うち一基は窯跡の全体な

規模を知ることができ、それによると全長約八メートル、幅九〇〜一〇〇センチ、高さ一〇五センチの半地下式構造として報告されている。出土遺物には杯蓋・杯身・皿・長頸壺・甕・土馬などが出土している。杯蓋にはかえりを有するものを含んでおり、七世紀後半から八世紀前半の時期にあたる（図21）。

牧窯跡群は北方町教育委員会により一九七六年に調査・報告され、抜粋が『北方町史』に掲載されている。二基の窯跡があり、いずれも長さ三〜四メートルの小型の窯跡であったようであるが、窯跡の残存状態はよいものではなかったようで、地下式・半地下式を含めた構造については不明である。出土遺物には杯・碗・皿・壺・甕などがあり、九世紀代に位置付けられている（図21）。

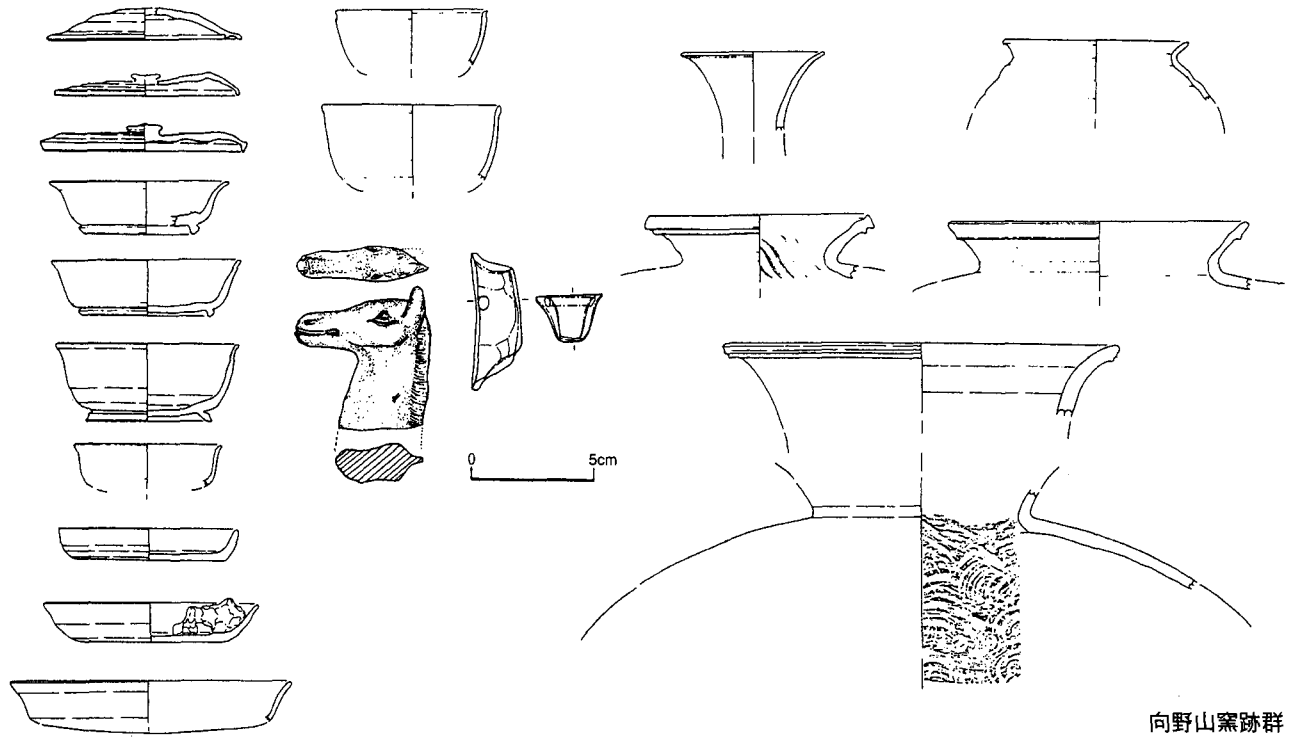
以上のように、肥前国では佐嘉郡・藤津郡・杵嶋郡において窯跡の存在が知られた。いずれも数基程度の群であったようであるが、調査が広範囲におこなわれていないため、確実なことは分からない。

古墳時代の窯跡は、初期須恵器窯として神籠池窯跡が知られている。佐嘉郡に所在し、五世紀後半の操業が考えられている。また『北方町史』には、佐賀県内の窯業遺跡として二カ所が集成されている。内訳は、埴輪窯跡一カ所・瓦窯跡三カ所・須恵器窯跡八カ所であり、神籠池窯跡の他にも古墳時代の須恵器窯跡も存在するようであるが、その後須恵器窯跡の調査はおこなわれていないため、詳細についてはよく分からない。したがって、現状では肥前国は須恵器生産が低調であり、古墳時代以来各郡において操業がおこなわれたような状況を伺うことはできない。出土例も少ないため他地域と比較することはできないが、荒尾産須恵器との技法の共通点があることが指摘されており、<sup>(54)</sup> 操業にあたって他地域の工人の参画も想定される。

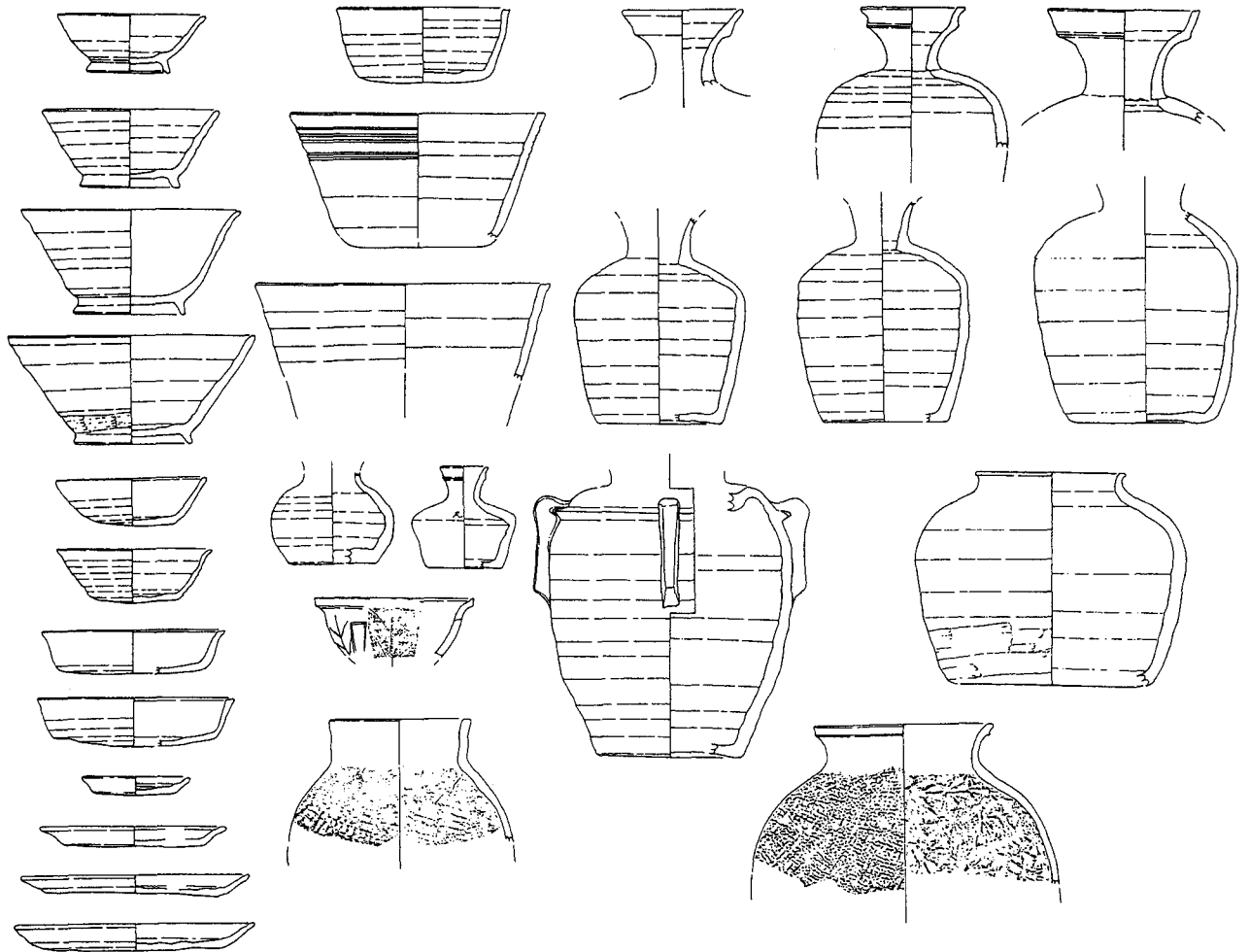
#### 肥後国

肥後国は現在の熊本県にあたり、律令期には玉名郡・山鹿郡・菊池郡





向野山窯跡群



牧窯跡群

図21 肥前国内の窯跡出土遺物②

阿蘇郡・益城郡・合志郡・山本郡・飽田郡・託麻郡・宇土郡・八代郡・天草郡・葦北郡・球磨郡の一四郡が知られている。この地域の須恵器生産については、『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』として一九八〇年にまとめられており、以後の研究における基礎資料となっている。<sup>(55)</sup>それによると、一九八〇年時点で熊本県内では九〇カ所の須恵器・瓦窯跡の生産地が知られている。これらは分布より、北から荒尾・植木・熊飽・宇城・八代・球磨窯跡群と六群に大別されており、現在もこの区分を基に研究が進められている。

網田龍生氏は、これらの窯跡群の動向を詳細に検討されている。氏は窯跡群の動向を郡ごとにとらえた結果、八世紀前半代は益城郡で集約的に生産がおこなわれるが、八世紀後半代になると益城郡・玉名郡の二大生産地が肥後国内で並存するとされている。さらに八世紀末ごろになると、球磨郡において生産がはじまるが、九世紀中頃以降にいたると壺・甕などに器種が限定される様相を明らかにしている。<sup>(56)</sup>その後、氏は窯跡群を旧郡単位で把握することについては、須恵器生産地の全体的な解釈を誤るものとして改めているが、本稿では旧国内の郡ごとの生産動向をとらえ、古代の生産体制を復元することを目的としている。したがって、以下では網田氏の研究成果を基にして、各郡ごとに須恵器窯跡の動向をとらえていく。

玉名郡は現在の熊本県荒尾市・玉名市・玉名郡にあたり、肥後国の北部にあたる。荒尾窯跡群は荒尾市周辺に広がる窯跡群で、『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』の地名表では約六〇カ所が知られている。群は大きく二つの支群に分けられており、『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』には多くの窯跡から採集された遺物が報告されているが、発掘調査された窯跡は意外に少ない。

八世紀後半の資料として、網田氏は荒尾市皮籠田A窯跡を挙げられ、器種が豊富であること、技法上の省力化は進んでいないことを明らかに

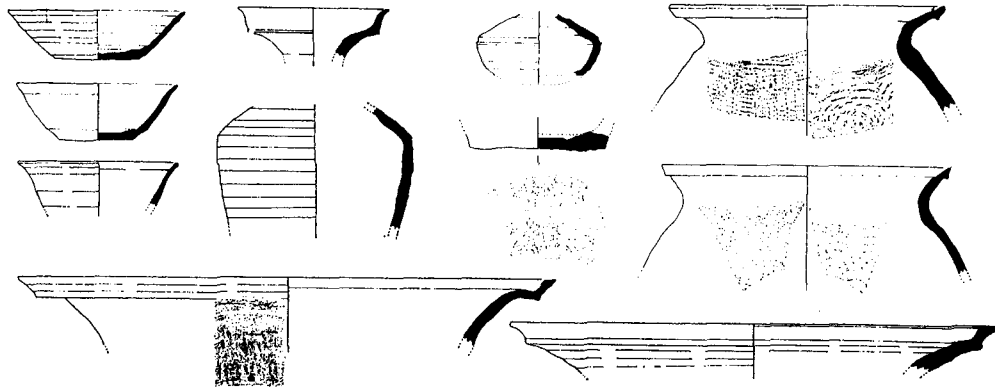
された。特に注目されるのは杯蓋・杯身の種類の多さであり、輪状つまみをもつ蓋は牛頸窯跡群ではあまり例のないものである。また大甕については、口唇部が内傾し、口縁部外面に波状文を施しており、この種の甕では古い形態を示す。窯構造については、正式報告はされていないが全長八メートルにおよぶ大型の窯跡で、焚口から燃焼部へむかつて一旦下がり、焼成部へかけて上がる構造であると報告されている。<sup>(57)</sup>

九世紀前半の例としては、下谷窯跡・葉師前窯跡を挙げられている(図22)。前代は器種が豊富であったが、この時期は減少している。生産の中心は壺・甕・大甕であり、大甕の口唇部は水平となり口縁部外面に見られた波状文はなくなるようである。

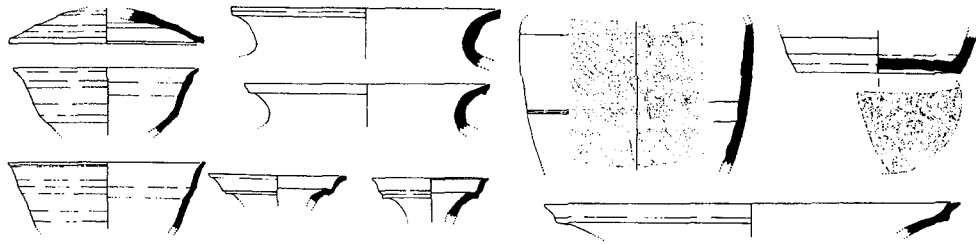
九世紀後半以降の事例としては、北山浦A窯跡を挙げられている。壺・蓋・皿の生産が認められるが、器種はさらに減少している。窯構造については、床面に段を作りつける特異な構造を示している(図9)。またこの窯跡は操業中に天井が崩落し、窯詰めした製品の量が何え、その数は壺が約二〇個、皿が約三〇個と報告される(図22)。これから見ると、一回の操業においてわずか五〇個程度しか生産されていないことになり、生産効率・コストは非常に悪く、生産量自体が極めて落ち込んでいると見られる。

以上のように、荒尾窯跡群では八世紀後半から九世紀前半に生産のピークが認められることが指摘されている。最も古い窯跡は大和窯跡で、六世紀終わりごろには確実に操業が認められるが、今のところ七世紀から八世紀前半の窯跡は確認されておらず、この時期は操業がおこなわれていたとしても小規模なものであったと考えられている。また須恵器生産のみで瓦の焼成は認められず、九世紀にはいると器種の減少が認められ、九世紀後半以降には生産量・器種ともに大きく減少していることが指摘されている。<sup>(58)</sup>

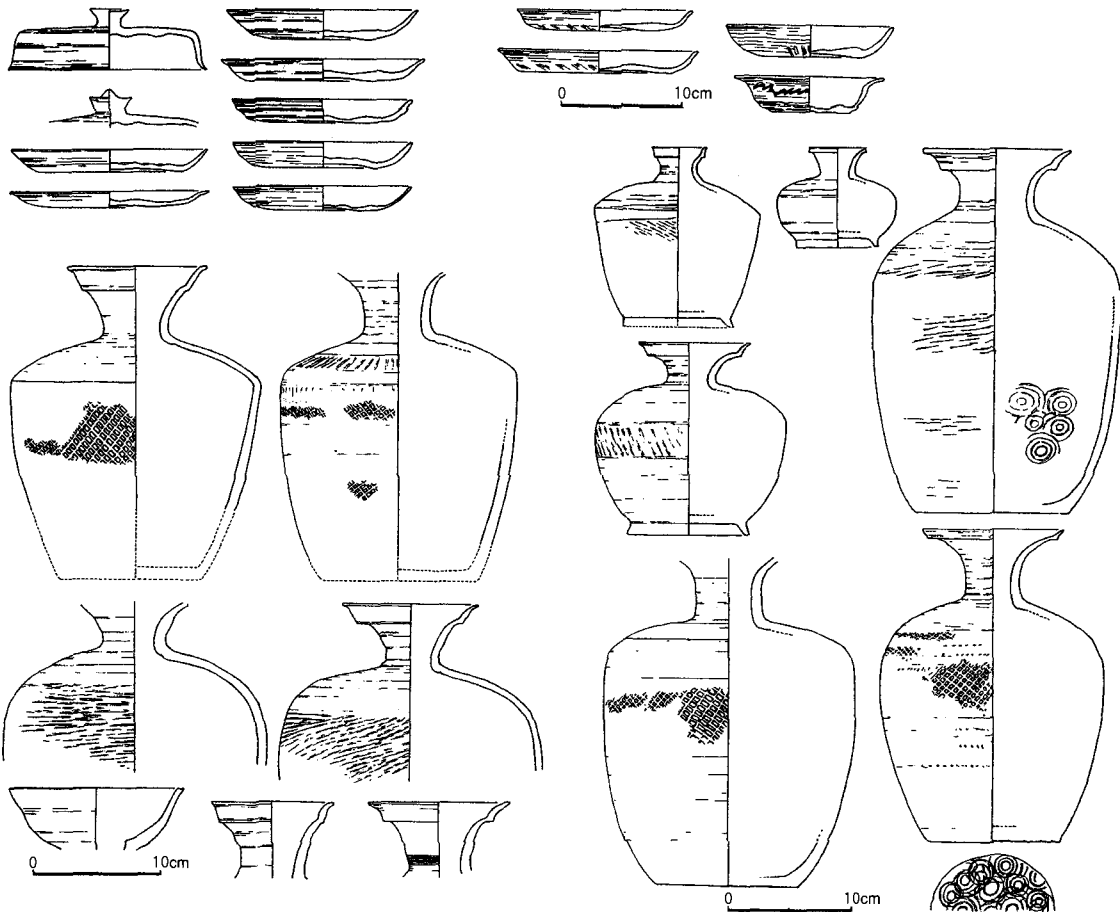
また、荒尾窯跡群は、一部筑後国南部の三毛郡にまでおよぶという国



葉師前窯跡

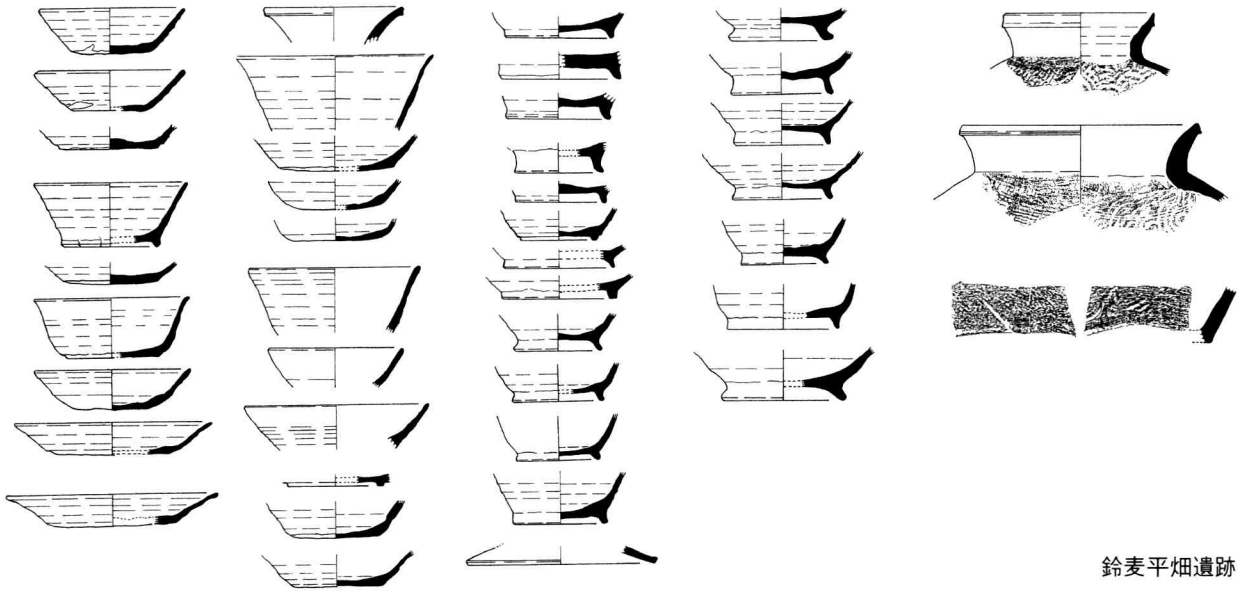


下谷窯跡

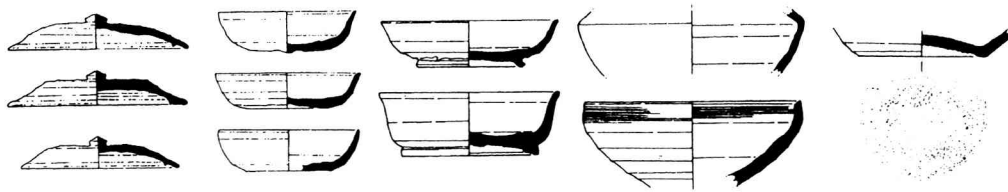


北山浦A窯跡

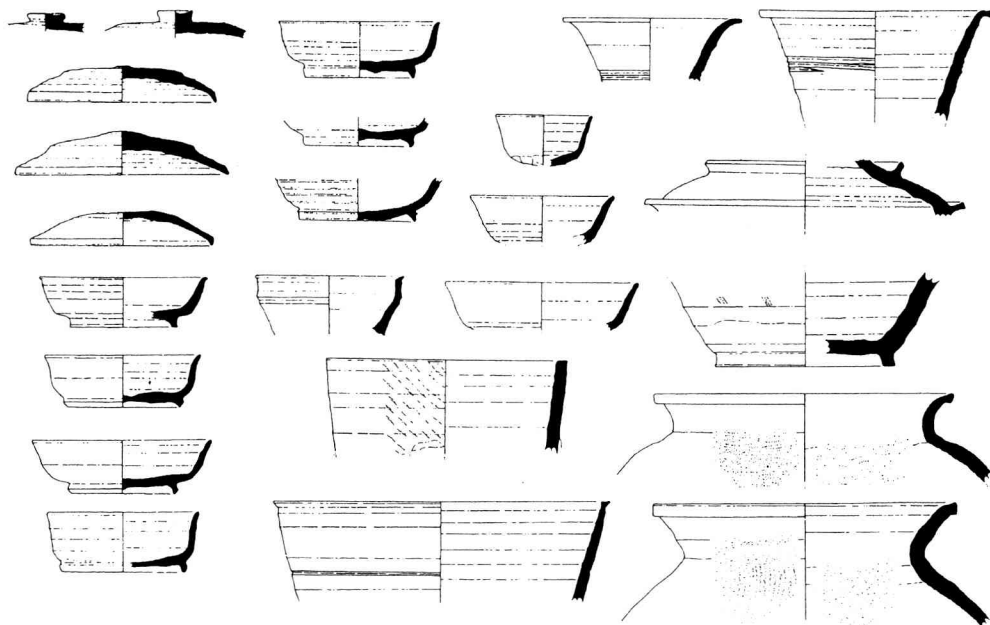
図22 肥後国内の窯跡出土遺物①



鈴麦平畑遺跡



元米ノ山窯跡



萩尾大溜池窯跡群

図23 肥後国内の窯跡出土遺物②

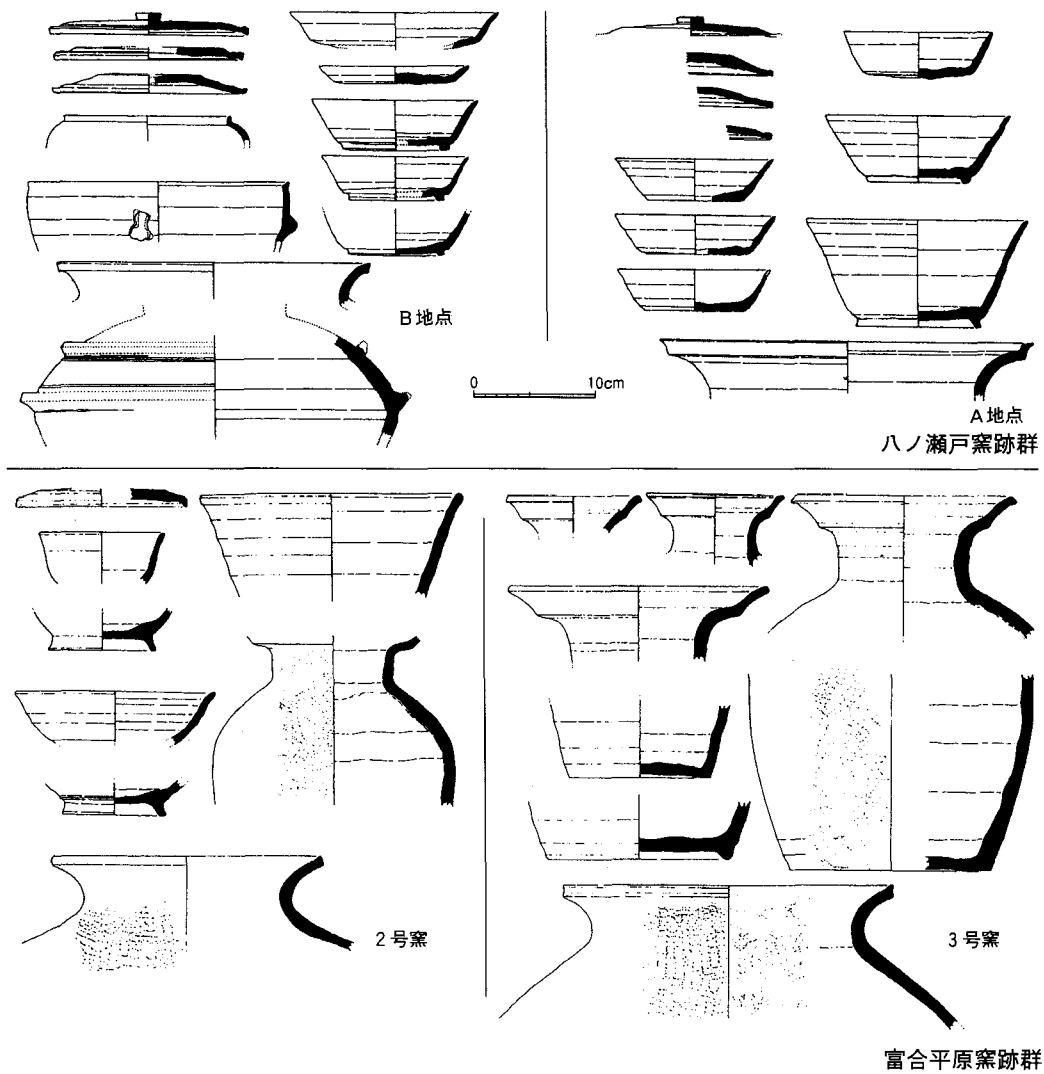


図24 肥後国内の窯跡出土遺物③

郡を越えた操業範囲が考えられる。この地域は弥生時代以来同じ文化圏にあたると考えられ、遺構・遺物についても共通性は認められるもの。律令期においても同様に理解してよいか判断がつかない。窯構造は、実測図が公開されていないため不明な点があるが、大型のものが採用され、甕類を焼成している。同時期の牛頸窯跡群には見ることができない特徴であり、遺物については技法の省略化が進んでいない点も指摘されていることから、実態解明が待たれる。

合志郡には、植木窯跡群がある。<sup>(59)</sup>『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』には、鈴麦窯跡が挙げられる。鈴麦窯跡は熊本県鹿本郡植木町に所在し、ミカン園造成により三基の窯跡が確認されている。出土遺物には杯身・杯などがあり、九世紀前半代にあたると考えられる。また平成一三年度には鈴麦平畑遺跡の試掘調査により九世紀前半代にあたる杯身・杯が出土しており、周辺に窯跡の存在が確認されている(図23)。

宇土郡は、現在の熊本県宇土市・宇土郡にあたる。島原湾に細長く突き出た宇土半島一帯の地域であるが、古代において郡域は、一部下益城郡まで広がっていたことが知られている。<sup>(61)</sup>この地域には宇城窯跡群がある。群は宇土郡・益城郡に広がり、通常一括して取り扱われるが、ここでは宇土郡域と益城郡域の窯跡群に分けて見ていく。

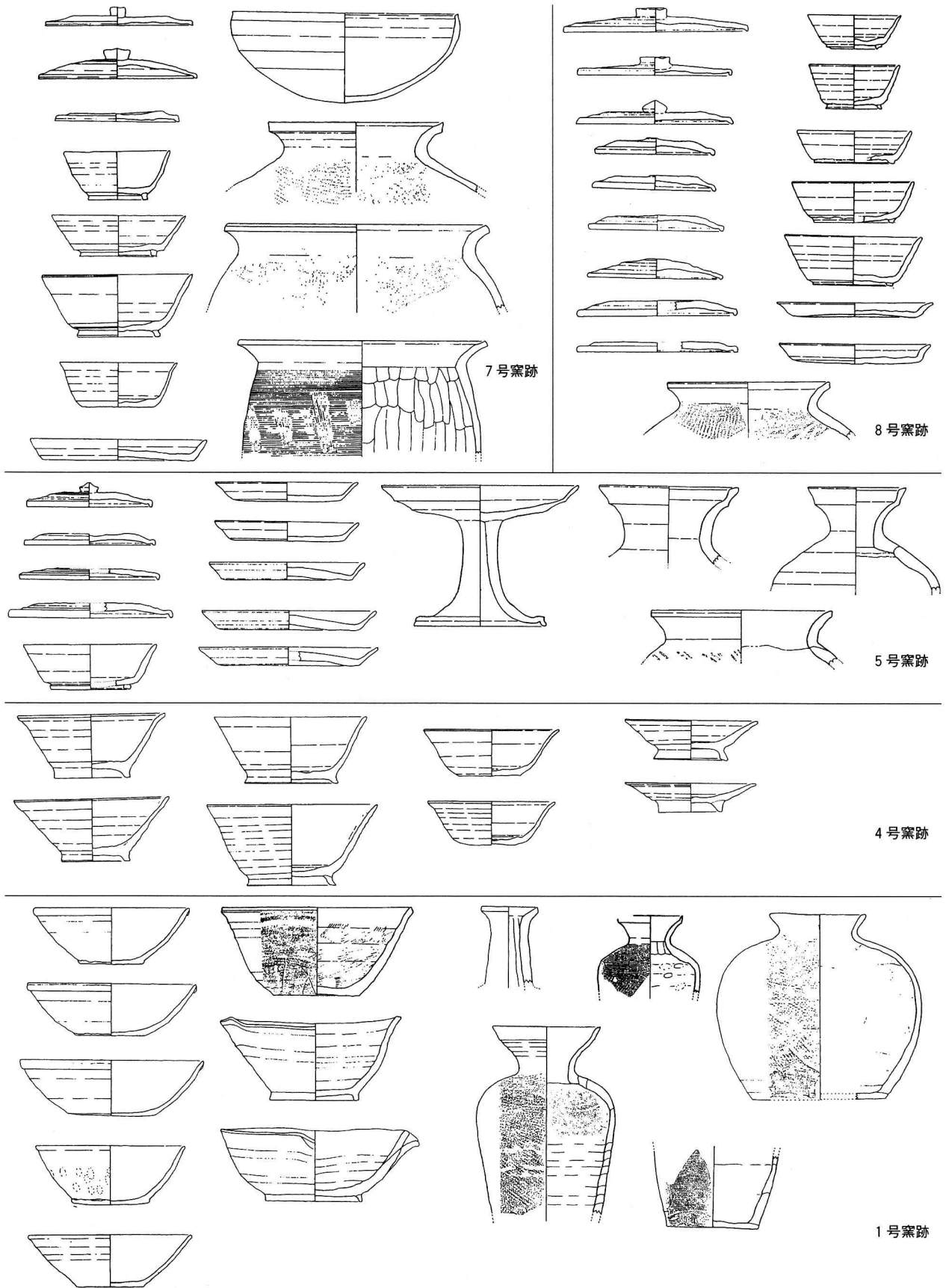
元米ノ山窯跡は宇土市に所在する。全長二メートルにおよぶ大型の窯跡<sup>(55)</sup>で、窯跡・灰原からは杯蓋・杯身・杯・鉢・壺・甕などが出土しており、六世紀後半と七世紀後半の遺物がある(図23)。また、元米ノ山窯跡の近隣には朱斗叶末窯跡の存在が知られており、六世紀後半ごろには周辺で盛んな操業がおこなわれていたことが伺える。<sup>(62)</sup>宇土郡域では八世紀代の窯跡は、現在のところ知られていないものの、今後発見される可能性がある。

益城郡は、現在のの上益城郡・下益城郡の地域にあたる。先述のとおり、宇城窯跡群が広がる地域であり、盛んな操業が伺える。

宇城市(旧松橋町)萩尾大溜池窯跡群は、溜池の周辺に窯跡が所在し、確認された数は七基にのぼり、周辺にも窯跡の存在が想定されることから、一〇〜二〇基で構成される窯跡群と想定されている。<sup>(55)</sup>報告されているのは採集遺物であるため資料的制約はあるが、杯蓋・杯身・鉢・壺・甕などがあり、輪状つまみをもつ蓋の存在もわずかながら認められることである。<sup>(61)</sup>また突帯をもつ壺も出土しており、この種の遺物の生産時期を知る上で重要である。遺物には六世紀代のもものと八世紀前半代のもものが含まれているが、六世紀代の資料は少ない(図23)。宇城市(旧豊野町)八ノ瀬戸窯跡は、隣接する二基の窯跡が確認されている。窯体は完掘されていないが、一号窯跡は瓦窯、二号窯跡は須恵器窯である(図9)。杯蓋・杯身・皿などがある(図24)。網田氏により、八世紀後半代の資料とされている。<sup>(61)</sup>九世紀代の窯跡としては、前葉期として宇城市(旧豊野町)八ノ瀬戸窯跡群A地点・後半代は下益城郡富合町富合平原窯跡を挙げられる。富合平原窯跡は三基の窯跡が確認され、「瓦を主とし、須恵器を従とする瓦陶兼業窯である」とされ、壺類・甕などが出土しており、杯蓋・杯身などの小型器種は少ない(図24)。

球磨郡は、現在の熊本県南部の人吉盆地周辺にあたる。この地域の窯跡群は球磨窯跡群が知られており、『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』では五カ所の窯跡が知られており、須恵器のみではなく、瓦窯の存在も知られている。<sup>(55)</sup>

発掘調査がおこなわれたのは下り山窯跡群のみである。九基の窯跡の時期は出土遺物より二期に分けられ、下り山一期は八世紀中頃から九世紀代、二期は一一世紀後半から一二世紀前半に位置付けられている。<sup>(63)</sup>下り山一期は四・五・七・八号窯跡があり、七・八・五・四号窯跡の順に築造されたと考えられている。<sup>(55)</sup>窯構造は地下式直立煙道窯であり、築造順にしたがい小型化していく様子が伺える(図8)。<sup>(64)</sup>出土遺物には杯身・杯蓋・杯・高杯・皿・鉢・甕などがあるが、器種は豊富ではない。また



下り山窯跡群

図25 肥後国内の窯跡出土遺物④

甕は中小型のもののみで、大甕は図化されていない。さらに甕の生産が認められるのは七・八号窯跡のみであり、五・七・八号窯跡において小型品の占める割合が高いという指摘がある(図25)。

下り山二期は一(一)三号窯跡があり、椀・鉢・瓶・壺・甕がある。窯構造から薩摩カムイヤキ窯跡との類似も指摘されていたが、下り山窯跡が奥壁からやや焚口側へよったところに直立煙道を設置するのに対し、カムイヤキ窯跡は傾斜煙道を採用する点で違いが指摘されている。また各器種の製作痕跡の観察から、両者の窯工人が相互に交流がしていた状況は確認できないとされている<sup>(66)</sup>。

以上のように、肥後国では宇土郡・益城郡に広がる宇城窯跡群において、ほぼ六世紀後半代から九世紀にいたるまで継続的に操業がおこなわれているようである。特に八世紀以降は益城郡内で連続した操業が伺え、肥後国内における須恵器生産の中心となる地域である。また、八世紀後半には玉名郡・球磨郡、九世紀前半代には合志郡に生産が拡大していることが分かり、網田氏の見解を裏付ける結果となった。さらに、氏は玉名郡に所在する荒尾窯跡群を取り上げ、技法の特徴から荒尾産須恵器を抽出した結果、福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県の広い地域に分布することを明らかにしている<sup>(51)</sup>。

出土遺物については、特に輪状つまみをもつ杯蓋・体部に突帯をつける長頸壺・二重口縁を呈する大甕は他地域の窯跡から出土することは少なく、これらの器種の生産が肥後を中心としたものであったと考えられる。窯構造は、資料数が少なく、確定することは難しいが、下り山窯跡群では時期が降るにつれて規模が縮小する傾向が伺える。また、皮籠田A窯跡や北山浦A号窯跡例から考えると、基本的には大型の窯を採用していたようであり、筑前牛頸窯跡群とは異なる在り方を示す。

肥後国は、九世紀代には九州の須恵器生産の中心地であったと思われるが、九世紀後半以降に位置付けられる北山浦A窯跡にみるように、生

産量は落ち込んでおり、その活動は活発ではなくなっている。このころから約一〇〇年以上の間須恵器生産の様相は不明であるが、一一世紀後半になると下り山窯跡群において須恵器生産が認められる。下り山二期の間を埋めるような窯跡が存在するのか不明であるが、同じ丘陵斜面上に位置し、窯構造も煙道の配置に若干の違いはあるが地下式直立煙道窯を踏襲する点では共通する。小規模ながら生産活動が続くのかもしれないが、時期的な懸隔は大きい。

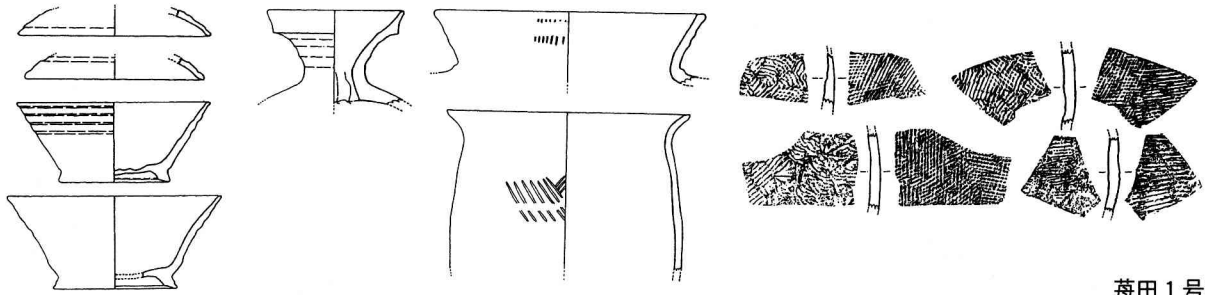
#### 日向国

日向国は、現在の宮崎県全域と鹿児島県の一部を含んだ地域にあたる。臼杵郡・児湯郡・那珂郡・宮崎郡・諸県郡があり、確認されている窯跡の数は少ないが臼杵郡・宮崎郡に所在することが知られている。確認されている窯跡は、いずれも八世紀以降のものであるが、古墳時代の窯跡の存在も想定されている<sup>(67)</sup>。

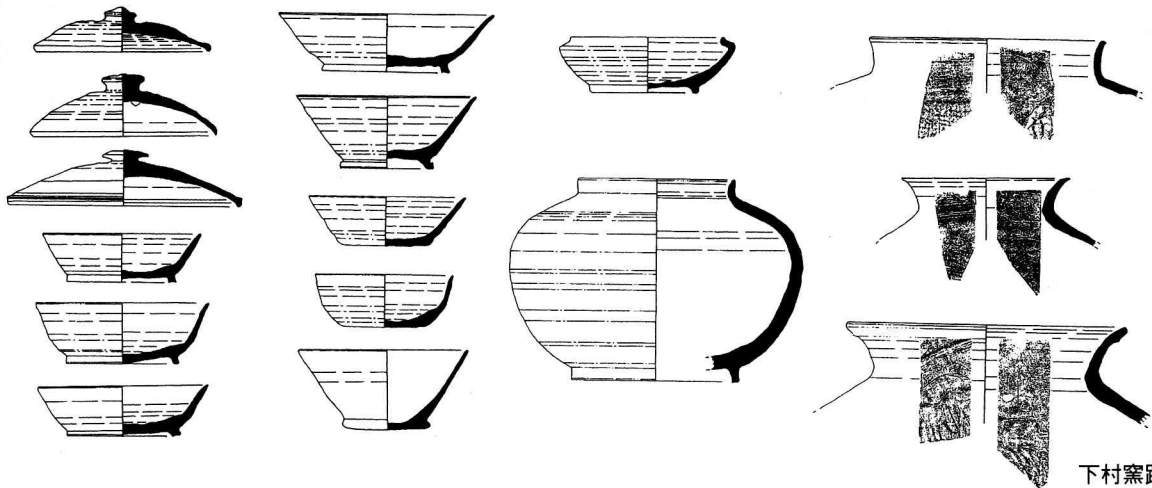
臼杵郡は、宮崎県北部の延岡市・日向市・東臼杵郡・西臼杵郡にあたる。この地域の窯跡は、古川窯跡・苺田窯跡があり、いずれも延岡市に所在する。苺田窯跡は二基の窯跡が確認され、うち一基を完掘している。一号窯跡は焚口部を削平されていたが、全長七メートル程度と推定される半地下式の窯跡である。遺物量は少ないが、蓋・椀・杯・壺・甕が認められる。甕の当て具には平行条線文と車輪文が使われており、口縁部形態からみると大甕の類とされ生産が確認できる。時期は「一〇世紀中頃より下らない時期」と報告されている(図26)。

古川窯跡は未報告のため詳細は不明な点が多いが、窯跡は一部重複するが三基存在したものと考えられている。いずれも半地下式の窯跡であったようで、煙道は直立している。二号窯跡は、全長四・五メートルと小型の窯跡である。焼成部奥側には、一・二号窯跡ともに分焰柱と考えられる石材や粘土柱の存在が報告されている<sup>(68)</sup>。時期は九一〇世紀ごろかと推定されている(図14)。

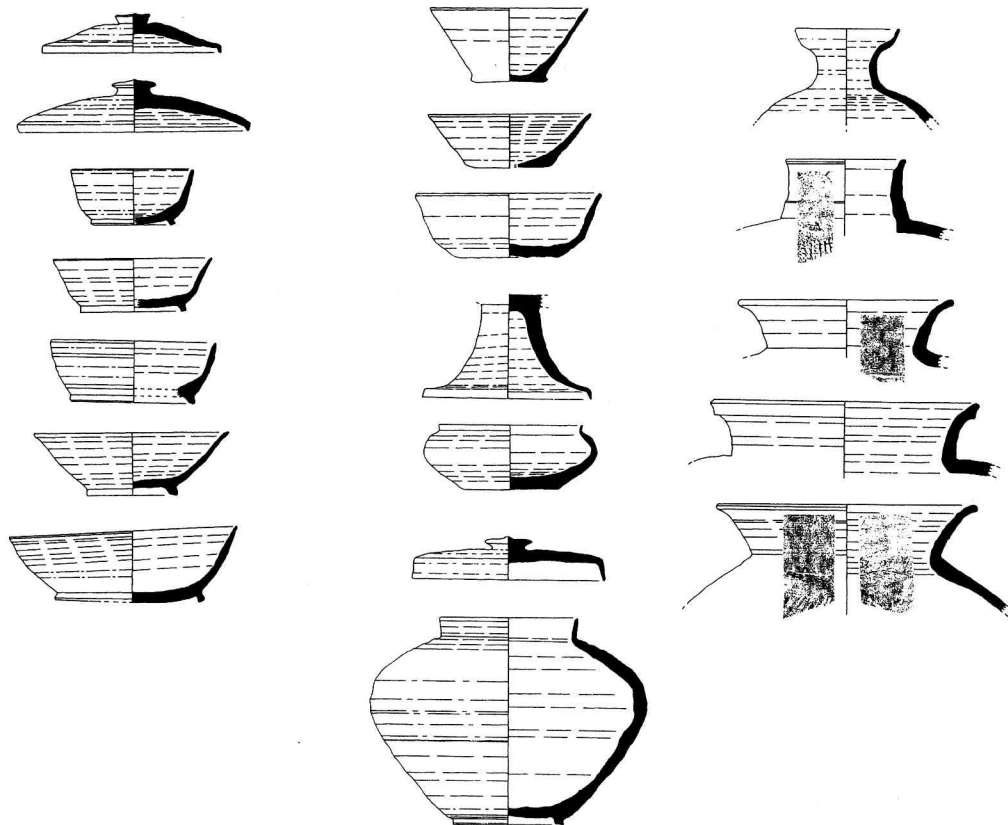




苺田1号窯跡



下村窯跡群A地区



下村窯跡群B地区

図26 日向国内の窯跡出土遺物①

宮崎郡は宮崎市周辺にあたる。この地域の窯跡は、下村窯跡群・松ヶ迫窯跡群がある。下村窯跡群は、旧佐土原町の中央部近くに所在する佐土原丘陵周辺に位置する。窯跡は、丘陵斜面から須恵器・瓦が採集されることから一九九〇年より試掘調査・発掘調査が実施され、A・Eの五地区から一〇基の窯跡が確認された。窯体はいずれも半地下式の小型の窯跡であったようで、出土遺物には杯蓋・杯身・杯・皿・高杯・鉢・壺・甕・瓦などがあり、八〜一〇世紀にかけての時期が考えられている(図26・27)。

松ヶ迫窯跡は、一九六六年に調査が実施されている。窯跡二基が調査され、この他にも周辺から須恵器が採集されており、窯跡の存在が想定される。窯跡は二・八〜三・四五メートルの小型の窯跡であることが知られている<sup>(21)</sup>。時期は、牛頭窯跡群資料との対比から、一号窯跡を八世紀後半から九世紀初頭、二号窯跡を八世紀中頃とされており、さらに九世紀代の操業も想定されている。

以上のように日向国では窯跡の存在は少ないが、いずれも八世紀中頃以降の操業が考えられる。窯構造は全長五メートル以下の小型の窯跡がほとんどであり、確認されている窯跡はいずれも半地下式構造を採用していることから、九州東部における特徴と考えられる。こうした小型の窯においても甕の生産が認められ、下村窯跡群C―三号窯跡灰原からは大甕の出土も認められる。

#### 薩摩国

薩摩国は現在の鹿児島県西部と甕島を含んだ地域にあたる。出水郡・高城郡・薩摩郡・甕島・伊作郡・日置郡・阿多郡・河辺郡・穎娃郡・揖宿郡・給黎郡・谿山郡・鹿児島郡の一三郡がある。この地域の須恵器窯跡も日向・大隅国と同様に非常に数が少なく、高城郡・阿多郡において須恵器窯跡が確認されている。

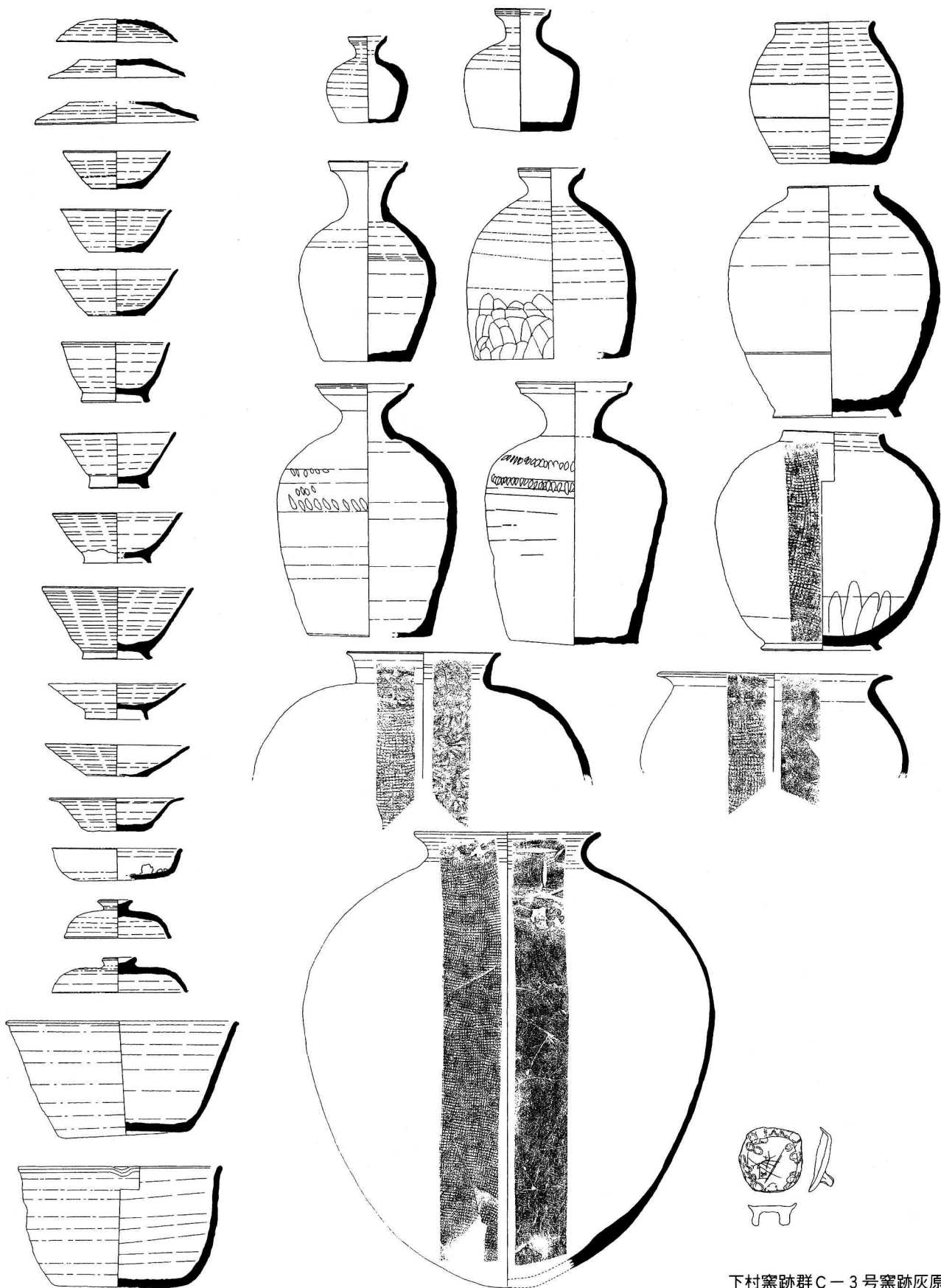
高城郡には、鶴峯窯跡群がある。薩摩川内市(旧川内市)に所在する

薩摩国府跡の北東約一キロの所に位置し、二基の瓦窯とともに須恵器窯跡一基が確認されている。鶴峯三号窯跡は須恵器窯跡であり、焼成部のみ調査であったが、半地下式構造をとることが知られている。構造の特徴としては、「燃焼部入口で天井が一段低くつくられ、中央に支柱を設けていたことと、煙道近くの西寄りにも急傾斜で内傾する壁面を支える支柱を設けて」いることが指摘されている。粘土柱の直径は、二〇センチ程度と報告されている(図8)。遺物は少量であり、杯蓋・杯身・甕などが出土している。八世紀前半に位置付けられている(図29)。

阿多郡には、中岳山麓窯跡群がある。群は、薩摩半島の中央部にある南さつま市(旧金峰町)中岳南西山麓に分布する。窯跡群は一九八四年にスサ入り粘土塊が発見されて以降、上村俊雄氏らの調査により遺物が採集され、その存在が明らかになった。発掘調査を経ていないため、窯体の様相は明らかではない部分があるが、すべて半地下式であったと推定されている<sup>(23)</sup>。また、その後の分布調査で荒平窯跡群第一・二支群・獄山窯跡群第一・二支群・テンド堀窯跡群の五つの群が知られている<sup>(24)</sup>。分布調査により確認された窯跡の数は三〇基前後あり、中岳山麓における集中的な生産が想定される。

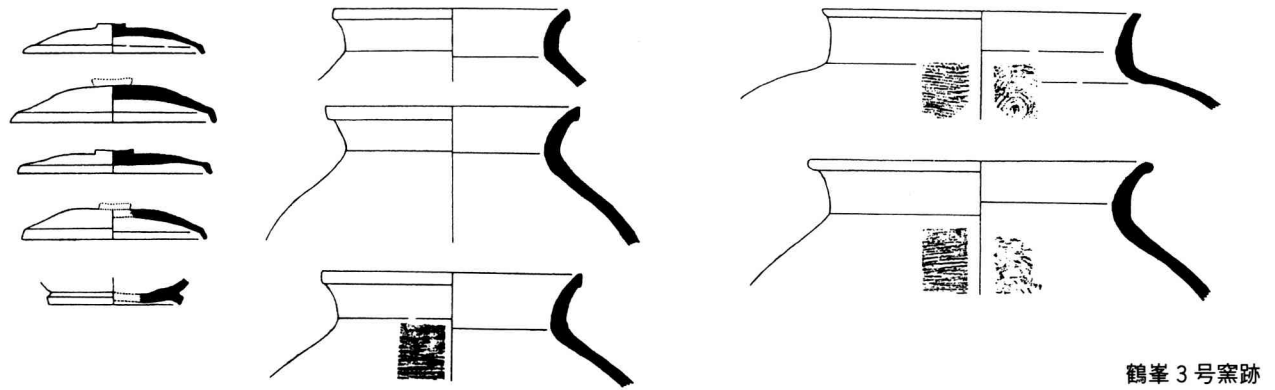
出土遺物は壺・甕のみで、器形的特徴から九世紀代から一〇世紀初めの年代が考えられている(図29)。また、壺の底部外面に同心円タタキを施すものがあることから、上村俊雄氏<sup>(25)</sup>・網田龍生氏<sup>(26)</sup>は肥後荒尾地域の窯跡出土資料との共通点を取り上げ、開窯は「肥後(荒尾)の工人によるもの」と想定されている。また、窯体の支柱に使用されたと考えられるスサ入り粘土柱が出土しており、鶴峯三号窯跡などの類似性を伺わせる。

以上のように、薩摩国で須恵器窯跡が知られているのは二ヶ所のみであり、極めて少ないものといえる。时期的には八世紀以前の窯跡は確認されておらず、九世紀以降に盛んな操業がおこなわれるようであるが、



下村窯跡群C-3号窯跡灰原

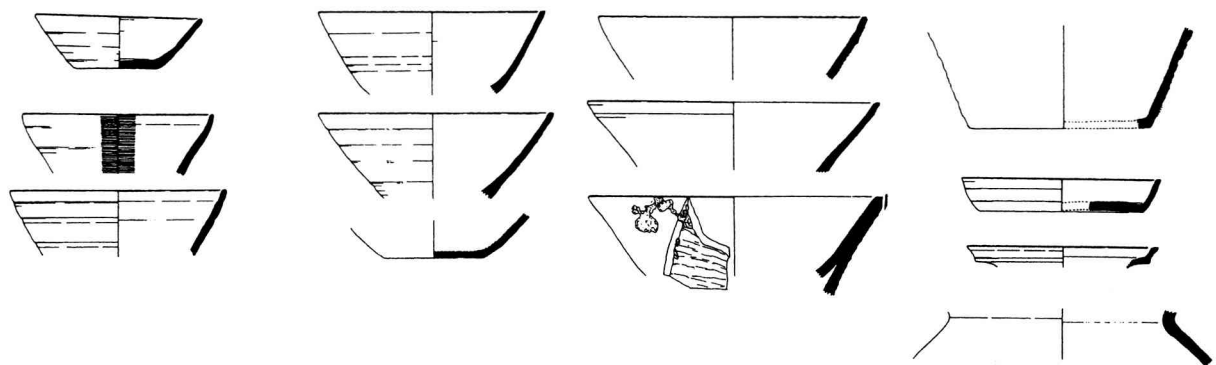
図27 日向国内の窯跡出土遺物②



鶴峯3号窯跡



中岳山麓窯跡群



岡野Ⅲ号窯跡

図28 薩摩国・大隅国内の窯跡群出土遺物

未調査のため実態は不明である。また、中岳山麓窯跡群は先述のように荒尾地域の工人により開窯されたものと想定されている。また、窯構造について、焼成部奥に支柱を設ける点は肥後国下り山窯跡群においても認めることができる<sup>(55)</sup>。このように、窯の操業や窯構造は肥後国内の窯跡群と共通する点が多く、影響を強く認めることができる。

### 大隅国

大隅国は現在の鹿児島県東部を中心とした地域にあたる。「和名類聚抄」によれば、大隅国内の郡として、菱刈郡・桑原郡・噌唼郡・大隅郡・始羅郡・肝属郡・馭謨郡・熊毛郡の八郡があげられるが、大隅国は七三(和銅六)年に噌唼郡・大隅郡・始羅郡・肝属郡の四郡で成立し、七一七〜七四九(養老〜天平)年間には桑原郡、七五五(天宝勝宝七)年に菱刈郡、八二四(天長元)年に多嶺島の併合により馭謨郡・熊毛郡を加え、結果八郡となったことが明らかにされており、立国・立郡過程は複雑である。大隅国の須恵器窯跡は少なく、菱刈郡で岡野窯跡群が確認されるのみである。

菱刈郡には、岡野窯跡群が所在する。岡野窯跡群は鹿児島県菱刈町に所在し、一九八二年に林道工事によって窯体が発見され、四基が調査された。Ⅲ号窯跡は最も残りがよく、地下式直立煙道窯である。残存長四・二メートルで、焼成部奥には分焰柱が認められる(図14)。出土遺物には杯・椀・鉢・盤・壺・甕があり、調査者によれば八世紀末〜九世紀初頭にかけての時期が考えられる(図29)。

以上のように、大隅国の須恵器窯跡は調査例が極めて少ない。窯構造については、岡野Ⅲ号窯跡は窯内に分焰柱をもっており、こうした特徴は薩摩鶴峰三号窯跡・肥後下り山五号窯跡などと類似している。北部九州ではあまり確認されることのないものであり、土質の関係も考えられ、この地域の特徴と考えられる。

### ③九州の須恵器生産動向から見た変化と画期

以上、かなり冗長となったが、八世紀以降の九州各国の須恵器生産について取り上げてきた(表1)。以下、その内容を生産パターン・窯構造・生産器種の各項目ごとに分けてまとめた上で、生産体制について言及していきたい。

#### 生産パターン

生産パターンとしてまず取り上げることができるのは、筑前牛頸窯跡群や筑後八女窯跡群のように、国内の一ヶ所の窯跡群で六世紀代から八世紀代にいたるまで継続して生産が認められるパターンである。肥後国でも、宇城窯跡群において六世紀代から生産が認められ、同様の生産パターンであったと考えられる。

一方、豊前国では小田富士雄氏の指摘にあるように、古墳時代から継続する窯跡群は認められず、豊後国・日向国・薩摩国・大隅国にいたっては、古墳時代の窯跡は未確認である。これらの地域に窯の操業が認められるのは、薩摩国を除くといずれも八世紀中頃から後半にかけての時期である。また豊前国では水晶山窯跡群への窯跡の集中が認められ、肥後荒尾窯跡群も八世紀後半には操業規模を拡大させており、群の一部は筑後国南部にまで及んでいる。以上のことから、八世紀中頃から後半の時期に新たな生産地の発生や生産の拡大が認められるパターンがあることが明らかになった。これは九州全体に認められる事象であり、生産地の集約化、生産規模の拡大としてとらえることができる。

しかし、八世紀末から九世紀初頭にいたると、多くの窯跡群が操業を停止、もしくは生産規模が減少するパターンが認められる。豊前水晶山系窯跡群や筑前牛頸窯跡群では窯跡の数が減少し、豊後松岡窯跡群は九世紀代へは継続しない。

表1 九州の須恵器窯跡群変遷表

国名	郡名	窯跡群名	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	
筑前	怡土郡										
	志麻郡										
	早良郡	新開窯跡		■							
		重留窯跡		■	■						
	那珂郡	牛頭窯跡群		■	■	■	■	■			
		地別当遺跡群					■	■			
	席田郡										
	糟屋郡	岩長浦窯跡群			■	■					
	宗像郡	稲元日焼原・三郎丸遺跡群		■	■	■					
	遠賀郡	野間窯跡群			■	■					
	鞍手郡	古門窯跡群				■					
		広江・八尋・宮崎窯跡群					■	■			
	嘉麻郡										
	穂波郡	井手ヶ浦窯跡群			■	■					
	夜須郡	小隈・山隈・八並窯跡群		■	■						
下座郡											
上座郡											
御笠郡	隈西小田窯跡群		■	■							
	雉子ヶ尾・裏ノ田窯跡群				■	■					
筑後	御原郡	菊又窯跡群			■	■					
	生業郡										
	竹野郡										
	山本郡										
	御井郡										
	三潁郡										
	上妻郡	八女窯跡群			■	■	■				
	下妻郡										
	山門郡										
	三池郡	勝立・片平窯跡群					■	■			
豊前	田河郡	天郷窯跡・号四郎窯跡									
	企救郡	水晶山系窯跡群			■	■	■				
	京都郡	向野山・殿川窯跡群			■	■					
		莊原池窯跡群					■	■			
	仲津郡	居屋敷窯跡	■	■							
	築城郡	船迫窯跡群			■	■					
	上毛郡	山田東・照日窯跡群			■	■	■				
	四郎丸窯跡群										
下毛郡	伊藤田窯跡群			■	■		■				
宇佐郡	野森窯跡群・新池窯跡群			■	■						
豊後	日高郡										
	球珠郡										
	直入郡										
	大野郡										
	海部郡										
	大分郡	松岡窯跡群					■				
	速見郡										
	国東郡										
肥前	基肄郡										
	養父郡										
	三根郡										
	神崎郡										
	佐嘉郡	神龍池窯跡		■							
		不動滝窯跡群									
	小城郡										
	藤津郡	光武窯跡群・高月窯跡群					■	■			
	杵島郡	向野山窯跡群				■	■				
		牧窯跡群						■	■		
松浦郡											
彼杵郡											
高来郡											
肥後	玉名郡	荒尾窯跡群			■	■	■	■			
	山鹿郡										
	菊池郡										
	阿蘇郡										
	益城郡	宇城窯跡群				■	■	■			
	合志郡	植木窯跡群					■	■			
	山本郡										
	飽田郡										
	託麻郡										
	宇土郡	宇城窯跡群			■	■					
八代郡											
天草郡											
葦北郡											
球磨郡	下り山窯跡群					■	■		■		

国名	郡名	窯跡群名	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀
日向	白杵郡	苅田窯跡群						■		
	児湯郡	古川窯跡								
	那珂郡									
	宮崎郡	下村窯跡群				■	■			
	諸県郡	松ヶ迫窯跡群				■	■			
薩摩	出水郡									
	高城郡	鶴峯窯跡群				■				
	薩摩郡									
	甑嶋									
	伊作郡									
	日置郡									
	阿多郡	中岳山麓窯跡群					■	■		
	河辺郡									
	額姪郡									
	揖宿郡									
	給黎郡									
谿山郡										
鹿児島郡										
大隅	菱刈郡	岡野窯跡群					■			
	桑原郡									
	噌嶽郡									
	大隅郡									
	始羅郡									
	肝属郡									
	馭謨郡									
	熊毛郡									

こうした状況にあって、肥後国や日向下村窯跡群・薩摩中岳山麓窯跡群などの中・南部九州においては九世紀代においてもなお生産を継続するパターンが認められる。筑後国では、八女窯跡群では九世紀代の窯跡は確認できないが、肥後荒尾窯跡群の一部と見られる勝立窯跡群において操業が継続しているようである。また、薩摩中岳山麓窯跡群は荒尾窯跡群の工人が操業に関わった可能性が示され、筑前牛頸石坂E―Ⅲ号窯跡でも二重口縁を呈する大甕の存在から肥後の工人の関与が想定され、九世紀代は肥後国を中心として須恵器生産がおこなわれ、その影響は各国に認められる。

また、現在のところ、九州で一〇世紀代に操業する須恵器窯跡は認められず、存在しても小規模なものと考えられる<sup>(21)</sup>。九州の須恵器生産は九世紀後半から一〇世紀に入る頃に各国とも終了しているが、その在り方は必ずしも明らかではない。

#### 窯構造

窯構造については、筑前牛頸窯跡群では七世紀後半には全長五メートル以下の小型の窯が出現し、以後八世紀前半には大型の窯も並行してつくられるが、八世紀中頃から後半になると小型の窯のみとなる状況が明らかにされた。一方、肥後荒尾窯跡群や豊後松岡窯跡群などでは全長七〜八メートルの比較的大型の窯をつくっていることから、筑前牛頸窯跡群における窯の小型化は顕著な特徴である。

窯跡の規模以外に築窯方法を見ていくと、豊後松岡窯跡群や日向国内の窯跡では半地下式の窯跡が認められたのに対し、筑前国・筑後国・肥後国においては地下式の窯跡が多い。また薩摩国・大隅国・肥後下り山窯跡群においては、焼成部内に天井を支える支柱が配置される事例が認められた。これらから、九州の東部・西部・南部においてそれぞれ異なる窯構造が選択されていたことが指摘される。窯構造の違いは地域ごとの地質の違いにより生じた可能性と、新たに操業を開始する窯跡群に

あつては招来された工人の故地にあるものを採用した可能性もあり、今後事例の増加を待つて検討したい。

### 生産器種

生産器種については、筑前牛頸窯跡群では八世紀中頃から後半にかけて窯の小型化とともに甕類の生産が認められなくなり、小型器種のみが生産がおこなわれることが明らかとなった。牛頸窯跡群における小型の窯の登場は七世紀後半にさかのぼり、八世紀前半代までは小型・大型の窯を使い器種を焼き分ける「窯間分業」がおこなわれている。これは成立したばかりの大宰府へむけて、蓋杯を中心とする小型器種を主として供給するためにとられた方法と考えられ、小型の窯の成立は小型器種の大量かつ安定的供給と効率的操作を目的として発生したと考えられる。また牛頸窯跡群では八世紀前半代が最も器種が豊富である。

これに対し、八世紀中頃から後半になり操業を開始または拡大する豊前水晶山系窯跡群・豊後松岡窯跡群・肥後荒尾窯跡群・下り山窯跡群では、豊富な器種の生産が認められる。一方筑前牛頸窯跡群では、甕類の生産が認められなくなるが、蓋杯をはじめとする小型器種の生産が続いている。器種の減少はあるが、この時期の生産量は極めて多く、中でも蓋杯の占める割合は高い。また、道ノ下一七号窯跡では、高杯などの出土から、小型器種の中でもさらに焼き分けをおこなう「窯間分業」があった可能性もある。こうした「窯間分業」は複数の窯跡が見つかった豊後松岡窯跡群でも認めることができ、窯ごとに焼成する器種が一律ではなかったことを示している。

特徴的な器種としては、筑前牛頸石坂C―II号窯跡・筑後管ノ谷二号窯跡で出土した肩部に突帯をつける長頸壺がある。これらは肥後国内で主として生産が認められるものであり、一部の器種において肥後の影響が九州北部におよんでいることを示しているが、豊前では肥後の特徴をもつ製品は今のところ生産が認められない。

また、二重口縁をもつ大甕は、福岡県下で集成を試みた結果、約四〇例あまりを取り上げることができた。破片資料が多いが、時期的には八世紀後半から一〇世紀代の年代が考えられた。こうした特徴をもつ大甕は、八世紀後半から九世紀初頭は肥後荒尾窯跡群・筑後片平窯跡・豊後松岡窯跡群などで生産が確認される。豊後松岡窯跡群ではこの種の甕は一点のみの出土であることから、この時期は肥後国を中心とした地域での生産が主と考えられる。九世紀中頃は筑前牛頸石坂E―III号窯跡において出土しており、肥後国以外でも生産が認められる。これらのことから、先に取り上げた福岡県下の事例のうち八世紀後半から九世紀初頭までのものは肥後国内で生産された製品が持ち込まれた可能性が高いと考えられる。

さらに福岡県下の出土状況を見ると、大宰府・筑後国府周辺での出土が六割近くを占める。特に大宰府周辺での出土が多いが、牛頸窯跡群で生産されない大甕が肥後国から大宰府へ供給されていることが明らかである。こうした結果は、小型器種を筑前牛頸窯跡群、大型器種を肥後国内の窯に求める「地域間分業」がおこなわれたためと考えられ、大宰府による須恵器生産政策に基づくものと考えられる。

九世紀以降になると、碗・壺・甕類が多くなり、全体として器種が減少している。筑前牛頸窯跡群では、先に述べたとおり石坂E―III号窯跡において二重口縁をもつ大甕の生産が認められ、肥後の工人の関与と考えられる。同様の甕は筑後勝立善徳五号窯跡においても認めることができ、薩摩中岳山麓窯跡群では操業開始は肥後の工人によるものと想定され、この時期の須恵器生産の中心が肥後にあり、その影響が各地に認められることは確実である。しかし、肥後における須恵器生産も肥後北山浦A号窯跡に見るように、九世紀後半代には生産器種は壺・蓋・皿と甕類の生産はなくなっており、一回の操業あたりの生産量も五〇個程度と生産器種・生産量ともに落ち込んでいる。



## 生産体制

九州の八世紀以降における須恵器窯跡の動向を見ていく中で、最も大きな画期と考えられるのは八世紀中頃から後半の時期と考えられる。この時期になると、九州島内で最も規模の大きい牛頸窯跡群では大型の窯を採用しなくなり甕類の生産を停止するとともに、小型の窯において蓋杯を中心とする小型器種の生産のみがおこなわれるようになり、生産志向が変化していると考えられる。しかし、生産器種は減少しているものの、窯跡の数は依然として多く、生産量自体は前代と同様ないしは増加している。

一方、この時期には新たに操業を開始する窯跡や、窯跡の数が増大し操業が盛んになる窯跡群がある。豊前水晶山系窯跡群は、それまで豊前中南部地域にあった窯跡群が、六世紀代に操業された天観寺窯跡群周辺に集中するようになる。肥後荒尾窯跡群では、この時期以降窯跡の数が増大し、その製品は肥後国内のみならず筑前・筑後・肥前など北部九州へ広がっている。このほか、豊後福岡窯跡群・肥後下り山窯跡群・日向下村窯跡群などそれまで須恵器生産を認めることができなかった地域に窯が造られるようになる。このように、八世紀中頃から後半の時期に九州各国で須恵器生産体制に変化を認めることができる。

また、九州内の須恵器窯跡の分布と変遷を確認して明らかになったのは、律令期における各国の須恵器生産状況は、「郡程度の領域を単位として窯業生産体制を整備する在り方」として北陸地方などで顕著な一郡一窯体制というものは認められないことが挙げられる。こうした状況は古墳時代においても同様であり、旧国内の広い地域で須恵器生産が確認できるのは筑前国・豊前国くらいで、筑後国・肥前国・肥後国は各国一〜二ヶ所程度の生産地しか確認することができず、豊後国・日向国・薩摩国・大隅国にいたっては、現時点ではこの時期の窯跡を確認することができない。

このような古墳時代以来の須恵器生産体制の中で、律令期の須恵器生産体制において最も著しい変化を見せるのは筑前国である。筑前国では、七世紀末から八世紀初頭になると牛頸窯跡群以外の地域では窯跡が少なくなる一方、牛頸窯跡群では窯跡の数が増加している。また、八世紀代に筑前国内で成立する窯跡については、宗像郡で窯跡の存在が想定されるが内容は明らかではなく、鞍手郡八尋・宮崎窯跡群などでは小型の窯を採用する点など牛頸窯跡群の影響下に成立したと思われる。したがって、筑前国においては、牛頸窯跡群における一國一窯体制が存在したものと考えられる。

このように、筑前国では一國一窯体制が律令期を通じて認められたが、他国では時期によって窯が国内の一つの地域に集中する場合がある。筑後国では、古墳時代の窯跡は少ないが、八女窯跡群では六世紀中頃から八世紀後半にいたるまでの生産が確認されており、特に八世紀前半においてはこの地域に窯が集中している。また肥後国では、宇城窯跡群において六世紀代から八世紀代にいたるまで生産が続けられており、特に八世紀前半においては、この地域に窯が集中している。さらに豊前国では、八世紀後半になると窯が水晶山周辺に集中する状況が認められる。以上の例は、約半世紀ほどの間に国内の一つの地域で集中的に窯の操業が認められるものであり、一時的に一國一窯体制が志向されたと評価することも可能かもしれないが、今後調査の進展をまっけて再検討する必要がある。

また、筑後国・肥前国・肥後国・日向国では、同時期に国内の数カ所で窯の操業がおこなわれている。窯は郡ごとではなく、平野・盆地などある一定の地形的なまとまりの下に設けられているようであり、律令制下の郡とは異なる何らかの地域圏を反映している可能性がある。

#### 4 まとめ

八世紀以降、牛頸窯跡群では生産規模が拡大していく。窯構造は、七世紀後半以降、全長五メートルを下回るような小型の窯が採用され、小型化は八世紀を通じて進行していく。小型の窯では蓋杯を中心とする小型器種の生産が盛んであり、八世紀中頃から後半になると、甕類を生産しなくなっている。これらのことから、牛頸窯跡群では、八世紀以降、大宰府における饗宴・蕃客の接待などに使用する供膳具中心の生産へ移っていることが分かる。一方、消費地である大宰府政庁周辺では、八世紀後半ごろには肥後国内で生産した甕が出土する。このことは、牛頸窯跡群で生産されなくなった甕を他地域に求める「地域間分業」の結果と考えられる。こうした在り方から、大宰府による須恵器生産政策が存在し、牛頸窯跡群は大宰府の指導の下に生産がおこなわれたと考えられる。また筑前国内における須恵器窯跡群の動向から、七世紀後半以降の操業は牛頸窯跡群に集中することから、一国一窯体制がとられ、群は国レベルの生産をおこなっている。さらにその製品は、胎土分析により肥前大黒町遺跡<sup>(52)</sup>や豊後石田遺跡<sup>(76)</sup>など広範に供給されることが知られることから、国レベルを超えた生産をおこなうことが明らかになった。

一方、西海道においては、八世紀中頃から後半にかけて各国ともに新たな須恵器生産地の成立や既存の生産地の再編がおこなわれていることが明らかになった。各国ともに須恵器生産体制が整うものと考えられるが、その在り方は、筑前国は一国一窯体制、豊前国は一国一窯体制を志向したと考えられる。その他の国においては、基本的には一郡一窯体制はとられておらず、肥後国のように国内の数カ所に生産地が設けられるのが一般的であったようである。この時期に新設・再編される窯跡群の中には、日向下村窯跡群のように国府の近くに設けられ、国レベルの生

産を担った窯跡群もある。しかし、肥後国において、荒尾窯跡群や下り山窯跡群のように国府とは離れた地域で操業がおこなわれることは、この時期の窯跡群すべてが国府に近接し、国府への供給を目的として生産がおこなわれた訳ではないことを示している。またこれらの窯跡群は、平野・盆地などある一定の地形的なまとまりの下に設けられることから、供給範囲は郡内に止まらない可能性が高く、網田氏の研究においても宇城・荒尾産須恵器が肥後国内外へ広範に供給されていることが明らかにされている<sup>(51)</sup>。このように、特に肥後国では、須恵器窯跡群は律令制下の郡とは異なる何らかの地域圏の下に設定され、その製品は郡を超えて国内の広い地域に供給されることが基本的な在り方と考えられる。こうした地域単位の生産体制は、事例が少ないながら肥前国・日向国においても認められるようであり、西海道各国の須恵器生産体制が一律ではなかったことを示している。

こうして八世紀中頃から後半にかけて各国で整備された須恵器生産体制は、八世紀末から九世紀初頭になると早くも変化が生じる。一国一窯体制にあつた筑前国ではこの時期を境に窯跡の数が急減し、九世紀に入るとさらに少なくなっており、豊前国においても窯跡の減少が認められる。これに対し、肥後国内では荒尾・宇城・球磨窯跡群といった地域単位の操業が盛んであり、日向国においても下村窯跡群・苺田窯跡群の在り方から操業が盛んな様子が伺える。また、薩摩中岳山麓古窯跡群や筑前石坂E-1三号窯跡など肥後国の工人の関与が想定される窯跡が各地に認められるのも九世紀代のことである。したがって、九世紀代は肥後を中心として薩摩・日向国などの九州中南部の各国で操業が盛んで、その影響は九州北部にまで及ぶようである。

以上から、八世紀代の中でも特に前半代では、筑前牛頸窯跡群における操業が顕著であり、その立地より大宰府の関与が極めて強いと考えられることから、西海道では大宰府中心の須恵器生産体制がとられていた

ものと考えられる。しかし、八世紀中頃から後半にいたると各国で須恵器生産体制が整えられ、九世紀に入ると肥後国中心の生産体制へ移行することが指摘できる。筑前牛頸窯跡群では、八世紀中頃から後半にかけて甕の焼成がおこなわれなくなり、消費地では肥後国で生産された甕が持ち込まれることから「地域間分業」を想定した。肥後国内の窯跡でも特に荒尾窯跡群の生産量の拡大は顕著であり、製品は肥後国内のみならず筑前・筑後・肥前各国にもたらされている。このことから、肥後荒尾窯跡群は国レベルを超えた生産がおこなわれ、生産の中心が肥後国へ移ることは明らかである。

このような八世紀以降の須恵器生産体制の動向について、社会的背景について考察してみたい。

先述したように、菱田氏は八世紀中頃に窯業生産の画期があることを指摘し、国衙主導の生産が始まるとされている。<sup>(27)</sup>八世紀中頃から後半にかけて西海道各国で認められる新たな須恵器生産地の成立や既存の生産地の再編が、すべて国衙主導であったとは言い切れないが、日向国の事例から大きな要因であったことは確実であろう。

また、鉄生産について、長屋伸氏は福岡県福岡市元岡・桑原遺跡群等の事例から筑前国志摩郡を中心とする地域で八世紀後半に最盛期を迎えるのに対し、九世紀代になると急速に衰退し、肥後小岱山麓に大規模な製鉄遺跡群が営まれることを明らかにしている。<sup>(27)</sup>氏の指摘は、須恵器生産だけではなく、鉄生産も九世紀代になると肥後国中心に移行することが明らかとなった。

さらに山村信榮氏は八・九世紀代の西海道について、九世紀になると郡衙と推定される遺跡が小規模化し、各国の国府では礎石建物に変更され壮麗化するのに対し、大宰府政庁および周辺官衙群では八世紀代のものを維持し、停滞する状況が指摘された。<sup>(28)</sup>西海道下で最も盛んに操業をおこなった筑前牛頸窯跡群は、緑釉や灰釉などの施釉陶器生産に移行す

ることなく八世紀末から九世紀初頭には操業を縮小している。瓦生産に見るように、常に当時の最新器種を生産してきた牛頸窯跡群がこの時期に衰退するのは山村氏の指摘する大宰府の停滞状況と不可分であり、政庁や周辺官衙において八世紀ほど多量の須恵器を必要としなくなる状況があったためと思われる。また、氏の指摘される九世紀における地域の瓦解は急激な需要減を招き、大宰府だけではなく筑前国内の須恵器生産を担う牛頸窯跡群の生産組織を破壊していると考えられる。牛頸窯跡群で最後に操業がおこなわれたと考えられる石坂E—三号窯跡は、こうした生産組織の崩壊に対し、肥後国内の窯工人の力を借りて甕中心の生産を目指した結果と考えられるが、その試みは成功しなかったようである。

以上のような、筑前牛頸窯跡群の終焉過程や筑前国から肥後国への須恵器・鉄生産体制の移動について、明確な理由は分からないが、参考として延暦一四（七九五）年に肥後国が上国から大国へと昇格することを挙げておきたい。板楠和子氏は、その背景として「肥後国は、天武系から天智系に切りかわった光仁天皇即位にさいし、白亀瑞祥による宝亀改元（七七〇）年という重要な役割」を果たし、桓武天皇との関わりも指摘されている。<sup>(29)</sup>この時期は、肥後荒尾窯跡群が生産を拡大し、須恵器生産の中心が筑前国から肥後国へ動き、肥後国内で地域レベルの生産体制が整えられる頃であり、大いに注目すべき点と考えるが、本稿は考古学的成果を取り上げたものであり、これ以上の言及は差し控えたい。

## おわりに

以上のように、八世紀以降の九州の須恵器生産体制についてまとめてきた。今後の課題としては、消費地出土の須恵器の生産地推定が可能となるように、各窯跡群の製品の特徴を整理・確認していくことが挙げられる。客観的なデータとしては、胎土分析結果があり、大いに活用して

いくべきものである。また、肉眼観察に基づいた考古学的な手法による産地推定は熊本県内で開始されている。しかし、全体としては研究の遅れている分野であり、牛頸窯跡群を抱える筆者にとつての課題である。次に、今回は瓦生産について取り上げることができなかった。筑前牛頸窯跡群では七世紀後半以降、須恵器のみの生産へ移り、瓦窯は大宰府周辺で操業がおこなわれ、それぞれ別個の生産組織があったものと考えられる。しかし、肥後宇城窯跡群では瓦窯と並存する場合もあり、生産体制について考える上で重要な課題である。また、特に九世紀以降の須恵器編年は今後検討していくべき分野である。さらに、今回の報告に掲げた資料の内、実見を果たしていない資料も多く、誤解をしている部分もあるかもしれない。ご叱正を賜りたい。

最後に、本稿をなすにあたっては、左記の方々から研究会での有益なご助言を賜り、遺物実見の際には多大な便宜を図っていただいた。記して感謝の意を申し上げる次第である。また、本稿がその学恩に報いることができたのか甚だ心もとない。今後とも研鑽に努めたい。

網伸也・網田龍生・池田榮史・池邊千太郎・小田富士雄・金田一精・北野博司・齋部摩矢・坂井義哉・佐藤浩司・出合宏光・徳永貞紹・中島恒次郎・中村浩・中村渉・林潤也・藤原学・舟山良一・松林豊樹・美濃口紀子・村木二郎・望月精司・山田邦和・山中章・山村信榮(五〇首順、敬称略)

註

- (1) 北陸古代土器研究会一九九四『北陸古代土器研究』第四号
- (2) 窯跡研究会一九九九・二〇〇四『窯跡研究会第一・二回シンポジウム須恵器窯の技術と系譜一・二』
- (3) 三辻利一氏の一連の研究による。
- (4) 舟山良一・松本敏三・池田榮史一九九六『須恵器集成図録』第五卷西日本編 雄山閣

- (5) 小田富士雄・柳田康雄一九七〇『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財調査報告書 四三集
- (6) 上野精志一九九三「II. 位置と環境」『牛頸小田浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第四〇集
- (7) 酒井仁夫・石松好雄・高橋章一九七九『神ノ前窯跡』大宰府町文化財調査報告書第二集
- (8) 大脇清一九九一「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅹ』奈良国立文化財研究所学報第四九冊
- (9) 中村昇平・森井千賀子二〇〇四「ウトグチ遺跡B地点」春日市文化財調査報告書第三九集
- (10) 石松好雄ほか二〇〇二「大宰府政庁跡」九州歴史資料館
- (11) 須恵器の器種分類呼称については、奈良文化財研究所の使用する平城京分類によった。
- (12) 舟山良一一九九九「九州の須恵器窯」『窯跡研究会第二回シンポジウム須恵器窯の技術と系譜』
- (13) 石木秀啓二〇〇四「筑前」『窯跡研究会第三回シンポジウム須恵器窯構造資料集 二』窯跡研究会
- (14) 池辺元明ほか一九八九「牛頸窯跡群Ⅱ」福岡県文化財調査報告書第八九集
- (15) 舟山良一一九八五「牛頸石坂窯跡—C地点—」大野城市文化財調査報告書第一四集
- (16) 徳本洋一・舟山良一・石木秀啓一九九五「牛頸塚原遺跡群」大野城市文化財調査報告書第四四集 SK-11は七世紀代から八世紀後半までの遺物を含んでいる。このため、突帯をもつ長頸壺はこの時期にあたらぬ可能性もある。
- (17) 中村浩ほか二〇〇四「牛頸本堂遺跡群Ⅱ」大野城市文化財調査報告書第六四集
- (18) 松本健郎ほか一九八〇「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」熊本県文化財調査報告書第四八集
- (19) 小田富士雄ほか一九七七「天観寺山窯跡群」北九州市埋蔵文化財調査会
- (20) 舟山良一一九九四「IV-11. 廃棄土坑(SK)出土土器について」『牛頸日ノ浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第四二集
- (21) 中村浩・石木秀啓二〇〇五「牛頸本堂遺跡群Ⅲ」大野城市文化財調査報告書第六八集
- (22) 石木秀啓一九九七「牛頸石坂窯跡—E地点—」大野城市文化財調査報告書第四九集
- (23) 中村浩編一九八九「第五章 遺物」『牛頸ハセムシ窯跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第三〇集 なお数量については、表に挙げられている数値を再計算したものである。註22に同じ

- (24) 石木秀啓二〇〇四「九州の須恵器生産―特に八世紀以降を中心として―」『第七回西海道古代官衙研究会資料集』
- (25) 中村浩一九九〇「研究入門須恵器」柏書房
- (26) 宇野隆夫一九九四「一郡一窯の体制について」『北陸古代土器研究』第四号
- (27) 菱田哲郎二〇〇二「考古学からみた古代社会の変容」『日本の時代史五 平安京』吉川弘文館
- (28) 岡田裕之二〇〇三「北部九州における須恵器生産の動向」『古文化談叢』第四九集 九州古文化研究会
- (29) 名古屋博物館一九九二「和名類聚抄」名古屋博物館資料叢書Ⅱ 以下郡名などはこれに準ずる。
- (30) このうち、牛頸窯跡群が中心的に位置する大野城市は近世では御笠郡にあたる。一方、大野城市大字牛頸所在のハセムシ窯跡群一二地区出土のヘラ書き須恵器には奈珂(那珂)郡と記載されており、大野城市南部においては古代には近世と異なる郡域設定があったと想定される。しかし、古代の那珂郡の範囲については現段階では明らかではなく、牛頸窯跡群の範囲は御笠郡の一部にまでおよぶ可能性があるが、ここでは一応牛頸窯跡群全体を那珂郡としてとらえておきたい。
- (31) 佐藤昭則一九九七「地別当遺跡群」那珂川町文化財調査報告書第四〇集
- (32) 西村康一九八三「陶邑・猿投・牛頸」『奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集 文化財論叢』
- (33) 旧稿ではこれらを一括して筑前東部窯跡群として取り上げたが、広江窯跡はやや離れた位置にあり、領域の設定として適当ではないため改めた。
- (34) 田村悟一九九四「広江窯跡」直方市文化財調査報告書第一六集
- (35) 池ノ上・曲田・古後一九九四「八尋遺跡群」鞍手町文化財調査報告書第九集
- (36) 白木ほか二〇〇一「三郎丸・堂ノ上C」宗像市文化財調査報告書第五〇集
- (37) 小田富士雄ほか一九六九「塚ノ谷窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅰ―八女市教育委員会
- (38) 小田富士雄ほか一九七二「立山山窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅳ・総集篇―八女市教育委員会
- (39) 小田富士雄ほか一九七二「管ノ谷窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅲ―八女古窯跡群調査団
- (40) 山田元樹一九九四「久福木・立山遺跡Ⅱ 勝立・善徳五号窯跡」大牟田市文化財調査報告書第四四集
- (41) 坂井・山田・中村二〇〇四「片平窯跡」大牟田市文化財調査報告書第五八集
- (42) 小田富士雄一九七七「第三部 第三 豊前地方における須恵器生産の諸問題」『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会
- (43) 池辺・飛野・高橋一九九五「照日遺跡群」新吉富村文化財調査報告書第九集
- (44) 田村和裕二〇〇三「洗子窯跡」北九州市埋蔵文化財調査報告書第二九九集
- (45) 森田勉ほか一九七六「垂水焼寺」新吉富村文化財調査報告書第二集
- (46) 栗焼健児ほか一九八五「伊藤田城山窯跡群」中津市文化財調査報告書第五集
- (47) 副島邦弘ほか一九九六「居屋敷遺跡」一般国道一〇号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第六集 福岡県教育委員会
- (48) 池邊千太郎二〇〇一「豊後須恵器窯跡について」『大分縣地方史』第一八〇号
- (49) 池邊千太郎二〇〇二「豊後の須恵器松岡窯跡の調査」第二四回九州古文化研究会発表資料
- (50) 石木秀啓二〇〇四「九州地域の古代後半期須恵器窯構造」『窯跡研究会第三回シンポジウム 須恵器の技術と系譜』
- (51) 網田龍生二〇〇三「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ 熊本大学文学部考古学研究室創設三〇周年記念論文集』時期に関しては、網田氏の見解に従うものとする。
- (52) 峯崎幸清一九九六「冬野瓦窯跡・光武須恵器窯跡調査概報 大草場遺跡発掘調査報告書」塩田町文化財調査報告書第一三集
- (53) 北方町一九八五「北方町史上巻」
- (54) 木下之治一九七六「牧古窯跡」北方町教育委員会
- (55) 松本健郎ほか一九八〇「生産遺跡基本調査報告書Ⅱ」熊本県文化財調査報告書四八集
- (56) 網田龍生一九九四「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究 熊本大学文学部考古学研究室創設二〇周年記念論文集』
- (57) 舟山良一九九六「一九九六年度の窯跡の発掘および研究の動向(その二)―九州」『窯跡通信』第六号
- (58) 坂本経亮一九七九「小代山麓古窯址群調査報告」『肥後上代文化の研究』
- (59) 植木窯跡群は山本郡内にあるが、山本郡は八五九(貞観元)年に合志郡より分置されることが明らかにされている(板橋和子ほか一九九九『熊本県の歴史』山川出版社)。取り上げる窯跡の年代からいくと立郡前と思われるため、合志郡として取り扱った。
- (60) 中原幹彦二〇〇二「平成一三年度植木町内遺跡発掘調査報告書」植木町文化財調査報告書第一五集
- (61) 山本文市二〇〇三「第六章 奈良時代の宇土郡 第一節 地方行政のしくみ」『新宇土市史』通史編第一巻
- (62) 中原幹彦一九九六「熊本の前墳時代須恵器素描」『肥後考古』第九号
- (63) 出合宏光二〇〇四「下り山窯跡の研究」『肥後考古学会第二二八回例会資料』
- (64) 石木秀啓二〇〇四「肥後」『須恵器窯構造資料集二 窯跡研究会』
- (65) 新東・青崎一九八五「カムイヤキ古窯跡群Ⅱ」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告

- 書(五)
- (66) 出合宏光二〇〇三「カムイヤキ窯跡と下り山窯」『琉球大学考古学研究集録』第  
四号
  - (67) 小田富士雄一九九二「日向における須恵器窯跡調査の成果」故石川恒太郎先生  
の業績に寄せて」『宮崎考古』第一二号 石川恒太郎先生追悼論文集
  - (68) 小田富士雄一九八三「延岡市・母田窯跡」『宮崎県文化財調査報告書』第二六集
  - (69) 註67に同じ
  - (70) 木村明史一九九二「下村窯跡概要報告書Ⅰ」佐土原町文化財調査報告書第七集  
木村明史一九九六「下村窯跡群報告書〈基礎資料編〉」佐土原町文化財調査報告  
書第一〇集
  - (71) 秋成雅博二〇〇四「宮崎市松ヶ迫窯跡について」宮崎考古学会第四八回例会資  
料
  - (72) 小田富士雄・河口貞徳一九七五「第四部 鶴峯窯跡の調査」『薩摩国府跡・国分  
寺跡』鹿児島県考古学会
  - (73) 上村俊雄一九八四「鹿児島県荒平須恵器古窯址群発見の意義とその問題点につ  
いて」『古文化談叢』第一四集
  - (74) 上村俊雄・坪根伸也一九八五「鹿児島県中岳山麓須恵器古窯跡群に関する一考  
察」『古文化談叢』第一五集
  - (75) 永山修一ほか一九九九「鹿児島県の歴史」山川出版社
  - (76) 宮内克己一九九六『市第一遺跡・石田遺跡』久住町教育委員会
  - (77) 長屋伸二〇〇四「八〇九世紀の鉄生産についての概要」『第七回西海道古代官衙  
研究会資料集』
  - (78) 山村信榮二〇〇二「九世紀の大宰管内」『古代文化』第五四卷第一一号
  - (79) 板橋和子一九九九第二章 律令国家の成立と展開」『県史四三 熊本県の歴史』  
山川出版社

(大野城市教育委員会、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇〇六年五月三十一日受理、二〇〇六年八月一〇日審査終了)

---

## The Remains of Ushikubi Kilns and the Kyushu Sue Ware Production System from the End of the 8th Century

ISHIKI Hidetaka

A study was made of production trends and changes in the types of ware produced at 8th century and later Sue ware kilns in Saikaido, present-day Kyushu, by investigating the remains of Ushikubi kilns in Chikuzen. It reveals that in Chikuzen at around the latter part of the 7th century there was a concentration of kilns at the Ushikubi kiln site, the result of a change to a system of one kiln per province. It is thought that this production system was intended to supply the Dazaifu government that was established during this period, and it would appear from the wide distribution of products that during this time the production system in Kyushu centered on Dazaifu. However, from the middle through to the end of the 8th century, new production areas emerged along with a reorganization of existing production areas in the island's provinces. There is no evidence of the production of jars ("kame") and large jars from this time at the Ushikubi kiln site, and the size of kilns became smaller as well. Large jars produced in Higo have been excavated from the area surrounding Dazaifu, suggesting that they replaced those made at Ushikubi. This is thought to represent an inter-regional division of labor whereby jars from Higo not produced in the Ushikubi kilns were brought to the area, suggesting the existence of a policy in Dazaifu for the production of Sue ware. Sue ware production prospered in Higo Province from this time through the 9th century. Its products were taken around the country where they had an influence on earthenware made in local kilns. From this we can assume that from the middle through to the latter part of the 8th century the production system centered on Dazaifu gradually changed to a system that centered on production in Higo, illustrating that in Kyushu the center of production was shifted at different times.

Although there were other provinces in Kyushu that like Chikuzen had a one province, one kiln system for Sue ware production, basically systems were arranged on a regional level with a particular geographical area, such as a plain, comprising one unit. There are many remains of kilns from Higo Province that were actively producing during the period from the middle through to the end of the 8th century, which serves as a good example of a production system adopted on a regional level.

During the 9th century Higo Province not only produced Sue ware but also began concentrating on iron production, a change indicative of the decline of the Dazaifu government and surrounding government offices. This suggests that a transformation was taking place in local communities involved in production marking a change from the 8th century, though as the reasons for this are unclear further investigation is needed.